
東方Project 帝国陸軍上等兵の幻想入り

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方Project 帝国陸軍上等兵の幻想入り

【Nコード】

N3228N

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

南方戦線で米軍と交戦し左目を失った主人公は、ジャングルをさまよっていたらいつの間にか鳥居の柱にもたれかかっていた。そこには、紅白の服を着た少女がいた。

80000PV、15000ユーニクを突破しました！ご愛読、ありがとうございます！

現在、不定期更新中です。

幻想入り（前書き）

キャラクターの性格が少し違つかもしれませんが、そこは見逃して
ください。
では、どうぞ。

幻想入り

太平洋戦争中、南方戦線のジャングルを1人の上等兵がさまよっていた。彼は、戦闘で負ったのであろう、左目に包帯を巻いていた。包帯には、血がこびりついている。服にも血が付いている。

「・・・」

彼、谷泉希は小銃を杖代わりにして、無言で歩いていた。ともかく、米軍から逃げないといけない。敵に自分の死体を見つけて欲しくない。その思いで歩いていた。

「・・・ここで良いか・・・」

泉希は、そこに何十年も立っていたであろう、一本の大木の前で立ち止まった。そして、その幹に寄りかかって座った。儚い人生だった。と思い、目を閉じた。

すると、何処かに吸い込まれるような感じがして目を開くと、目の前に赤い柱が立っていた。上を見上げると、その特徴的な形が目に入った。

「・・・鳥居か？」

そこに立って居たのは、日本の神社の入り口に立っている鳥居だった。死ぬ前に見る走馬灯と言うのはこんな物なのか？と思った。しかし、視界がどんどん暗くなっ行って行き、思考も働かなくなった。

その時、遠くでカランと言う音が聞こえた。暗くなりかけている視界でそちらを見ると、賽銭箱の蓋であろう四角い物体と、この神社の巫女らしき一人の少女が立ってこちらを見ていた。

それを確認した後、視界全体が黒く染まった。

鳥の鳴き声が聞こえた。ゆっくり目を開けると、天井があつた。見たことが無い天井だったが、どこかで見たことがある天井だった。体を起こそうとすると、体の節々が痛んだ。

「うぐ……」

体が痛むのを我慢して、起き上がった。畳が敷かれている部屋に寝かされていたらしい。障子が開いており、外には日本で見慣れた松やイチヨウなどの木が立っていた。遠くの方からアブラゼミの声も聞こえる。

「……ここは日本なのか？」

そう呟いた時、外の方から声が聞こえた。

「おお！霊夢、起きてるぞ！」

そう言ったのは少女だった。が、頭に角のような物が2本生えていた。その手にはひょうたんを持っている。

「なあ、名前はなんていうんだ？」

その少女らしき動物が近づいてきた。

「谷泉希だが……そっちは？」

「伊吹萃香だ。いぶきすいかなあ、酒飲むか？」

萃香がひょうたんを突き出した。

「酒って・・・お前、何歳だ？」

「いくつって・・・何歳だっけ？何百年生きてるからな・・・」

呆れていると、萃香の後ろに紅白の服を着た女性が出てきた。

「萃香、怪我人にお酒を勧めないの。・・・すみません、このつるぺた幼女がおかしな事やって。」

「つるぺたって言うな」

本人は怒っているようだが、全然怖くない。少し苦笑いをこぼした。

「そういえば、名前は？」

「ああ、谷泉希だ。大日本帝国陸軍に所属している。」

「大日本帝国？外の世界の国かしら。私は、博麗霊夢はくれいれいむって言うの。ようこそ、「幻想郷」へ。」

幻想郷と言う言葉に違和感を感じた。

「幻想郷？日本じゃないのか？」

「ええ。ここは、妖怪と人間が住んでいる幻想郷って言うところなの。萃香も種族は鬼なの。」

確かに、萃香は角が生えているから普通の人じゃない。さつき、何百年も生きているとも言っていた。

「幻想郷・・・と言う事は、あの地獄でもないのか・・・」

南方戦線で失った戦友や上官を思い出した。

「一つ質問しても良い？その左目はどうしたの？」

「・・・少しあつてな。もう失明してる。」

「・・・そう。お茶を入れてくるわ。」

霊夢が部屋から出て行き、2人が残った。

「霊夢、なんか病気でめかかったかな？」

「どうしてだ？別におかしい所は無かったが。」

「いつもなら、そんなに人の過去を聞くような性格じゃなかったんだ。それに、人には興味を持たないのに、今日は何か違ったぞ。」

「そうなのか？」

しかし、どこかで見たことがある光景だ・・・外の方を見て思った。故郷にはこんな風景は無かった。それじゃあ、何処で？

「どうした、泉希？外見てボーとして。」

「いや・・・どこかで見たことがあるんだ。」

「ふーん。そうだ、酒飲まないか？」

どうやら、酒を飲ませないと気が落ち着かないらしい。

「それじゃあ、頂くよ。」

ひょうたんを受け取った。中から、日本酒の香りがした。取り合えず、一口飲んでみた。

「・・・少し、きつくないか？」

「これが普通だよ。」

萃香がひょうたんを取って、ぐびぐび飲んでいった。かなりの呑べえだと思った。

「そう言えば、妖怪って言っていたけど鬼の他にも居るのか？」

「ん？ああ、魔法使いとか天狗とかいるぞ。後・・・なんか居たっけ？」

駄目だ。流石は呑んべえだ。後で霊夢にでも聞いておこう。その時、外で黒い物体が落ちてきた。人の形をしている。

「霊夢さん。新聞ですよー。ってあれ？貴方は？」

そこにはまた一人少女がいた。

「うん？谷泉希だ。最近、外の世界から来たんだ。」

「外の世界？」

「あ、泉希！それを言ったら……」

萃香が慌てて静止したが、間に合わなかった。

「お話聞かせてもらってもよろしいですか！？」

さっきの少女が目の前まで来ていた。

「あ、ああ。どうぞ。」

「まず何処から来たんですか何故幻想郷に着たんですか何故霊夢さんの家に居るんですか何故……」

「ちょ、ちよつと待ってくれ。一度にそんな質問されても困るぞ。」

「す、すみません。いつもの癖で……つと自己紹介もしてませんでしたね。私は射命丸文しゃめいまるあやと言います。新聞記者をやっています。」

さつき気付いた事なのだが、背中に黒い羽が生えている。やっぱり、妖怪の一種なのだろうか。

「それじゃあ、取り合えず出身だけ言っておこうか。俺は日本から来たんだ。」

「日本？そこでは何を？」

「・・・」

あれっという声がした。どうやら自分の顔が暗くなったせいだろう。

「ああ、すまん。日本でやってたことだが・・・」

「いや、いいですよ。言いたくない事なんでしょうから。それより、霊夢さんが努力したという事が問題ですよ。左目を失うほどの戦いだっただからです、かなりの怪我だったんでしょうけど、霊夢さんが命を救うほど努力するとは思えないし・・・」

ちょうどその時、霊夢が帰ってきた。

「噂をすれば何とやらだな。」

俺が一人で納得したが、文の表情が固まっていた。

「文、さっきのは誰の事言ってたのかしら？」

「は、はは、冗談に決まってじゃないですか・・・」

文はなぜか泣きそうな顔をしている。そんなに怒った霊夢が怖いのだろうか？

「まあいいわ。それより、寝て無くて大丈夫なの？無理してたら治る怪我もなおなくなるわよ。」

「そのくらい承知してるさ。親父が医者だったんだからな。」

文がへーと言いながら、文花帖と書かれている本に書き込んでいた。

書き終えた後、うん？と言った。

「霊夢さん、貴方らしくない発言でしたね。いつもなら、怪我をしても救急箱を持ってきて「後は自分でやっておきなさい。」て言ってた筈ですよ？まさか、泉希さんにひと・・・」

「そ、そんな事無いわよ！怪我がいつもより酷かったから心配してるだけよ！」

文がニヤニヤしながらふーんと言った。俺には何の事だかさっぱりだ。

「さて、私はこれで失礼します。いいスクープも手に入った事だし。」

文が外に出て、服の中から一枚の紙を取り出した。お札ぐらいの大きさである。

「風神少女！」

そう言った後、発光し始めた。光が消えた後、聞きなれない音がして消えた。

「・・・いったい今のはなんだったんだ？」

「スペルカードよ。自分の技をあの紙に書いておいて、戦うときにさつきみたいに技名を言って発動させるものなの。」

「スペルカードか。」

少し眠くなってきた。さっきの酒が回ってきたみたいだ。

「すまないが、少し眠らせてくれ。疲れたみたいだ。」

そう言って寝た。目を閉じた後、ふすまの開く音がした。

幻想入り（後書き）

ご感想をお願いします。

改造三八式彈幕銃（前書き）

キャラクター設定

谷泉希 たにみずき

大日本帝国陸軍上等兵、南方戦線にて戦闘、左目を失う。18歳
幻想郷では、ゆっくり暮らしたいと思っている。が、萃香や文に邪魔をされる。

性格上、困っている人は見捨てられない。

能力 大日本帝国陸軍上等兵である程度の能力。

柔剣道が出来る程度の能力

銃火器が扱える程度の能力

酒に強い程度の能力

出来る程度の能力（今は使えない）

その他のキャラクターは原作どおりです。

改造三八式彈幕銃

俺がこちらに来て1ヶ月が経った。その間、萃香には酒を飲まされるは、文には日本の事を聞かれるわで怪我人なのに忙しかった。

それと、文が出版している「文々。新聞」で俺が医者だったと書いてあったせいで、近隣の妖怪や人、妖精が怪我人を運んでくるようになった。

医者である親父に教えてもらってはいたが、経験が無かった。まあ、全員が擦り傷や打撲などの軽い怪我だったから簡単に治せたが・・・霊夢のほうは、今の神様から医者の神様に宗旨替えするとか言い始めて大変だ。何でも、博麗神社の賽銭の量が増えたらしい。たぶん、俺のせいだろう。

俺宛の手紙も増えた。ほとんどがお礼の事で、極少数に恋文ラブレターなんてものが混じっているが・・・

それが来るたびに霊夢の機嫌が悪くなる。どうしてだ？

そんな事より、三八式歩兵銃が無くなっていると思っていいたら、霊夢が、河童のにとりつて奴が持つて行っただと言っていた。今日、返してくれるそうだ。

「こんにちは、借りてた物、歸しに来ました」

ちょうど持つてきてくれたらしい。

「ちょっと待つてくれ。すぐに行く。」

起き上がって、玄關に行く。怪我の直りが早いため、自由に行動ができるようになった。玄關に付いたとき、背中に何か背負っている少女がいた。その少女が、自分の顔を見た時、ヒツと言った。片目に包帯を巻いてるから仕方ないか・・・

「す、すみません。」

「いや、その反応には慣れたから・・・」

怪我をして来る人の中には、子供もいる。もちろん、俺の顔を見て泣き出す。そんなに怖いのだろうか？

「あ、そうでした！借りていた物を返しに来ました。どうぞ。」

彼女は、背中にかけてある銃を渡してきた。その後、肩を叩いていた。重かつたらしい。

「ああ、ありがとう。って遊底は何処やった？」

三八式歩兵銃の弾を込めるところが無い。もともとあった所に穴が開いているだけだった。

「す、すみません。銃弾の製造が出来無さそうだから、改造させてもらいました。」

「改造つて・・・まあ良い。で、改造内容は？」

「まず、銃弾は無いことが一番です。次に、自分の魔力を銃弾にすることで発射できます。名称は、河型改造三八式弾幕銃です。」
かわがたかいぞうさんばちしきだんまくしゅう

「魔力つて・・・俺は一般人だぞ？」

「大丈夫です！私が密かに計測した結果、貴方には妖怪並みの魔力があるようです。」

密かにつて・・・いつ測ったんだ？

「ともかく、何発くらい打てるんだ？」

「確か、一日に最大五〇〇〇発射撃可能です。全弾撃ち尽くしたら、凄い疲労感を感じるのでご注意を。撃ち方の方は、説明書を付けてますので、そちらを見てください。それでは、失礼します。」

軍人のような振る舞いに呆れたが、今までよりも軽くなった三八式を見た。感覚的には、人は殺せないようになったと感じた。

「・・・暫くは様子見か・・・」

「泉希、どうしたの？お客さんだったみたいだけど。」

霊夢が顔を出した。

「いや、例の持っていていかれていた物が帰ってきたんだ。改造されているが・・・」

「ああ、それ？三八式歩兵銃って言ったっけ？」

「ああ。名前が三八式弾幕銃に変わったけどな。」

「弾幕って言う事は・・・スペルカード使えるの？」

「さあ？使えるんじゃないのか？」

「じゃあ、作ってみる？結構役立つと思うよ？」

正直、悩んだ。スペルカードを持っていれば、文のように空が飛べたりする。しかし、武器だと弾幕と呼ばれるものを発射するらしい。その弾幕は、当たり所が悪ければ人間を死なせてしまう物だと聞いている。

そういえば、スペルカードには演劇タイプがある。それなら人を傷つけない。むしろ、楽しませる事が出来る。花火のような物なら三八式で上に向けて撃てば出来るはずだ。

「試しに演劇タイプのスペルカードを作ってみる。どう作るんだ？」

「まず、この札を持つて。」

一枚の札を差し出された。表も裏も真っ白だった。

「それで目を閉じて、想像しているスペルカードの内容を思い浮かべて。」

小さい頃、親父に連れられて見た花火大会を思い浮かべた。幾つもの花火が上がっていた。

「それで完成。簡単でしょ？」

目を開けてみると、札の表側に思い浮かべた光景の一部分が描かれていた。札の名前は、炎符「幻想花火連弾」と書かれていた。

「スペルカードは、自分の能力内で出来る事しかスペルカード化しないから、飛ぶスペルカードは元々飛べる文みたいな人しか出来ないの。」

「じゃあ、このスペルカードは俺の能力なのか？」

「正確には、その銃の能力でそれを扱えるから、スペルカードに出来たんだと思う。それで、試しに使ってみる？」

「・・・いや、やるなら夜のほうが良いだろう。折角の花火なんだから、楽しまないと。」

「そうね。そうだ！試した後、成功したら夏祭りをしようかしら。どう思う？」

夏祭りか、確かに名案だ。人間の里の人達も喜ぶだろう。出店が出たりするから、かなり賑やかになるはずだ。

「良いと思う。けど、どうやって宣伝「ご心配なく！この射命丸文、責任を持って宣伝させていただきます！」・・・何時から居たんだ？」

玄関の外に新聞記者の文がいた。何処から話を聞いていたのだろうか？

「宣伝の方は心配無いとして、後は試射が成功するかが心配ね。」

責任重大である。

夜になった。何処で聞いたが分からないが、萃香や怪我を治してやった妖精達が見物に来ていた。特に萃香は、花火を酒の肴にして飲むつもりらしい。

「こっちだって苦勞してるのに・・・」

返しに来た河童が持っていた説明書を読みつつそう言った。

「スペルカードの発動は、その札の名前を言って発動させる。この銃の場合発動させた後、元々遊底だった所に入れて発動させる。その後は、引き金を引いて発射する。・・・なるほど。」

簡単だな。けど、衝撃については一言も書かれていない。そこは未知数か。まあ、やるだけやってみよう。

「おい、泉希。早く始めてくれ。」

萃香が大声で言ってきた。2kmほど離れているのにはつきり聞こえる。それじゃあ、始めるか。

「炎符「幻想花火連弾」！」

札を中に入れた。すると、銃自体が光り始めた。三八式の銃口を空に向け、引き金を引いた。ドン、と言う軽い音がして、複数の光が上がって行った。数秒後、5、6個の大きな花火が広がっていた。銃の衝撃も、前よりも少なくなっている。成功だ。続いて、第二射めを発射した。今度は、違う色の花火が上がった。

何回か発射して気付いたが、どうやら使っている使用者の考えで形や色が違うらしい。数は相変わらず5か6発が一度に発射されている。次の花火を発射しようと引き金を引いたが、出なくなった。どうやら、スペルカードの効果切れらしい。

「・・・終わりにするか。」

38式の銃口を下げた。みんなの所に戻るか。

博麗神社に戻ると、霊夢が出迎えてくれた。

「どうだった霊夢。成功したみたいだったけど、こっちからはよく分からないんだ。」

「大成功だったわ。これで、夏祭りの開催決定ね。」

と、言う事はまた俺が花火発射をする事になるのか。

「それじゃあ、文。お願いね。」

「了解しました！」

霊夢の後ろにいた文が、スペルカード「風神少女」を取り出した。そして、発動させて飛んでいってしまった。

「さて、こっちも準備始めるわよ！」

「分かった分かった。」

どうやら休む時間も無いみたいだ。

改造三八式彈幕銃（後書き）

スペルカードの設定は、全部自己解釈です。実際はどうするのかは分かりませんので・・・

ご意見、ご感想をお願いします。

夏祭り準備

翌朝、陸軍で日課にしていた訓練を始めた。その途中に、玄関の方に行列が出来ていた。たぶん、「文々。新聞」を読んで、屋台を出す人々だろう。

その中には、中国の民族服を着た女性が居た。外人人だろうか？

「ん？」

その女性がこちらに気付いたらしく、こちらに近づいてきた。

「ええつと・・・貴方、谷泉希さんですか？」

「ああ、そうだが。そっちは？」

「私は紅魔館の門番、紅^{ほん}美鈴^{めいりん}です。」

紅魔館？何かの建物か？

「大体予想できるが、何故ここに？」

「今度の夏祭りに屋台出すんです。料理の屋台出すから、その時はよろしくお願いしますね。」

美鈴は行列のほうへ戻って行った。しかし、俺がここまで有名だとは思わなかった。

「泉希、ちょっと手伝って！」

霊夢の声が聞こえた。あんな数に一人で応答するのは難しいのだろ
う。

「ちょっと待ってくれ。今行く。」

こっぴうのは苦手なんだがな・・・

しばらく手伝っていたが、一向に減らない出店希望者。ちよっとう
んざりしてきた。

「次の方、どうぞ。」

入ってきたのは召使い（メイド）の服を着た女性だった。

「名前は？」

「十六夜いざよひ 咲夜やぐやです。」

「出店する店の内容は？」

「ワインと、それに合う料理の売り出しです。」

ワインか。夏祭りにあうか？まあ、変わっているから良いか。

「何処に住んでいますか？」

「紅魔館のメイド長をやってます。」

また紅魔館か。集合住宅マンションなのか？いや、召使いが居るのなら、貴族

の館か？

「出店を許可します。出店費用は自分で出してください。」

「ありがとうございます。」

この人で定員ギリギリか？でも、まだ数十名が残っている。

「霊夢、どうする？ここで打ち切るか？」

「そうしたほうが良いかもしれない。打ち切るわ。」

「すみません。ここで出店希望は打ち切りとさせていただきます。」

しばらくざわざわとしていたが、時間が経つにつれて人が減っていった。

「ふう・・・」

疲れた。俺は事務関係は苦手だ。

「お疲れ様。お茶淹れてきたわ。」

霊夢がお茶を持ってきた。

「おお、ありがとうございます。それで、出店希望者って何人だったんだ？」

「60人よ。こんな数、前まで集まらなかったのに・・・」

「そうなのか？」

その時、外のほうでカシャと言う音がした。そちらを見ると、カメラを構えた文とトンがった黒帽子をかぶった少女がこちらを見ていた。

「あ、やべ、見つかった。」

「ちよつと、魔理沙まじさ！何見てるのよ！」

霊夢が真っ赤になって言った。どうやら、あの少女は魔理沙と言うらしい。

「おつと。逃げるぞ、文。」

「ちよつと、待ちなさい！」

逃げ出した2人を霊夢が追いかけていった。

「おいおい、何があつたんだ？」

その時、後ろから肩をつかまれた。何かと思ったら、魔理沙が立っていた。

「いつの間にここへ？」

「まあ、良いじゃねえか。それより、あんたが泉希か？」

分かってるんだろう？と目で言っただけだ。

「私は霧雨魔理沙きりさめまじさ。普通の魔法使いだ。それより、お前は霊夢の何

なんだ？」

「・・・は？」

「いや、文が嘘のネタを出したかどうか、確かめてるんだ。で、どうなんだ？」

なるほど、奴のせいで俺は有名人になったのか。しかし、どんな記事だったんだろう。

「命の恩人だが・・・それ以外に関係があると見えるのか？」

「ああ、大有りだ。さっき見たのはとてもそんな関係には見えなかった。」

どういうことだ？

「あ！魔理沙！そこで何やってるの！？」

「やべ、じゃあまた今度聞かせてくれ！」

また逃げ出した。それを霊夢がまた追いかける。まったく、今日は騒がしい日だ。取り合えずお茶を飲もう。

「ふう、美味しい。」

そういえば、三八式の整備をやってなかったな。今のうちにやっておこう。

「泉希さん、助けてくださーい！」

「待ちなさい！」

やれやれ、まただ。庭を横切って、2人が走って行った。取り合えず三八式だけは持って来よう・・・

三八式を持って戻ったら、捕まったらしい2人が霊夢に説教されていた。その時の霊夢は兵学校時代の教官に見えたのは黙っておこう。
「なにを怒っているのやら。」

そう呟いて縁側に座った。三八式を軽く整備して、異常が無い事を確認した。そういえば、銃弾を撃たないから耐久年数も気にしなくて良いと河童の説明書には書いてあった。

「へえ。三八式弾幕銃ですか。」

そう言われて、顔を上げた。眼鏡をかけた男性が立っていた。

「貴方は？」

「雑貨屋「香霖堂」の森近もりちか 霖之助りんのすけです。貴方の事は噂に聞いてるよ。」

どんな噂なのだろう。

「こいつの名前を何故知ってるんです？」

「僕的能力なんだ。未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能

力でね。」

なるほど、能力か。しかしなぜ、く程度の能力と言っのだろうか？

「あ、森近さん。来てたの？お茶はいる？」

「いや、いいよ。騒がしかったから見に來ただけなんだ。すぐ帰るよ。」

それはそうだろう。心配ではないが、一応見ておくのが一番だ。

「それでは失礼するよ。」

霖之助は鳥居のほうへ歩いていった。が、途中で止まり振り返った。

「泉希君、明日の花火楽しみにしてるよ！」

そう言ってまた歩いていった。

「あ！あの2人何処に行ったの！？」

後ろで霊夢が言った。どうやら文と魔理沙が逃げ出したらしい。

「もう！あの2人、今度会ったら容赦しないんだから！」

「許してやったらどうだ？別に悪い事はしてないんだから。」

ああ言っのも友情だ。と心の中で呟いた。

「・・・分かつたわ。」

そうは言ったが、どこかで諦めていないようだった。

「すみません、ちょっと手伝ってもらって良いですか？」

店を出すらしい男性が言ってきた。どうやら建てるのに苦労しているらしい。

「分かりました。霊夢、少し手伝ってくるよ。」

「行つてらっしゃい。」

博麗神社の階段の下に、既に何軒か屋台が立っていた。売り物も出ている。

「早いもんだな。開始するのは明日の夜なのに。」

「へい。早く出店したほうが店の収入が良くなるんですよ。」

さっき手伝っていた店の店主が言った。

「そういう物なんですか？」

「例えば、料理屋とか御菓子屋が最初に店を開けたとすると、そこに妖精が多く集まるんですよ。その中で、時々商売を繁盛させてくれる妖精も居るから、運がよければ収入が良くなるんですよ。」

「なるほど。それで早く開くんですか。」

既に開いている御菓子屋を見た。確かに子供のような姿の妖精が集まっている。その中に、ワンピースを着た少女がいた。刀を2本持っている。その隣には、袋のような物が漂っていた。

「あの人は？」

「ああ、魂魄こんぱく 妖夢ようむさんですよ。西行寺家の庭師兼警護役です。」

「そうですか。」

そうこうしている内に、妖夢は帰ってしまった。さっきの店の店主がほっとした顔をしていた。

「さて、こちらの準備も終わりましたし、休憩でもしておいてください。そうこうしていたら次の準備が入りますから。」

「分かりました。それでは。」

取り合えず、神社に戻るか。

神社に戻ってみると、霊夢が正座したまま寝ていた。器用に寝たものである。

「どうしたらこんな風に寝られるんだ？」

少し疑問に思った。すると、さっきの声で霊夢が起きてしまった。

「はれ？泉希、もう終わったの？」

「いや、一回休憩しに来ただけだ。」

霊夢はそうと言ってまた寝てしまった。本当に器用である。

夏祭り準備（後書き）

ご感想、ご意見をお願いします。

夏祭り（上）

夏祭り当日、既にほとんどの屋台が商売を始めていた。総勢、60軒。客のほうも100人以上来ている。博麗神社の方には、特設された机と椅子が置いてある。そこから花火を見る計画らしい。

「泉希！こっちで酒飲まないか？」

屋台を回っていると、酒屋らしき屋台で萃香が言ってきた。

「すまん。後の花火を打つのに支障になるからやめておく。」

「そうか、残念。」

「花火を撃ち終えたら付き合ってやるから、待っとけ。」

「そうか！楽しみにしてるぞ！」

喜怒哀楽がころころ変わるな・・・

「あ、泉希さん！」

声の方向を向くと、特徴的な服を着た女性が店を出していた。

「ああ、美鈴さん。」

「何か食べて行きませんか？中華料理なら何でも作れますよ。」

「じゃあ、餃子でも頂こうか？」

「まいどあり！それじゃあ少し待っててください。」

店の前にあった椅子に座った。周りを見てみると、人だかりの出来ている店があった。

「美鈴さん、あの店は？」

「ん？ああ、あそこは咲夜さんの店ですね。自分で作ったワインを出してるみたいですよ。」

「確かに出すって言うてたけど、まさかあそこまで繁盛するとはな・
・・」

「餃子一丁上がり！」

渡された皿の上には、うまそうな餃子が乗っていた。

「美鈴ちゃん、炒飯3つ頼むよ。」

3人の客が注文した。顔見知りなんだろう。

「ちょっと待っててくださいね。すぐ作りますから。」

美鈴が炒飯を作り始めた。

「あの、もしかして泉希さんですか？」

一人の女の子が質問してきた。

「そうだが・・・やっぱり！私、貴方のファンなんです！サインください！」はぁ・・・」

ファン？サインってなんだ？確か・・・英語で名前って意味だったっけ？

「これに書いてください！」

そう言っただけで差し出したのは、かぶっていた帽子だった。それと、筆みたいな物を渡してきた。

「これに書いてと？」

「はい！」

とりあえず、谷泉希と書いた。その帽子を返すと、凄くうれしそうな顔でお礼を言ってきた。

「ありがとうございます！一生大事にします！」

「それは良かった。」

その女の子が去った後、後ろから気配がした。後ろを振り返ると、少し羨ましそうな顔をした霊夢が立っていた。

「泉希、隣座っていいかしら？」

「ああ、いいぞ。」

隣に座った霊夢から、少し酒のおいがした。萃香にでも飲まされ

たのか？

「中・・・じゃなかった。美鈴、なんか適当に作っておいて。」

中？ああ、中国か・・・納得しても良いのか？

「適当につて・・・それじゃあ、軽く餃子でもいいですか？」

「いいわよ。」

いつもよりも元気が無いと言つか・・・落ち込んでいる？軽い泣き上戸か？

「ねえ泉希。もし、ある物が欲しいって言ったら、どうする？」

どうするって・・・

「いくらなんでも無理がある物なら無理だが、何が欲しいんだ？」

「それは・・・み」「はい、餃子一丁上がり！」や、やっぱりなんでもない！」

み？よく聞こえなかったが・・・

「何だ？み・・・って何が欲しかったんだ？」

「なんでもないって、忘れて！」

忘れてって、気になって忘れられない。

「まあ良いや。それで、花火って何時から始めればいいんだ？」

「戌の刻（午後8時ぐらい）から始めるようにして。弾数は、1200発打ち上げて。」

「了解した。何とかしてみるよ。」

1200発か・・・1回の発射に6発だから、200回も引き金を引かないといけないのか・・・少々めんどくさいな。

「それと、成功するの楽しみにしてるから。」

微笑みかけられて、やる気が出てきた。

「ああ、楽しみにして貰わないと困る。じゃないとやり甲斐が無い。」

「ふふ。期待してるから。」

大体こういう時に現れるのが奴なんだよな・・・しかも、後ろの店から視線を感じる・・・

「・・・おい文、居るんだろう？出て来い。」

後ろの店にあった一つの背中がびくつと震えた。どうやら図星らしい。

「いやゝまさか見つかるとは思いませんでしたよ。」

文が、向こうの店からこちらに来了。カメラを持っているところか

ら見ると新聞の取材か、唯単に持っていただけで祭りを楽しんでいるか、それとも祭りに来ている有名人の追っかけ（パパラッチ）か。「どうせ何だから、取材しようと思ひまして。どうです？この祭りは。」

どうやら取材の標的を俺にしたらしい。

「そりゃあ、賑やかで良いだろう。妖怪と人間が平等に暮らしてるし、基本的に幻想郷って言うのは良い所だと思う。」

「そうですか！それで、隣の彼女とはどういった関係で？」

隣に居る彼女を見た。どうやら、酔いのせいで寝てしまったらしく伏せていた。

「そうだな・・・友人で恩人だな。友人じゃ無くて親友かもしれないが。」

「親友ですか。鈍いですね。」

は？鈍い？

「・・・どういう事だ？」

「いや、自分で気付いてあげてください。それでは！」

文が走り去っていった。やはりさっきの事が気になる・・・

「・・・気付いてあげて、ねえ。」

隣で寝ている霊夢を見た。取り合えず、起こすのも悪いから神社に寝かしておくか。

「美鈴さん、御代ここに置いてくぞ。」

「まいどありー」

「・・・やっぱり何のことだか・・・」

霊夢を神社に寝かせて屋台を回っていたら、昨日話しかけそびれた少女がいた。やはり刀を持っている。その隣には変な服を着た女性がいいた。彼女があのお店が言っていたお嬢様か？

「こんにちは。」

「へ？えつと、どちら様でしたっけ？」

「いや、始めましてだな。俺は谷泉希って言うんだ。」

「谷泉希？ああ！あの外界から来た！」

やっぱり有名みたいだ・・・

「へーあの泉希さんね」

お嬢様が言ってきた。

「貴方は？」

「西行寺幽幽子よ。白玉楼に住んでるの。」

白玉楼？そこも何かの館か？

「あ！林檎飴！」

幽々子がそう言って走り始めた。

「は？林檎飴？」

「すみません。幽々子様はお菓子とかそういう類には目が無いものでして……」

なるほど、あの時に買っていたお菓子はその為か……大変そうだな。

「早く行かないと置いて行かれるぞ。」

「あ、はい。またいつか会うときは手合わせお願いします。」

手合わせね……。どうやら好戦的らしい。

「わかった。お手柔らかに頼むよ。」

そう言って微笑んでやった。すると、向こうも微笑んだ。そして、幽々子が向かった方向に走っていった。

日が西に傾いているのに気が付いて、時計を見た。（日本製）短い針が午後5時を指している。

「そろそろ準備を始めるか。」

三八式を取りに神社に戻ってみると、霊夢は起きていた。が、服がいつもの巫女服ではなく、浴衣だった。いつもと違う服装であり、見た目も違って見えた。

「あ、泉希。どう？似合う？」

そう言われれば、返事は一つしかない。

「ああ、凄く似合ってるよ。」

お世辞では無く本心で言っただけだ。

「そう？うれしい！」

そう言った彼女の顔を見ると、凄く可愛かった。・・・俺は大日本陸軍軍人だぞ！何を考えてるんだ！

「どうしたの？なんか凄く唸っていたけど・・・」

「いや、何でもない・・・それより、三八式は何処にある？」

「ここにあるわよ。それと、スペルカードを一つ作っておいたから、それを最後に使って。」

「了解しました、霊夢司令官殿。それでは谷上等兵、行って参ります。」

そう言つて敬礼をした。向こうも見よう見まねで敬礼した。

「ひゃあ、かつこいいいな泉希さんよ」

拍子抜けした声がした。この声は・・・

「・・・魔理沙か？」

「」名答。」

何故ここに来たんだ？花火なら本堂の前のほうで見た方がよく見える。

「しかし、霊夢が浴衣を着るとはねえ。驚いたよ。」

「何か悪い？」

「いや。ただ、その服を見せる相手が居るのが羨ましくてね・・・」

「・・・へ？」

「今のは忘れてくれ。じゃ、花火楽しみにしてるよ。」

夏祭り（上）（後書き）

咲夜さんの扱いが適当になった事には少し反省しています。

ご感想、ご意見をお願いします。

夏祭り（下）

午後7時30分、発射準備が完了した。発射位置についたとき驚いたのが、他にも花火を打ち上げる人々がいたことだ。大抵の人はスペルカードみたいだった。中には、本物の花火職人までいたが。その全員が4軍に分かれており、俺は第1軍と第4軍（一番最後）に入っていた。

「まさかここまで大規模だとは・・・」

「そうでしょうね。自分もここに来たときは驚きました。」

近くにいた花火師が言った。発射筒の準備をしている。

そういえば、あの時もらったスペルカードどんな物だろうか？

「炎符「取って置きが一番」？なんだこのスペルカード。」

「スペルカードですか。自分も昔は憧れたものですよ。スペルカードを扱えるようになったら一人前って言われてましたし。」

「そうなんですか。」

「しかし、スペルカードが扱えるとは。泉希さんは妖怪か何かなんですか？」

「いや、唯単に魔力が多いただけみたいです。それに、外の世界で妖怪は一人もいませんから、自分が妖怪なわけがありません。」

「ほう？そんなのですか。」

そろそろ発射する時間か？と思い、懐中時計を見た。7時50分になっていた。

「そろそろですかね？」

「そうですね。よし！みんな、発射を準備しろ！」

さっきの花火師はリーダーだったらしい。他の人も反応し、各々準備を始めた。俺も三八式を持って準備した。

「泉希さん、どうです？勝負してみませんか？」

「勝負？どんなです？」

「どちらが一番早撃ちできるかです。」

「その勝負、俺も乗った！」

「俺もだ！」

第1軍の人が乗って来た。

「一番遅かった奴は、全員の酒代を払うって言う事で。」

「よし、乗りました！ちょうど、友人が酒が飲みたいって言うたもので。ちょうど良かったです。」

萃香も喜びそうだ。けど、大丈夫なのだろうか？

「その筒で早撃ち出来るんですか？」

その花火師の横にある筒を見た。どう見ても一発ずつ撃つしか出来なさそうだ。

「大丈夫です。自分を誰だと思ってるんですか？幻想郷一の花火職人ですよ。」

「それは頼もしい。さて、後何秒だ？」

ちょうど15秒前になっていた。

「あと15秒！炎符「幻想花火連弾」！」

他のスペルカードを使う人も続いて発動していった。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・」

「5・・・4・・・3・・・2・・・1！」

「全員、発射！」

第1軍の花火師の発射筒が一斉に火を吹き、上空に幾つもの花を咲かせていった。俺も負けじと三八式の引き金を引く。隣のリーダーは、3秒に一発の割合で撃っていく。対する俺は5秒に一発。やはり経験の差だろう。

「どうしました！？さっきの心配は何だったんですか！？」

「まだまだですよ！舐めないください！」

花火の爆発音の中であるから大声で言った。

スperlカードの効果時間が終わった時、ちょうど第2軍の発射時間に変わった。少々耳が痛い。

「さて、しばらく休憩だな。」

「泉希さん、発射数は？」

「えっと・・・200発（正確には1200発）ですね。そっちは？」

「よし！230発です！」

「あー畜生、180発だ・・・」

「150発しか撃てませんでしたよ。」

「やば！100発だ！」

「今日はお前のおごりだ！よろしく頼むぞ！」

辺りが笑いに包まれた。その時、手に持っていた三八式が輝き始めた。何事かと思い、その場にいた全員が三八式を見た。しばらくして、光が消えて一人の男が立っていた。和服を着て、腰には刀が差してある。

「・・・誰だお前。」

「誰だって、悪い冗談言うなあ。わいは自分の相棒や。」

「相棒って……俺は三八式しか……」

「わいは、その三八式や。」

「は？　どういう……」

手元の三八式を見た。さつきよりもかなり軽くなっていた。魂が抜けたような感じである。

「なんで具体化出来たかはわからへんが、たぶんそのスペルカードつちゅうもんがこうなつた原因やな。」

「待て待て、お前が三八式って言う根拠は？」

「分かったわ。まず、わいが生まれたのは名古屋工廠。昭和十二年製や。その後、輸送された部隊で自分とあつたんや。その時から戦争が始まって、南方戦線で一緒に戦った。その後は、幻想入りしてから鬼のお嬢ちゃんや河童の野郎にいろんな所いじくられてた訳や。」

確かに、製造年代や製造場所、使い始めた年代、幻想郷に来てからの三八式に当てはまる。ただし、萃香に弄られていたとは知らなかったが。

「やっぱり信じられない。」

「よし、分かったわ。」

そう三八式（？）が言っと、小さくなっていった。そして、消滅した。

「どうや？これで信じてくれたか？」

三八式が喋った。と、言うよりも三八式から声がした。

「・・・本当だったんだな・・・」

「そうやろ？さて、そろそろ準備せんと第4軍が終わってまっぞ。」

「泉希さん！早くしてください！終わってしまいますよ！」

「わかった。今行く。」

もう一度三八式を見た。

「何や。早く行けや。」

少し口が悪いらしい。

最後の一発の発射場所に着いたとき、第4軍の花火が終わりかけていた。

「相棒、後10発で終わりや！」

「ああ、分かった。炎符「取って置きが一番」！」

スperlカードの発動が終了した。

「今終わりや！」

「よし！行くぞ！撃^てええ！」

普通の銃弾を撃つときよりも強い衝撃がし、花火連弾の弾よりも遙かに大きい弾が上昇していった。

そして数秒後、花火連弾の3倍程の巨大な花火が咲いた。

「こいつはでかすぎるやろ。あの巫女の嬢ちゃん、何考えてるんや・
・・」

「まあ、良いじゃないか。こんなでかい花火、初めて見た。」

「確かにそうやな・・・」

しばらく、花火が消えた空を眺めていた。

「そういえば、名前聞いてなかったな。どんな名前なんだ？」

「前から三八式としか言われてなかったわ。名前は決ま^つてない。」

「そうか。それじゃあ、お前の名前は三十八^{みそや}だ。」

「三十八か。確かに良い名前や。」

「よし、戻るか。」

その時、三十八が具体化した。

「こっちの方が話しやすいやろ。」

「そうだが・・・」

「さて、早く酒飲みに行こうや。それと飯も食べたいわ。」

どうやら食いしん坊らしい。

「だれが食いしん坊や。さっきのスペルカード使ったせいで腹減ったんや。」

さらには読心術まであるのか・・・厄介だな。

「はは。食いしん坊の次は厄介扱いか。まあ、心が読めるのは相棒しかおらんさかい、安心し。」

・・・本当に厄介だ。

夏祭り（下）（後書き）

三十八さんは一応ツツコミとして設定したんですが、どちらかといえば、ボケの方かもしれません。それと、関西弁には自信が無いです。

キャラ設定

三十八 みそや 三八式歩兵銃が具体化した姿。服装は和服。腰に太刀一本を常時付けている。生まれは名古屋。だけど、関西弁。年齢は銃の年齢は6歳。人としてだと17歳。

能力

刀が扱える程度の能力

心が読める程度の能力（泉希限定）

ご意見、ご感想をお願いします。

夏祭り後

「ちゅう訳で、三八式銃から具体化した三十八ですね。よろしゅう頼みます。」

花火で知り合った人々と萃香がいた屋台に来た。そこに霊夢も来ていたから、三十八の紹介をした。

「それで萃香はん、あの時は世話になったな？んん？」

「そ、そんな事してないぞ。」

「ははん？今、目それたけど？」

向こうは萃香に恨みがあるらしい。どんな事をされたかは本人と萃香しか知らない。

「ねえ。三十六って付喪神なの？」

「さあ？本人は三八式が具体化した物って言ってたけどな。」

「ふーん。具体化ねえ・・・」

霊夢と三十八の正体を話し合ったが、最終的にはよく分からない者として納得した。

「そこの御二方、今失礼な事考えてたやろ。」

「い、いや別に・・・なあ。」

「ええ。」

相棒なのに顔が怖い・・・

「まあええ。それより酒！酒が欲しい！」

お前も萃香と同じ飲んべえか？

「酒ならここにあるぞ！」

「萃香はん、良い時にいた！」

さっきまで世話になったとか言っていたのに、変わり方が急だな。

「さあ、飲むで！」

「どうぞどうぞ。」

とりあえず、向こうの2人が酒で仲直りをした所で、こちらにも酒を飲み始めた。独逸^{ドイツ}の麦酒^{ビール}みたいな物が出てきた。

「幻想郷で小麦って作ってるのか？」

「小麦？確か、太陽の畑で作っていたような気がする。」

太陽の畑か。なんか果物が多そうな気がする。

「すると、麦酒も作れるか。」

目の前にある黄色い液体を霊夢が珍しそうに見ていた。初めて見るのだろうか？

「そう言えば、俺も飲むのは初めてだな……」

飲むかどうか思案していると、中国の民族服が目に入った。頻繁に三十八の方向を見ていた。

「美鈴さん、三十八がどうかした？」

話しかけられた背中は一ピクつと震えた。

「い、いやなんでもありませんよ。ただちょっと気にな……」

美鈴は急いで自分の口を塞いだ。なるほどそういうことが。

「美鈴さん、どうせなら紹介してやるぞ。」

「へ？い、良いんですか？」

「あいつは俺の相棒なんだから、問題無いだろう。」

「あ、ありがとうございます。」

その時、三十八がこちらに気付いた。読心術を使われたらしい。なら丁度良い。ちょっとこっちまで来てくれないか？

「何や相棒。なんか用か？」

「分かってるんだろう？さっきの読心術で。」

「まあな。で、紹介したいのはこのべっぴんさんか？」

「まあそついう事になるな。」

「は、はじめまして。」

美鈴がかちここに固まっていた。

「あんた、名前は？」

「紅 美鈴です。」

「ほな、美鈴さんよ。あんた、酒飲めるか？」

「・・・へ？あ、はい。飲めますけど・・・」

「・・・よし、気に入ったわ。わいの名前は三十八や。よろしゅう。早速やけど、酒飲まへんかい？」

「あ、はい。いいですよ。」

三十八がさっきの席に戻って行った。美鈴も続いて隣の席に座る。

「さて、俺も飲むか。ってあれ？」

自分が座っていた席に麦酒が無い。誰かに飲まれたかと思ったら、隣に座っていた彼女に飲まれたらしい。その彼女もうつ伏せ状態になっていた。酔うのが早いのか飲む早さが早かっただけか。

「しょうがない。おい、三十八。先に神社に帰るから後よろしく頼むぞ。」

「わかったわ。」

酒を飲んでいた三十八に言って霊夢を担いで（お姫様抱っこ）店を出た。

神社の前まで来た。陸軍で鍛えた筈の体力も、1ヶ月ぐらい休んでいたのなら多少は衰えているから、三八式（約4?）と彼女（体重不明）を担いでいくのはきつい。その上、花火の打ち上げでくたたになっている。

「・・・疲れた・・・」

一回、霊夢を鳥居にあずけた。その時、神社の方で淡い光が発生し始めた。

「?なんだ?」

その淡い光は境内の前で輝いている。よく見ると、人の形をしている。取り合えず、三八式を構えて近づく事にした。

「・・・」

その人型の物体の顔がこちらを向いた。見たことがある顔だった。

「・・・隊長?」

「・・・谷か？お前、なんでここに居るんだ？」

それは、戦っていた南方戦線での隊長だった。

「・・・まさか、隊長も幻想入りを？」

「いや、残念だが俺は・・・」

隊長が足を指差した。

「足が・・・無い。」

「そう、俺は死んだんだ。米軍にやられてな。」

「それじゃあ、地獄行きですか？」

「俺もそう思ったんだが、閻魔様は俺は白って言ったんだ。天国行きかと思っただが、もう一度生まれ変わって、今までしてきた罪を償え、だとさ。もう少して迎えが来る。」

「そうですか・・・」

少し残念だった。せつかく出会えたのにもう2度と会えない。

「なに、俺も貴様も死ねばまた会える。それより、あの嬢ちゃんは何？」

「自分の命の恩人です。彼女のおかげで今生きてるんです。」

「そうか。あの嬢ちゃんを大切にしていあげな。きっと良い女になる。」

」

「分かってます。」

隊長が微笑んだ、が直ぐに厳しい表情になった。

「谷上等兵！命令を下す！俺達、死んでいった奴らの分まで生きろ！そして、俺達の分まで幸せになれ！」

「・・・は！了解であります！」

隊長がもう一度笑った。そして、どんどん透けていった。

「必ずだぞ。約束を破ったら化けて出てくるぞ。」

「出来ればそうなって欲しいものです。」

隊長はそれを聞いた後、消滅した。輪廻の転生と言う奴か・・・

「・・・それでは、谷上等兵。隊長の命令を守る為、生きます。」

さっきまで隊長が居た所に敬礼した。すると、空から一枚のスペルカードが降って来た。

「光符「きっかもんげき菊花紋撃」・・・」

読み終わった後、また一枚の紙が降って来た。

「戦闘になった時はこいつを使え、必ず役立つはずだ。」

そう書かれていた。最後には隊長の名前が書かれている。

「・・・隊長・・・」

紙が降って来た空を見上げた。満月が滲んで見えた。

夏祭り後（後書き）

スペルカード説明

光符「菊花紋撃」 一撃必殺のスペルカード。魔理沙のマスターズパークと同じ様な極太ビームが発射される。

ご意見、ご感想をお願いします。

紅魔館へ

「紅魔館に行ってくる？」

夏祭りから1週間ほど経った日、霊夢にそう伝えたら、オウム返しにそう言われた。

「紅魔館に図書館があるって聞いたから、ちょっと調べものに行ってくる。なに、三十八も一緒に行くから、心配無い。」

「そうでしょうけど、気を付けてね。あそこの主は吸血鬼だから、血を吸われかねないから。」

「分かった。それじゃあ、行ってくる。」

「いつてらっしゃい。」

一応整備してある道をたどり、森を抜けたらそこには真っ赤な屋敷が立っていた。なるほど、これが紅魔館か。

「着いたで。何回見ても目がちかちかするわ。」

「本当だな・・・」

紅魔館の直ぐそばは、湖だった。結構大きい。

「ほな行くで。」

三十八が門に向かって歩き始めた。それに続いて俺も歩く。

しばらくして、門の手前に誰かが居るのが見えた。あの服は・・・

「あらら、また寝てる。」

美鈴が座って寝ていた。確か、門番じゃなかったのか？

「ま、丁度良いわ。入れさせてもらうで。」

「おいおい、許可もらわずに入って良いのか？」

「良いんや、良いんや。そうでもせんかったら入れへん。」

「そうなのか・・・」

「ただし、パッド・・・じゃなかったわ、メイド長の十六夜咲夜だけには見つかるなや。」

「は？ぱつど？」

「気にせんでええ。それよりも入ろうや。」

三十八が入っていった。取り合えず、俺も少し慎重に入った。入った後、美鈴に言った。

「もう起きても良いぞ。」

ばれてたか、と言って美鈴が起きた。

中に入ると、見かけよりも中が大きい。何か魔法でも使っているのか？

「図書館は地下にあるんや。その階段から降り。」

「三十八は？」

「ん？まあ、少し用事があるんや。別行動になるわ。」

「そうか、昼に集合で良いか？」

「そうやな。そうしてくれ。」

三十八は、廊下を歩いて行った。

「さて、俺は・・・」

階段を降りて行った。

階段を下りると、目の前に扉があった。そこを開けると、大量の本棚があった。ここが図書館らしい。

「ほお。こんなにあるのか。」

「・・・誰？」

びつくりした。さっき、咲夜に見つかるな、と言われてたせいだ。声が聞こえた方向を見ると、寝間着姿の少女がいた。ここは寝室か？

「失礼した。ちょっと調べものをしに来たんだ。」

「調べもの？」

「ああ、名前は谷泉希だ。そっちは？」

「パチユリー。パチユリー・ノーレッジよ。」

パチユリーね・・・外国の名前は覚えにくい。

「邪魔になるかもしれないけど、ちょっとの間だけ調べものさせてくれ。」

「・・・いいわよ。」

それじゃあ、早速調べますか。三十八の正体を。

奴は付喪神ではないはずだ。まだ、生まれて数十年しか経っていないのだから。じゃあ何だ？具体化って言ってた。そういえば、海軍に行った友人からこんな伝説を聞いた。

「戦艦や巡洋艦には魂がある。全員が少女の姿をしている。まあ、会った事は無いんだが。」

たしか、艦魂って言ってたか？だったら、あいつは銃魂か？

「そういう類か？」

妖怪の一覧表を見て言った。一応、船幽霊と言う妖怪がいた。けど、こいつは海で死んだ人の魂が悪霊化した妖怪だと書いてある。

艦魂もあつた。海軍の友人が言ったとおり、少女の姿をしている。艦魂は、前世で死んだ女性が愛した人にもう一度会いたいと強く願うと、来世のその男性が乗るはずの軍艦の魂となれるらしい。

「・・・絶対違うな。」

まあ、合つてたとしても、親友だったか何かだったんだろう。艦魂みたいな物と仮定するしかないか。

妖怪の一覧表を本棚に戻した。他の本を探していると、一冊の本に目が止まった。

「『日本の歴史』？」

どう見ても現在の物ではない。裏には1991年発行と書かれていた。とすると、これは未来の本という事だ。

「・・・戦争には勝つたのか？」

大東亜戦争のところを開いた。内容は、緒戦の勝利からミッドウェーの海戦の敗退から始まる日本の戦局悪化。マリアナ、レイテと続く海戦での敗退。本土空襲、神風特攻隊、広島と長崎に原子爆弾という一都市を吹き飛ばす爆弾が投下され、そして・・・

「ポツダム宣言の受諾・・・無条件降伏・・・連合国の占領・・・」

どれもが信じられない事ばかりだった。日本は戦争に負ける。事実なのかは分からないが、認めたくない物だった。が、その後のページをめくっていくと、日本の復興、民主化政策、朝鮮戦争から始まる高度経済成長、世界で第2位の豊かな国となった日本。そこだけはホッとした。

「・・・日本の負けか。」

うすうす気付いていた。米軍の物量攻撃にあっけなく落ちる戦闘機や爆撃機、撃破しても直ぐまた出てくる戦車、全歩兵に配られた軽機関銃。それに比べ日本は精神論で攻撃した。結果、負けた。

「今日日本に帰っても、死ぬか負けるかしかないか・・・」

それは隊長の命令にそむく事になる。もし生き残れたとしても幸せにはなれない。

「・・・生きろ、か。」

やはり、幻想郷で生きる。それが俺の道なのだろう。

「ん？」

さつきから何かにつつかれてると思ったら、少女だった。背中に枝の様なものが生えていて、7色の石がぶら下がっていた。

「どうかしたのか？」

その少女がコクリと頷いた。そして、一冊の本を指差した。どうやら音楽関係の本みたいだ。

「とって欲しいのか？」

また頷いた。無口なのか？

取り合えず、その本を取って渡した。すると、少女は小さく「あり

がとう」と言つて机のほうに走つていった。無口ではなく、人見知りなだけらしい。

その時、後ろから凄い殺気がした。何だと思い、振り返ると咲夜が凄い目つきでこちらを睨んでいた。手には数本の短剣を持っている。そして、いつの間にか後ろに回りこんでいる三十八と美鈴がいた。

「相棒、咲夜はんがお怒りや・・・」

「だから私は寝てませんよ！そうですね、泉希さん！」

どうしたら良いのか分からず、ただ唾然としていた。すると、咲夜が前から消えた。その直後、後ろから声がした。

「・・・問答、無用！」

「・・・う、うわあああああ」

本当に問答無用で短剣を投げつけてきた。まさか、ここまで野蛮な人だとは思わなかった。

「逃げるなああああ！」

「・・・助けてくれええええ！」

それを見て呆れる吸血鬼が居たとか居なかったとか・・・

あの短剣の悪魔から無傷で逃げたのは奇跡だと思った。まあ、一応目標は達成したからいいとして・・・

「美鈴さん、頭に短剣が刺さってるけど大丈夫なのか？」

「大丈夫づすよ。これでも一応妖怪なんですから。」

初めて知った。こんなにも人間色の濃い妖怪は妖怪だとは思わない。

「でも、一応治療しとくぞ。これでも医者の子供なんだから。」

「そうなんですか？以外ですね。」

「以外で悪かったな。それで、三十八は？」

「ここにおるやないか……。」

三十八の方向を見てみると、美鈴よりも短剣が刺さった三十八がいた。

「大丈夫か。ハリネズミ状態だぞ。」

「大丈夫……本体（三八式歩兵銃）が壊れない限り死にやあせん。でも……。」

「でも？」

「痛てええええ！」

急に大声で言われたから片耳が耳鳴りを始めた。

「……とりあえず全部抜いとくか？」

「そうしてや……」

三十八の背中には合計13本の短剣が刺さっていた。それと、三十八の体は血が出ないみたいだ。美鈴の頭のほうも治療しておいた。

「そう言えば、調べもの終わったんか？」

「ああ、ちゃんと分かった。あと、おまけ付でな。」

そう言えば日本が敗戦する事は言っておくか？いや、やめておこう。日本のために戦った兵器だから、発狂するかもしれない。

「で、美鈴はんはどうするん？」

「私は紅魔館の門番です。どう言われ様が戻らないと。」

「ナイフ刺さっても？」

「はい。」

「パッド長に攻撃「誰がパッド長だ？」あ……」

この声は……短剣の悪魔だ！

「逃げろおおおお！」

三十八が一人で逃げた。咲夜は三十八に的を絞り、追いかけていった。

「・・・どう考えても三十八さんが生きられないと思います・・・」

「・・・同意見だ。」

とりあえず、三十八が消えた方に合掌しておいた。

紅魔館へ（後書き）

今回は、少しギャグ風にしてみました。どうでしょうか？

ご意見、ご感想をお願いします。

泉希の過去と霊夢の優しさ

短剣の悪魔から逃げ延びて、少ししてから来客があった。西行寺家の庭師兼警護役の魂魄 妖夢だった。

「あれ？幽々子さんは？」

「今日はお使いです。たまたま近くを通ったのでついにと。」

「そうか。でも、少しタイミングが悪かったかな・・・」

妖夢の顔が不思議そうな顔になった。その時、妖夢の目の前を一個のナイフが通り過ぎた。

「うわあああああ！」

「逃げるなああああ！」

妖夢の顔が納得したような顔になった。

「・・・なるほど・・・」

「それと、新しいスペルカードの試し撃ちもやるんだ。」

「それなら、相手役は私がやりますよ。」

「いや、やめといった方が良さぞ。これが初めて撃つから何があってもおかしくない。」

「大丈夫ですよ。魔理沙さんの「マスタースパーク」受けても死にませんから。」

「いや、でも・・・」

「それじゃあ、向こうで待機してますね。」

「あ、おい！」

人は出来るだけ傷つけないんだが・・・

「しょうがない。光符「菊花紋撃」」

花火連弾のときと同じ様にスペルカードを発動した。すると、三八式に遊底が現れた。とりあえず、その遊底を引いてみると、銃の先端の方に直径１メートル程の菊花紋章が現れた。宙に浮いている。

「このまま引き金を引くのか？」

何故だかこの技の打ち方が分かった。

「妖夢、行くぞ！」

「いつでも来てください！」

照準を当たらない様にして、引き金を引いた。

「うん！？」

引き金を引いたら、遊底が元の位置に戻り、菊花紋の真ん中の円が

らかなり大きい光線^{ビーム}が発射された。自分の身長以上、いや2倍ほどある。その反動で吹き飛ばされた。

「うわ！」

その光線はそのまま妖夢の方に進んだ。完璧に直撃する。

「おい！避ける！」

妖夢が右の方向へ避けた。ギリギリの位置で避けられた。光線はそのまま直進して後ろにあった巨石を破壊して消えた。隊長はなんと物をくれたんだ？

「い、今のは「マスタースパーク」以上の威力がありますよ！？何処でそんな物つくったんですか！？」

「いや、これもらい物なんだけど・・・」

その時、神社の方から声がした。

「あー！その石壊したら！」

「は？」

霊夢に言われて石の方を向くと、霧のような物が出ている。

「・・・大量の温泉が出るの・・・」

そう言った瞬間、大量の湯泉が噴出した。4、5メートルほどの高さまで上がっていた。

「・・・はあ。」

呆れて見ていた俺と妖夢の耳を、霊夢が引つ張って神社の縁側まで持って行った。

「痛い痛い痛い！」

「ちょ、霊夢、やめ・・・」

その後数分間、霊夢に説教された。正直言つて陸軍の前任将校よりも怖かった・・・鉄拳が飛んでこない事が不幸中の幸い？だった。

「いい！？この神社の半径5km以内で、さっきのスペルカードは使用禁止！それと、妖夢はしばらく人のスペルカードの練習に付き合わないこと！分かった！？」

「はい・・・」

で、あの温泉はどうするのだろうか？あのままにはしない筈だ。

「あと、2人で風呂を作つて。そしたら許してあげる。」

は？風呂？旅館のあれみたいな物か？

「まあ、それは明日からとして、そのスペルカード何処で手に入れたの？」

「これか？ある人から貰ったんだ。」

さすがに、幽霊になった隊長から貰ったとは言えない。なぜ、隊長が死んだのかと問われたら、俺の過去が勘付かれる。まだ、大東亜戦争の事は言っていない。

「そう言えば、あの紋章は何なんですか？ 幻想郷では見たこと無いですよ。」

「それは・・・」

妖夢が質問してきた。答えるべきか？ 日本の天皇陛下の紋章だと言ったら、そのくれた人が日本人だと思われる。または自分で作ったと思われるか・・・

「そう言えば、その銃についていたわよね。日本の紋章でしょう？」

さすが、勘が鋭いな・・・

「そうだ。日本の紋章だ。正確には陛下の紋章だな。」

「そうなの。で、貰った人って日本人でしょ。」

く、やっぱりそう思われたか・・・こうなったら・・・

「日本人かは謎だが、三十八から貰った。」

「なんや相棒、呼んだか・・・て、うわ！」

「いい加減逃げるのをやめろ！」

「いやや！止まったらナイフが何本刺さるか分からん！」

向こうは向こうで大苦戦中か。と言うか、あのメイド長は仕事は良いのだろうか？

「三十八が？あれも風呂作りに・・・」

すまん三十八。巻き込んでしまった。

後ろのほうでした悲鳴は無視しておいて、霊夢のほうに向き直った。どこか、疑ったような顔になってる。

「それじゃあ、私はこれで帰りますね。」

妖夢がそそくさと帰って行った。まるで、何かから逃げるように・・・って、あ！あいつ明日から来ない気だな！

「・・・泉希、いい加減過去の事を話してくれない？」

「は？」

突然言われた。もうそろそろ疑問に思われても良いくらいか。でも、話はしない。俺が人殺しだと言ったら、ここに居る全員が避けてきそうだから。それに気付かれたら、ここから出て行かないといけない。霊夢には迷惑はかけられないから。

「無理だ。あの事は言いたくない。絶対だ。」

「・・・分かったわ。でも、無理せずに言ってくれる気になったら言うて。」

「・・・分かった。」

話したくはないが、俺は人殺しだ。アメリカ兵を何人殺したかは分からない。上官に命令されて虐殺もした。そんな奴にやさしく接してくれる彼女に、これ以上嘘はつくのは辛くなってくる。・・・やっぱり言ってしまおう。

「・・・霊夢。」

気付けば、無意識に彼女を引き止めていた。

「何？どうしたの？さっきよりも顔色が悪いけど・・・」

「・・・やっぱり話す。今夜、俺の部屋に来てくれ。」

その日の夜、俺の部屋に霊夢が来た

「泉希、入るわよ。」

「どうぞ。」

入ってきた霊夢が、驚いた顔になった。無理はない。

「その服、たしか・・・」

今着ているのは、戦闘服である。無数の血痕が残っている。それに、左目の包帯を取っている。

「霊夢、俺をどう見ている？」

「ど、どう見ているって……医者の息子なんだから、幾つもの命を救ってきた医者でしょ？」

「……残念だが、違う。単刀直入に言おう。」

「な、なに？」

いつもは見せない真面目な顔に少し驚いている。この事を言ったら
衝撃で倒れるかもしれないな……
シヨック

「俺は……人殺しだ。」

「……え？」

思った通り、困惑した顔になった。

「靖国の桜になって、又会おう。」

一緒に戦っていた奴らが口を揃えて言っていた言葉を思い出した。
霊夢に、過去の話をしてた。虐殺も、アメリカ兵の事も、隊長の
事も、そして、俺が重体の状況で幻想入りした理由も。

彼女は、話し終えてからずっと下を見ている。当然の事だろう。今
まで信じていた人が殺人者だという事実を認めたくないのだろう。

「……俺は、この神社を出て行く。迷惑はかけられない。」

そう言って立ち上がろうとしたとき、左の頬に平手打ちが飛んでき

た。

「馬鹿じゃないの！？命を救った相手をそう簡単に見捨てられると思ってるの！？」

「・・・だが・・・」

「だが、じゃないの！それに、まだ風呂の件は終わってないの！誰があれをするの！？」

そこまで言うのなら・・・

「条件がある。まず、今さっきの話は誰にも言わない事。次に、明日からはいつもの通り接してくれ。ちょっとでも違う態度をしてしまったら、文^{やっ}にはれる。」

「分かってるわよ！・・・でも」

なぜか、急に声が暗くなった。どうしたのだろうか？

「でも、自分で抱え込むのはやめて。」

そう言われた時、泣きそうになったのは秘密だ。

「・・・分かった。」

今日はそこで就寝することにした。霊夢が部屋を出た後、少し日本のことを思い出した。

「兎追いしかの山、か。」

少々、日本が恋しくなった。

泉希の過去と霊夢の優しさ（後書き）

ちよつと最後のほうはシリアスすぎたでしょうか？でも、時々あつても良いですよね？

ご意見、ご感想をお願いします。

？さんの決闘願ひ

翌朝、いつもの様に訓練をしていると、いつもより早く霊夢が起きてきた。凄い寝癖になっている。

「・・・おはよう。」

「んゝおはよう。」

少し気まずい。向こうは少し寝ぼけているみたいだった。

「霊夢、寝癖凄いぞ・・・」

「へゝって、え!？」

霊夢が神社の中に急いで入っていった。確認でもするのだろうか？

「ちよつと、その男!」

そう言われ、振り向くと国民学校（小学校）2年ほどの年齢の女の子が立っていた。その後ろに1人の女の子が立っていた。どうしたのだろうか？

「やっぱりやめようよチルノちゃん。幾らなんでもお医者さんに勝負を挑むのは・・・」

「でも、昨日妖夢とスペルカードの練習してたもん。きつと、裏では強い人間なの!」

どうやら、昨日のスペルカードの事が原因らしい。その前に、勝負
って言ってなかったか？

「あいつを倒して、あたいが最強になるんだから！」

最強って・・・別に強くないんだが・・・

「ちょっと良いか？俺は別に強「強いんでしょ！だったらあたいと
勝負だ！」・・・はあ。」

ちよつと強制的だな。って、俺のスペルカードって花火連弾と「菊
花紋撃」の2枚しかない。どうやって勝てと？せめてもう一枚欲し
いところだ。

「そうだな・・・あと、三日は待つてくれないか？」

「三日ね！それじゃあ、三日後に霧の湖で待つてる！」

霧の湖。たしか、紅魔館の近くにあつた湖・・・だつたっけ？

「わかつた、わかつた。霧の湖な。」

その、チルノと呼ばれた女の子が走つて行つた。彼女の後ろにいた
少女は、一回こちらに一礼して付いて行つた。礼儀正しい子だ。
丁度その時、霊夢が戻ってきた。寝癖はだいぶ直つたが、まだ残つ
ている。

「・・・ぷ。」

「？なんで今笑つたの？」

「まだ、寝癖直ってない。」

「ええ!？」

必死に直そうとしている彼女を見ていると、少し面白かった。けど、直しても直してもまた出来る寝癖。きりが無いな。いい加減救援を出そう。

「霊夢、少し止まれ。」

「へ?何!？」

手を頭の上に置いた時、声が可笑しくなった。とりあえず、寝癖は直しておこう。

「ちょ、ちよっと、泉希!」

「寝癖直すから、動くな。数分で終わる。」

そう言った後は、おとなしくなった。少し、顔が赤くなっていた。

「よし!直った。」

霊夢の寝癖は、あまり直りにくかった。女性というのは、皆直りにくいのだろうか?

「あ、ありがとう。」

少し残念そうな顔をしていた。なんでだ？

「あ、そういえばさっきチルノっていう子が来て、勝負を挑まれたんだけど・・・」

「え？チルノに？まさか、受けたんじゃないあ・・・」

「三日後に霧の湖って言うてた。なんか、俺を倒して最強になるとか言ってたけど」

霊夢が呆れた顔になっていた。

「それで、受けちゃったんだ・・・」

「まあ、そういう事になるな。それで、スペルカードを一枚欲しいんだけど・・・」

すると、ため息一つ吐いてスペルカードの紙を渡してきた。

「何に使うか、大体分かってるけど無理しないでね。」

「分かってる。まあ、ついでにもう一つ頼みごと。」

「何？」

「スペルカードを作った後、訓練の相手になってくれ。」

「・・・へ？」

少し困惑した顔になった。そりゃあ、ちょっと前までは相手を傷つ

けたくないと言っていた男が、急に訓練してくれと言つのである。

「それは良いけど、怪我しても知らないわよ？」

「大丈夫。それでも、幾つかの戦場を潜り抜けてきた男だ。手加減無しでやってくれ。」

とりあえず、スペルカードを作っておくか。

スペルカードが思いつかない。既に10分以上経った。幾つかの案は浮かび上がったが、全然駄目だ。

「ん？相棒、なにやっとなるんや？」

三十八が来た。そう言えば、こいつを忘れていた。

「三十八、俺に合ってるスペルカードってどんなのだ？」

「・・・そうやな・・・そうや！剣術ってのはどうや！」

剣術か。良いのは良いが、剣術ではなく、銃剣術しか出来ない。

「なら、銃剣術のスペルカード作れば良いやないか。」

そついう発想は無かった。早速作ろう。

「で、銃剣術の想像はあるんか？」

「は？・・・そう言えば、全然ない・・・」

三十八が大きいため息をついた。

「しゃあない。わいの作ったスペルカード見せるけえ、それを元に作りや。」

「すまん。というか、いつの間にスペルカードを？」

「紅魔館で、美鈴はんに貰ったんや。それじゃあ、始めるで。」

三十八が、スペルカードと日本刀を取り出した。

「雷剣「雷電一斬」」

三十八の日本刀から、稲光が発生した。どうやら、日本刀に稲妻が纏っているみたいだ。

三十八が、日本刀を鞘に戻すと稲光は消えた。

「どうや？わいの雷電一斬は。」

「ああ。参考になった。」

一つだけ、思い浮かんだ。

「これにするか。」

思い浮かんだ光景を思い出し、目を瞑った。数秒後、目を開けるとスペルカードに絵が入っていた。

「炎雷剣「炎の舞 雷の演奏」だな。」

「お。えらいごつい名前やな。早速見せてや。」

「いや、後で訓練するからその時に見てくれ。」

銃剣の名手と言われた俺が、ここの世界の戦いにどれだけ通用するか。やってみるか。

？さんの決闘願（後書き）

スペルカード紹介。

剣符「雷電一斬」三十八の主力カード。刀の本体の周りに雷が纏い、切った物をさらに電撃で攻撃。長時間使用可能。

ご意見、ご感想をお願いします。

戦闘訓練

準備を済ませて外に出てみると、既に霊夢が戦闘体制に入っていた。5枚ほどのスペルカードを持っている。

「準備できた？」

「ああ、出来てる。」

「それじゃあ、まずスペルカードルールの説明から始めるわよ。」

1通り聞き終えた。とりあえずまとめると、スペルカードによる決闘はスペルカードの使用回数と制限時間を決めて置いて、体力が尽きるか決められた回数分のスペルカードを全て避けられたら決闘終了了。

負けた後は追撃はしてはいけない。

また、向こうが戦意喪失した場合も決闘終了。と、ざっとこんな物だ。

「さて、座学はこの辺にしておいて、実戦に移る？」

「了解であります、教官殿。」

あ、つい兵学校の癖が・・・

「その教官殿って止めてくれない？」

「了・・・分かった。」

「三十八、丁度良いから審判して。」

「了解や。それでは、2人とも位置へ。」

こういう真面目なときになると普通の言葉に戻るらしい。
俺と霊夢が所定の位置に移動して、向き合った。

「それでは・・・決闘始め！」

一番最初に行動したのは霊夢だった。大きく後ろに下がって距離をとった。霊夢は近接攻撃は出来ないんだっけ？

「霊符「夢想封印」！」

一枚のスペルカードを取り出した。すると、複数の札が現れてこちらに直進してくる。

「く！」

それをギリギリのところまで避ける。が、あの札は誘導性能を持っているらしく、避けてもこちらに直進してきた。

「おら！」

三八式の引き金を引き、弾幕を発射する。札の一枚に当たって、札が消滅した。

「今度はこちらの番だ！」

三八式に先ほど作ったスペルカード、炎雷剣「炎の舞 雷の演奏」を装填した。すると、三八式の銃剣が付いていた場所に、炎の刀が現れ、その周りに雷が纏っていた。そして、一気に霊夢の方に走った。いつもよりも体が軽く、速く走っている。

霊夢は人間離れた速度に驚いたものの、すぐに新しいスペルカードを出して発動させた。また札がこちらに飛んできた。

「光符「菊花紋撃」！」

もう一枚のスペルカードを装填して、発射準備した。前に撃ったとおり、菊花紋章が現れた。

「おらああ！」

引き金を一気に引いた。そして、光線が発射され、札を巻き込んで霊夢に直進した。霊夢は、能力の空を飛ぶ程度の能力を使って上に避けた。よし、計算どうりだ。

俺も跳ねて、霊夢の上空についた。そして、重力に引かれるまま、銃剣を一気に振り下ろした。

霊夢は、何処から出したのか分からないが、一本の杖を持っていた。その杖で、俺の銃剣を受け止めた。どうやら、杖に結界張っているらしく銃剣が杖の一手前で止まっていた。

「なかなかやるじゃない！」

「まだまだ！」

銃剣がはじき返された。地上に着地した霊夢と俺は武器を構えたまま向き合った。

「凄いわね。まだ幻想郷に来て2ヶ月も経ってないのに、こんなに強いなんて。こっちも少し押されてるわね。」

「さっき言っただろ？戦場を幾つか生き残ってるんだ。だから、半人前だが一応戦闘については知ってる。」

「そうね。じゃあ、これで最後にする？」

霊夢が杖を構え直した。

「そうする。これ以上やると、怪我しそうだ。」

俺も三八式を構え直す。そして、沈黙。

どちらも、先に相手が動くのを待っている。汗が垂れそうだ。

ピチャン。汗が地面につく音がした。その音と同時に2人ともが動き出した。そして、三八式の銃剣と、杖が交差した。

カランという乾いた音がした。どうやら、結界を破って杖を破壊してしまっただけらしい。

それと同時に、スペルカードの効果も切れてしまった。丁度終わり時だったらしい。

「さすがは外の世界で武士^{もののふ}をやっただけはあるわね。結界が破られたのは久し振りだわ。」

「スペルカードのおかげだ。それより、怪我は？」

「無いわ。そっちは？」

体に痛みは無かった。まあ、一応確認してみると膝に擦り傷を負っ

ていた。

「特に無い。着地の時に少し擦っただけだ。」

「普通の人なら大怪我して帰っていくのに、貴方やっぱ妖怪じゃないの？」

「だから、外の世界には妖怪っていう種族は居ないぞ。仮に妖怪だったら、こんな特徴の無い妖怪居るのか？」

「中国・・・美鈴がいるわよ。」

ああ、納得だ。でも、あれはあれで、何かしらの能力がある。

「まあ、妖怪だったら何かしらの能力とかがあるだろ？」

「そこが問題なの。人なら修行していけば私みたいに飛べるし、妖怪なら最初から持つてる。泉希だったら・・・なんだろう？」

なんか。俺が妖怪っていう仮定がされているような気が・・・
そう思ってたため息をついた。膝に手を置いて、前かがみになった。
少し気分が悪くなった。

「おいおい、相棒。大丈夫か？」

三十八が心配になって駆け寄ってきた。霊夢も背中をさすってくれた。

「大丈夫だ。少し気分が悪くなったただけだ。」

そう言つて、膝から手を離す。すると、膝にあつた擦り傷が消えている。

「ん？なんだ？」

「泉希、どうかした？」

「いや、いつの間にか怪我が消えてたんだ。」

「怪我が？・・・もしかしてこれが泉希の能力？」

は？俺の能力だと？

「たぶん、怪我を触つて治す程度の能力・・・だと思つわ。」

そんな、神みたいな能力が俺にはあつたのか？でも、昔は無かつたはずだが・・・

「そうやったな。少なくとも、日本ではそんな能力は無かつたわ。」

「と、いうことは幻想郷に来てからという事か？」

「そうなるわね。そういえば、前にここの景色が懐かしいと言つてたわよね。」

「ああ。あの時、何故かそう感じたんだ。・・・まさか、な。」

俺が幻想郷出身な訳が無いな・・・けど、もしかしたらこの能力も幻想郷に来て復活したと言え、検討がつく。

「相棒、そのまさかかも知れないわ。ちょっと、調べてみるか？」

「紅魔館か？」

「そうや。それじゃあ、早速行くか？」

「それなら私も行くわ。」

数時間後をかけて紅魔館に着いた。やはり遠い。

「ん？珍しいわね。霊夢が紅魔館に来るのは。今日は何のよう？」

珍しく門番の美鈴が起きていた。雪でも降りそうだ。

「ちょっと、調べ物をしにきたのよ。中に入れてくれる？」

「それはいいけど、咲夜さんには絶対寝てないって言ってよね。またナイフに刺されるのは嫌だから。」

「分かってるわよ。じゃあ、入るわね。」

一応、許可は下りたみたいだ。霊夢の後ろをついて行って、紅魔館に入った。

中に入ると、やはり外見と中の面積が違う。何回見ても不思議だ。そんな事より、俺の正体が先だ。

「よし、行くぞ。」

図書館に入ると、やはりあの人がいた。

「パチュリー、ちょっと調べて欲しい事があるんだけど。」

「・・・不法進入。」

こちらに法律があるのか？

「まあ、気にしないで。とにかく、調べて欲しい事があるの。」

「なに？」

「泉希の記憶を見せて欲しいの。」

「記憶？ああ、「記憶の鏡」ね。」

記憶の鏡？そんな物があるのか？

「えっと、確かここに・・・あった。」

パチュリーが空に浮かんで、本棚の一番上にあった箱の中から、円形の銅鏡を取り出した。パチュリーも空を飛べるらしい。

「泉希、この鏡持つて。」

鏡をか？それで何が分かるのやら。

鏡を手に取った。埃をかぶっていたが、埃を取ると、自分の顔が見えた。が、いつもの自分の顔ではない。1ヶ月前の、目を失った日

の自分だった。後ろの風景も、ジャングルだった。

戦闘訓練（後書き）

- ・ 次回、泉希は日本人では無かった事が明らかに。その正体とは・・・

スペルカード紹介

炎雷剣「炎の舞 雷の演奏」

三十八の雷電一斬を手本に作ったスペルカード。炎の剣の周りに、雷を纏わせている。

ご意見、ご感想をお願いします。

泉希の正体

気付けば、周りの光景は陸軍兵学校だった。運動場では、「全体進め！」という掛け声が聞こえる。そういえば、ここの教官は厳しいと評判だったな・・・

時間は遡り、帝都 東京へ。ここで、軍隊に入る事を決めた。親父は猛反対していた。医者の子が人殺しになってどうする。そう言われた。その反対を押し切って陸軍に入った。その結果が左目という物だったが・・・

国民学校時代。学校の校庭ではしゃぐ子供達。その中には、俺も入っていた。自分を自分で見る、とは奇妙なものだ。そう言えば、オカリナ好きのあいつは今どうしているのだろうか。少なくとも、陸軍が海軍に入っているだろう。

国民学校時代から前はほとんど覚えていない筈だった。だが、目の前の光景は国民学校以前だった。親父の肩に乗って歌を歌う俺がいた。こんな時代もあったのか・・・

さらに戻って、俺が幼児の時の時代になった。神社の前で、二人の人が話していた。

『すまない。ワシのせいでこの子と外の世界に行く事になって・・・』

『しょうがないですよ。何も、自分が悪いわけではないんですから。』

親父と知らない女の人の声。誰だろうか。どこか、懐かしい気がする。

『そう言ってくれるのはお前だけだな・・・それでは、博霊の巫女殿よろしく頼む。』

『はい、分かりました。』

今度は、霊夢のような服装の女性が出てきた。

『それでは、境内へ。須久那美迦微様^{すくなびこな}』

スクナビコナ？親父はそんな名前じゃあ・・・それに、外の世界って事は・・・

親父が境内の中に入っていく。腕には、赤ん坊が抱かれていた。

『そんな顔しないでください。神様なんでしょう？』

神・・・様？

『神でも寂しくなる。二度とお前と会えない事は凄く残念だ・・・』

『私も残念です。・・・私達の子を頼みますね。』

ギィと扉が閉まる音がした。ちょっと待ってくれ、親父！俺は、俺は何者なんだ！？

親父のいる境内に入ろうとした。が、その前に視界が暗くなっていた。

目を開けると心配そうに見ている霊夢の顔が見えた。

「泉希！よかった！」

そう言って抱きついてきた。何がどうなってるんだ？

「あ、ごめん。」

顔を真つ赤にした霊夢が離れた。起き上がると、真剣な顔をした三十八とパチュリーがこちらを見ていた。

「相棒、正体が分かったで。」

「本当か？俺はいつたい・・・」

さっきのは夢だったのか？でも、何か引つかかる。親父はスクナビコナという神様。神社。外の世界。私達の子供・・・やはり俺は・・・

「ご名答。相棒は、幻想郷出身や。それで、日本をつくった神様の一人で医療の神様、すくなびこな須久那美迦微の息子や。まさか、相棒が神様やっただとはな。」

「神・・・様・・・」

確かに、そっちの方が納得いく。触っただけで怪我を治す。異常なまでの魔力。そして、さっきの訓練の動き。やはり、幻想郷に来てから力が復活してきているのだ。

「・・・しばらく、一人にしてくれないか・・・」

「ん？わかったわ。ほな、失礼するで。」

三十八とパチユリーが出て行った。霊夢も出て行こうとした。

「・・・霊夢は残ってくれ。」

「え？・・・うん。」

図書館の扉が閉まる音と、神社の扉が閉まる音が重なった。さっきの夢は何だったんだろうか・・・

「・・・霊夢。俺が神様なのは本当か？」

「・・・本当よ。記憶の鏡は、本人も忘れている過去も見える道具なの。」

「人殺しの次は神様か・・・人生何があるか分からんな・・・」

「・・・そうね・・・」

そう言えば、親父はどんな神様なのだろうか？医療の神様と日本の創造者とは聞いたが・・・
それを霊夢に聞いてみると、いろいろあるらしい。

「ざっと言ってみると国造りの協力神、常世の神、医薬、温泉、まい禁厭ない、穀物霊、知識、酒造、石、位かな。って、温泉の神様？」

「そう言えばそうだな。菊花紋撃で温泉出したし。」

それも能力だったのか？・・・それは置いといて、石の神様って・・・

・・地味だな。

まあ、幻想郷に来てからいろんな事があったから、こっという驚きには慣れてしまった。神様だった。それで終わりだ。

「さて、正体も分かったところだし、帰るか。」

「え？」

「ん？どうかしたのか？」

「気持ちの整理がつくの早いわね・・・」

「幻想郷に来てから慣れた。それだけだ。」

その時、外でボォーという音が聞こえた。この音は・・・

「何だったの今の音。鳥の鳴き声じゃあ・・・」

「船・・・か？」

船が出発するときの汽笛だ。この重々しい音、軍艦か？

「とりあえず見に行こう。何かあったら大変だ。」

「そうね。」

俺と霊夢は図書館を後にした。

三十八とパチュリーと合流して、霧の湖のほとりに向かった。する

と、所々が錆付いた鉄の城が座礁していた。この艦、見覚えがある。
・ ・ ・ 確か、南方戦線に行く前に立ち寄ったトラック環礁で、寄り添うように浮かんでいた巨艦・ ・ ・ そして、未来でレイテ沖海戦で沈むはずの・ ・ ・

「戦艦・ ・ ・ 武蔵・ ・ ・ 」

確か、レイテ沖海戦の前に塗装を塗り直していた筈だが、この戦艦は長年放置されていたかのように錆付いていた。それに、人氣が無い。艦の横腹には多数の穴。どう見ても撃沈された後みたいだ。

「この軍艦、どうしたんや？こないばろぼろやったら浮くはず無いわ。」

「そうだな。さっきの汽笛はこいつからか？」

「煙突から煙が出とったわ。間違いない。」

「ちょっと、この鉄の塊は泉希達の世界の物なの？」

パチユリーが聞いてきた。俺が答えようとすると、三十八が答えた。

「鉄の塊とは失礼な！この軍艦は世界最強の戦艦武蔵や！」

ん？確か、この戦艦って極秘に作られてなかったか？何故分かるんだ？

「俺もこいつも同じ兵器や。相棒達には聞こえなくても、わいにはこいつの声が聞こえるんや。武蔵はん、少し入るで。」

そう言つと、いつの間にか降りていた階段^{タラップ}を三十八が上り始めた。
同じ兵器・・・か。

泉希の正体（後書き）

後半に武蔵を出したのは自分の趣味です。すみません。

キャラ紹介

谷 泉希 元大日本帝国陸軍上等兵。本当は日本を作った神の一人、スクナビコナの息子。幻想郷出身。親が神様だけに、いろいろな能力が使える。

銃剣道が出来る程度の能力

銃火器が扱える程度の能力

酒に強い程度の能力

触っただけで怪我を治せる程度の能力

石を自由自在に使える程度の能力

液体を酒に変える程度の能力

温泉を湧かせる程度の能力 などなど。

ご意見、ご感想をお願いします。

戦艦 武蔵

階段を上がって甲板に出てみると、目に入っただのは巨大な艦砲だった。確か、46センチ砲だったか？一番主砲は大破こそしてないものの、黒く焦げていた。砲身は全部健在だった。

艦橋は形こそ残ってはいるが、黒く焦げて大破していた。ここまでやられているとは……

もう一度、主砲の方に目を向けると、魔法使いと記者（追っ駆け）がいた。

「魔理沙に文、ここで何やってるんだ？」

「ん？ああ、泉希か。こいつがこの鉄屑を撮りたいって言うから来たんだが……」

魔理沙が文のほうを見た。少しがっかりした様な顔になっていた。

「カメラが……」

「こいつのカメラが壊れちゃったんだ。これ一台しかない物だから、写真が取れないんだよ。」

「なるほど……そういえば、艦内に入ったか？」

「いや、まだだぜ。そういえば、私達が来る前に何人か入ったみたいだぜ。」

まずいな……図書館で見つけた本によると、艦自体が大きすぎて初めて入った人は絶対に迷うらしい。

「たぶん、チルノ達だと思うが・・・」

さらに奴らかよ・・・これは絶対に迷っているな・・・

「・・・とりあえず、艦内に入ってみるか・・・」

艦橋の下にある扉が開いていた。中は真っ暗だった。どうするか・

「誰か、明かりは無いか？」

その場にいた全員に聞いたが、誰も持っていないさそうだった。紅魔館から持ってくるか？

そのとき、外から声が聞こえた。

「霊夢さ〜ん！泉希さ〜ん！何処にいるんですか〜？」

この声は・・・美鈴か？

「おい！美鈴！紅魔館に行ってから明かりを持ってきてくれ！」

「分かりました！」

とりあえず、明かりのほうは大丈夫そうだ。待つしかないか・・・

数分後、美鈴がカンテラを持ってきた。明かり自体は暗いが、無い

よりましだ。

カンテラに火をともし、入る準備を済ませた。

「よし、入るぞ。」

艦内に入ると、かなりの湿気があった。換気扇が止まっているなら仕方が無いか。

「蒸し暑いわね・・・」

霊夢がうんざりした顔で言った。

「しょうがないわ。通気性が無いんや。たぶん、艦内の全部がこうなってるやろ。」

俺と三十八以外の全員がげんなりした顔になった。

「それより、チルノ達は何処にいるんだ？」

「こんなにでかいんや。きりが無いで。」

「・・・そういえば、チルノって氷の妖精だったわ。」

「氷の？だったら、暑い機関室は無いな。」

その時、ヒヤッとした空気がした。氷の妖精なら、空気内の水が凍るはずだ。

「こつちだ！」

「あ！ちよつと待って！」

気温が低くなっているほうに走り出した。

しばらく行くと、壁に張り付いた氷が目立つようになった。近くみ
たいだ。

「あ！いた！」

美鈴が言った。確かに、3つの人影があった。

「ん？誰じゃ！まさか、鬼畜米野郎か！」

その人影の一つが言った。その手には竹刀らしき物を持っていた。

「ま、待て！俺は帝国陸軍の上等兵、谷泉希だ！敵・・・アメリカ
軍ではない！」

「何じゃ、陸軍さんか・・・自分は、戦艦武蔵主計科所属、塩野
柳^{やなぎ}じゃ、よろしく頼む。」

向こうが敬礼してきた。こちらも敬礼を返す。

「こんな所じゃ不便じゃけん、兵員室に行こうか。」

武蔵のとある兵員室に着いた。ここだけは、ボロボロじゃなかった。

むしろ、綺麗だった。

その兵員室の机の上には、一個の鍋と米粒のついた皿が置いてあった。匂いからして、カレーか？

「ここでカレイライスを食べてたら、その2人が腹を減らしてここまで来たけん、一緒に食べる事にしたんじゃ。食べ終わった後、迷子になったと言ってたんでな、送ろうとしたら谷さん達に会った訳じゃ。」

今までのいきさつを話してくれた。どうやら、外の様子が分かっていないらしい。

「それで、波の音は聞こえなくなったは、海上にいたはずなのに人は入ってくるわでどうなっとんじゃ？」

「それはですね・・・これを聞いても驚かないでくださいね。」

「ん？どういうことじゃ？」

「実はですね・・・」

ここが幻想郷であること、武蔵は今、湖の岸边に座礁している事を話した。

「何じゃそんな事か。そんな事に驚いとなら、身が持たんけん、驚きはせんぞ。」

予想以上に驚いていなかった。が、すぐに悲しそうな顔になった。

「そうか、この武蔵も船として航行出来んか・・・」

「ええ。相棒の三十八が言っています。」

「ああ、そうや。武蔵自身がそう言っとな。間違いないわ。」

「武蔵自身？」

三十八が三八式歩兵銃の化身だという事を話した。さすがにそれには驚いたらしい。

「へえ、艦魂が本当にいるんか。そうじゃったら、伝えてくれんか？ここまでスタボロにしてすまん、とな。」

「武蔵はん、そうらしいぞ。・・・分かったわ、伝えとく。塩野はん、武蔵はんが『こちらこそ、他の人たちを救えずに撃破されてしまった。』ってそうや。」

「・・・分かった。」

「それで塩野はん、これからどうする気や？武蔵で暮らすのはちょっと難しいやろ。」

確かにそうだ。所々に通行不可能となった通路が複数ある。たぶん、防空指揮所に上がるのは不可能だろう。

「しばらくはここで暮らすつもりじゃ。・・・出来れば離れたくは無 い けえ、移住は考えてないがな。」

武蔵から離れたくない、か。確かに、さっき武蔵に意志があると聞いたら離れたくないだろう。

武蔵から離れずに安全に暮らす・・・そうだ。

「もし、この武蔵を移動させられるといったらどうします?」

「そうじゃな・・・それなら、移住も考えても良い。出来たらの話じゃがな。」

「それが可能なんですよ。方法はですね・・・」

萃香が山一つ壊せる力を持つ事、そして、鬼であることを話した。

「後、問題があるんですが・・・」

「なんじゃあ、言ってみい。」

「萃香はかなりの呑んべえなんですよ。少し間違えたら武蔵自体が壊れますし、回りに被害が及ぶんです。」

そう、問題はそこだ。萃香が酒を飲まない事は絶対に無い。手元が狂って落としたら大変だ。

そこに、霊夢が話しに割り込んできた。

「さっきの話は聞いてたけど、何処にこれをもって行く気なの?」

「そりゃあ、博霊神社の近く」だめ!そんな事したら、参拝客が減るわ!」・・・はあ。」

確かに一理ある。こんなに大きい物があるとは思えないはず。けど、利点もある。

「塩野さん、土官室と厨房って繋がってますか？」

「通路が崩壊しちよるけん、遠回りになっちよるけど、通れよお。」

「・・・さつきから少し聞き取りにくい。広島弁か？まあ、通れることは分かった。」

「それならいいです。霊夢、ちょっと来てくれ。」

柳に声が聞こえない程度の距離をとって、小さい声で言った。

「この武蔵は、こんな姿になる前には「武蔵旅館」って言われる位豪華だったらしいぞ。これに合わせて博霊神社の温泉、立派な旅館だ。修理して利用すれば、博霊神社の賽銭量も上がるはずだが、どうする？」

本心ではないが、武蔵を移転する為の口実を作った。たしか、霊夢に金はかなり効くだろう。案の定、霊夢は唸って悩んでいた。どうやら、嘘とはばれていないらしい。

「・・・・・・・・わかったわ。ただし、温泉のほうは頼むわよ。」

「・・・そう言えば、温泉で何か忘れているような気がするが・・・」

「博霊神社」

「へっくしょん！」

賽銭箱の前に立っていた妖夢がくしゃみをした。

「明日から温泉作れって言ってたのに、霊夢さんも泉希さんも何処に行ったんですか！」

一人虚しく、叫んでいた。

〔戦艦武蔵〕

柳の方に戻って、移動の許可を貰った事を告げた。

「おお、そいつはよかった。よかったのお武蔵。」

声が聞こえてるのか聞こえてないのか、武蔵に語りかけていた。

「それで、いつ移動するんじゃない？」

「それは未定ですね。明日かもしれませんし。萃香しだいですね。」

「はあ、そうか・・・」

少しがっかりした顔になった。

「谷さん、敬語はやめてくれなろうか？」

話が終わった後、柳が言ってきた。

「わかり・・・わかった。」

やはり、こっちの方が言いやすい。

戦艦 武蔵（後書き）

恥ずかしながら、広島県民でありながら広島弁には自信がありません。

なにせ、広島といっても岡山県側のF市という所に住んでいて、広島弁とはあまり縁がありませんので・・・

ご意見、ご感想をお願いします。

武蔵の移動

とりあえず、紅魔館の住人とは別れて一路博霊神社に戻った。

「あ！霊夢さん！何処行つてたんですか！？困りましたよ！」

そうだった、何か忘れていると思ったら、妖夢か……

「ちよつと紅魔館に用があつて……」

「もう！行くなら行くで、置手紙ぐらいおいといてくださいよ！」

昨日の立場が逆転している……三十八は、俺を置いて神社の中に入っていた。

「そんな事より、萃香は何処に？」

「それなら、部屋で寝てましたけど。って、そんな事って何ですか！」

今度はこつちに来た。

「ちよつと、霊夢。萃香の奴を呼んできてくれ。」

「分かったわ。」

「ちよつと、聞いてるんですか！？」

霊夢が萃香を呼びに行った。その間、妖夢に説教をされ続けたが……

・
「ふあ〜」

あくびをしながら神社から萃香が出てきた。

「あ、萃香。ちょっとお願いがあるんだ。」

「お願い？めんどくさいぞ〜」

「・・・後で友達に酒貰ってやつても良いぞ・・・」

「酒！？やるぞ！何やるんだ！？」

やはり萃香は酒で動くらしい・・・

「ちょっと動かして欲しいんだが、いいか？」

「何でも動かすぞ！」

「全長263m、幅38m、6万5000トンの物だ。霧の湖から博霊神社の近くに動かして欲しい。」

「まっかせろー！」

萃香が走って行った。って、今行けといったわけじゃないが・・・

「泉希、酒を貰うって誰から？」

「貰うわけじゃ無い。作るんだ。」

一応、親父が酒造りの神だし、何故か能力の使い方も分かってきた。

「作るって、どうやって?」

「桶に水入れてきてくれ。それから俺に任してくれ。」

数分後、霊夢が桶一杯分の水を持ってきた。その後、霊夢は掃除をしないといけないと言って神社の中に入っていった。
妖夢が不思議そうな顔で言った。

「これ、水ですよ。どうやってお酒にするんですか?」

「まあ、見れば分かる。」

確か、手を水の中に入れて・・・

「ふん!」

力を入れれば酒が出来るんだったか?

「これで出来たはずだが・・・飲んでみるか?」

冗談で言ったのであるが、どうやら彼女は本当に受け止めたらしく、

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

と、桶を拾って一気に飲み干してしまった。すると、ほんのりと顔が赤くった。

「いすきさん」。 (泉希さん) このおはけ、とうらてつふったんれふか？ (このお酒、どうやって作っただんですか？) 」

「おい、大丈夫か？言葉もまともに話せてないぞ？」

「らいそつふ、らいそつふ。 (大丈夫、大丈夫。) ほれにひへも、すほしあふるーるはたふあふあひらせん？ (それにしても、アルコールが高くありません？) 」

もう、何を言ってるのかも分からなくなってきた・・・妖夢こいつに酒を飲ますんじゃなかった・・・

「・・・部屋で寝ている・・・」

「ほーかいいふ。 (了解です。)」

正直、自分で歩いていけるのだろうか？心配になってきた。が、心配は要らないようだった。

彼女の隣で浮いている半霊 (妖夢が半生半死なのは霊夢から聞いている。) が彼女の体を支えている。 ああいうの便利だな。

「さて、また作るか。」

妖夢に飲まれた酒が入っていた桶を拾いつつ呟いた。すると、昨日湧いた (岩を破壊して出した) 温泉が吹き出た。そう言えば、あれって間欠泉だったんだな。

温泉か・・・温泉で作った酒、試作してみるか。

「その前に、あれ自体を止めないとな・・・」

ここで、石の神様の本領発揮と行くか。確か・・・

「両手を地面につけて、どんな状態にするか思い浮かべる、と。」

とりあえず、間欠泉に蓋をしよう。じゃないと少々被害が多くなる。すると、地面から巨大な石が現れて間欠泉を塞いだ。一応、温泉を採るだけの穴は開けてある。

「うお！？なんだこれ!？」

後ろから声が聞こえた。さっき聞いたばかりの声だが・・・

「・・・魔理沙、今の見たのか？」

「ああ、なんか呟いてた所からな。それにしても、凄い能力だな。神様の類か？」

霊夢に続いて、こいつも勘が鋭いのか？

「・・・誰にも言つなよ。実はだ・・・」

「なるほど。で、さっきの能力は神様の能力なんだ。」

俺の正体をひとどおり言った。あまり驚いていない。やはり、こちらに神様が存在するせいかな？

「まあ、そういう事になる。で、何をしに来たんだ？」

「そりゃあ、ちょっと饅頭を拝借・・・おっと、口が滑った。」

前に来たときも目的は饅頭だったはずだが？饅頭も買えない位困ってるのか？

「・・・まあ、入るなとは言わないが、せめて賽銭を入れてやってくれ。」

「わかったぜ。それじゃあ、また後で。」

魔理沙は賽銭箱に何か入れて神社に入っていた。まあ、何か入れただけでも良いか。

「さて、酒でも造るか。」

仕事をした後の萃香は、どの位飲むのか分からない・・・

「ふう。これだけあれば大丈夫か？」

温泉が元の酒が、夕方になってやっと1石（18リットル）ぐらい作れた。でも、毎日普通に半石ぐらい飲んでるからな・・・それにしても疲れた。これも、魔力を使っているのか？

そのとき、遠くからドシンという音がした。やっと来たか・・・

「うー気持ち悪い・・・」

神社から妖夢が出てきた。そして、酒の桶を見て・・・

「ひい、もうあのお酒は飲みたくないですよ！」

「・・・誰がお前に飲ませると？」

そう言ってみたものの、やはり造った酒がトラウマになったらしく、桶から半径2mほどの間隔で避けていた。

「そんなに避けなくても良いんだが・・・」

「誰のせいでこうなったと思っているんですか！？貴方のせい・・・」

後半のほうは少しずつ声が小さくなっていき、あきらかに視線が俺の後ろを向いていた。

「どうしたん・・・だ？」

後ろを振り返ると、鉄の壁が迫っていた。武蔵・・・か？

「おい泉希、持って来たぞー」

「酒はあるのかー？」

萃香と・・・誰の声だ？

「泉希ーこれ何処に置けばいいんだー？」

「そつだな・・・とりあえず、森に置いてくれ。」

「わかったー」

武蔵の巨体が少しずつ動いていく。やはり、奇異な物だ。

「み、泉希さん・・・これ、なんですか？」

妖夢がおびえたように言った。ここでは、こんなにでかい物は無いのだろうか？

「ああ、俺の世界の戦艦、戦う船の武蔵だ。」

「せ、戦艦！？外の世界にはこんなに大きい船があるんですか！？」

「まあ、日本が島国だからこのぐらいは普通「これが普通！？」・・・いや、実際はもうちょっと小さいが・・・」

妖夢、驚きすぎだ。チルノや霊夢でも驚かなかったのに・・・

「へえー外の世界の技術って進んでるんだな」

ん？日本の技術に興味を持ったのか？

「外の刀剣ってどんなのあるんだろう？」

・・・やっぱりそうなるか・・・

武蔵の移動（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

R e d f u l l m o o n (前書き)

今回は少し短めです。

Red full moon

武蔵を運び終えた後、3人の人影が武蔵から歩いてきた。2人は萃香と柳だろつが、もう一人が分からない。

「うーす。はじめまして、だよな？」

「ああ、そつだ。」

「私は星熊^{ほしくま} 勇儀^{ゆうぎ}つていうんだ。一応、萃香^{こいつ}と後二人で鬼の四天王を組んでるんだ。よろしく。」

四天王つて・・・萃香つてそんなに強いのか？

「よろしく。俺は元大日本帝国上等兵、谷 泉希だ。軍人つて分かるか？」

「ああ。外の世界で戦闘する人たちの事だろ？という事は、」

何だ？目の色が変わつたような気がするが・・・

「あんた、強いんだろ？いつちよ戦つてみるか？」

こいつ、好戦的だ・・・

「いや、やめておく。さつき言つたように俺は上等兵・・・簡単に言えば低級の軍人だ。そんなに強くない。」

武器が無いとな。と心の中で呟いておく。

「そうか、残念だ。それより、酒は何処だ？」

は？酒？・・・鬼って言うのは全員酒好きなのか？

「一応あるが・・・どの位飲むんだ？」

「そりゃあ、5石ぐらいは普通・・・」

何だと？リットルに直すと・・・

18×5＝90???

ぜ、全然足りない・・・

「まさか、それ以下とか言うなよ？」

「・・・そのまさかだ・・・」

呆れた、という顔になった。柳に助けを求めた。

「・・・そんな顔されても酒なんて代物無いけん、どうにもならん。」

「そう言っても、武蔵に何本かあるのでは・・・」

「出撃前に酒やら何やら全部下ろされたんじゃ。乗員が隠し持ってたもんもあるが、戦闘中に全部割れとる」

「そんな・・・」

「それより、いいんか？さっきの鬼達が飲んどるが・・・」

そう言われてさっき作った酒を見てみると、既に萃香と勇儀は飲み始めていた。既に一升瓶が数本空いている。飲む速さはいつもの通りだが、どこか違う。

「勇儀くなんか酔ってない」

「思ったよりアルコールが強いな。飲み甲斐があるってんだ。」

勇儀の方は分らないにしても、萃香は明らかに酔っている。いつもの持つてる酒ならあまり酔わないのだが・・・

「？なんか、いなげな（異常な）事あったんか？」

「いや、萃香は普通の酒なら酔わないはずなんだがおかしい。」

「えーたい（いつも）酔わんのに？そいはいなげな事じゃな。その酒、持ってきてみ。」

柳にそう言われて一升瓶を持ってきた。すると、柳が一升瓶を取って、一口飲んだ。

「これ、えらい（すごい）きついけん、酔うのも無理なかる。」

広島弁で少し聞き取りにくいのが、取り合えず内容は、この酒は凄くキツイから酔うのも無理は無いという事らしい。そうなのか？

俺も一口飲んでみる。柳の言った通り、萃香の酒よりもアルコールが強い。確かに酔うな・・・

「・・・なるほど・・・そういえば塩野さん、その広島弁はどうに

かならないのか？」

「そりゃあ、ちょっとは標準語は使えるけど、使いにくいけえ使わんのんじゃ。」

「出来れば、そっちで話してもらいたいんだが・・・」

「何とかしてみるけん。ちょっと待ってくれ。」

だいぶ聞き取りやすくなった。多少、広島弁も残っているが・・・

「取り合えず、寝る所はどうするんだ？」

「そりゃあ、武蔵かその神社に決まってるで。」

武蔵が含まれているのか・・・けど、武蔵だと灯りその他は無いはずだ。やはり神社の方に寝たほうが良い。そう言おうとしたら、

「やっぱり神社で寝るけん、部屋に連れてってくれんか？」

と言ってきた。武蔵自体には悪いが、今夜は一人で過ごしてもらおう。

この日の月は満月。しかも、赤色に染まっている。不吉な夜だった。

「どつしたんや、相棒。空なんか見て。」

「三十八か。今日の月がちょっとな・・・」

「月？・・・ああ、赤い満月やな。確かに不吉や。」

く霧の湖く

霧の湖には、いつもの通り霧がかかっている。月の光を浴びて、赤く染まっていたが・・・

その中を、高速で通過する一つの影があった。背中から枝状のものが生えている。

その影が通過していった所にあった物という物が破壊されていった。

「ん！？なんだ!？」

近くで見ていた人が叫んだ。が、その叫びもすぐ消えた。というよりも、その人自体がこの世から「消えた」。

「ぐうう・・・」

その影が唸った。何処と無く苦しそうだった。

Red full moon (後書き)

次回から異変が始まります。少し出血シーンや何やらが増えますので、ご了承ください。

ご意見、ご感想をお願いします。

異変の始まり

翌朝、目が覚めると神社の周りに紅い霧が出ていた。幻想郷に来てから2ヶ月ほど経つが、そんな現象は知らない。昨日の赤い満月といい、今の紅い霧といい、不吉である。

今日は万が一の事はあつてはいけなから、訓練はせずに神社の部屋の中で待機しておこう。

三八式を持って部屋に座っていると、霊夢が入ってきた。

「おはよう。良い朝・・・とは言いがたいわね。」

「どうなってるんだ？こんな霧見たこと無いぞ。」

「これ、前にもあつただけど・・・」

霊夢が前にあつた異変の事を話してくれた。紅魔館の主、レミリア・スカーレットが起こした異変で、今日みたいに幻想郷中が紅い霧に包まれた。これを紅霧異変と呼ぶらしい。それと、この霧は妖霧といい、普通の人は30分で死んでしまうらしい。

「それで、どうするんだ？やっぱ、紅魔館へ行「泉希さん！！助けてください！！」うん！？」

外から声が聞こえた。文の声だ。

勢いよく障子を開けた。すると、黒い何か文を追っている。俺は、三八式を構えてその黒い影に威嚇射撃をした。弾幕は、黒い影の手前の地面に当たり、火花を散らした。

「ぐるうう」

その黒い影が唸った。そして、向きを変えてこちらに突っ込んできた。

「く！」

その突進を銃で受け止めた。が、そのまま後ろの壁に突進され続けた。

よく見ると、突進してきた影は人型である。頭から角が生えていた。

「！？慧音さん！？」

霊夢が叫んだ。どうやら知り合いらしい。

慧音と言われた人を押し出して、霊夢の近くに行った

「知り合いか！？」

「ええ、人の里で子供に勉強を教える先生よ。普段はあまり好戦的じゃないのに・・・。」

先生がこんな凶暴で良いのか？

「霊夢、すまんがこの神社を傷つけるかもしれない！」

そう言って、菊花紋撃を出し装填した。

「慧音さん、すみませんが少し堪えて下さい！」

慧音に標準を合わせて引き金を引いた。発射の爆風で、部屋の中の物が吹き飛んでいった。

発射された光線は慧音に直撃した。光線が消えた後、さつきとは違う姿の人が倒れていた。

「慧音さん！大丈夫ですか？」

慧音？さっきのも慧音だったよな・・・

霊夢に揺り起こされた慧音が起きた。どうやら、さっきまでの凶暴さは無くなったらしい。

「・・・ここは？」

「博霊神社です。どうしたんですか？獣人化して暴走してましたよ？」

「取り合えず、中で話そう。文も出て来い。」

神社の上から文が降りてきた。

「・・・で、昨日の月を見たらいつの間にかこうなっていたと？」

慧音が今までのいきさつを話してくれた。どうやら、昨日のあの月が原因らしい。

「まあ、そういう事になるね。外の世界の神様。」

その発言に驚いた。なぜ、俺の正体がばれた？

「驚いてるようね。こっちだって伊達に勉強を教えてない。大丈夫、他の誰にも言っていないから。」

そうか・・・って、ここで言ってしまったら・・・

「ん？神様？これはスクープだ！」

一人厄介なのがいた。

「今の忘れろや。」

誰かがそう言った後、ゴンっと言う鈍い音がして、文が倒れた。その後ろに、刀の鞘を持った三十八が立っていた。

「これで忘れてるといいんやがな。それで、さっきの爆音といいこの霧といい、なんなんや？うるさくて寝れもせんわ。」

寝るって・・・こんな時に寝れるほうが不思議だ。

「状況を説明すると・・・」

「なんやて！？紅魔館で異変やと！？」

状況を説明し終わると、そう叫んで急いで出て行こうとした。

「おい、待て！何処に行くんだ！？」

「紅魔館に決まっとるやろ！彼女が心配や！」

彼女・・・美鈴の事か？

「そうや！なんか文句あるか！？」

「いや、無い。が、一人で行くのは無理だと思う。全員で行こう。」

その発言に霊夢が反論してきた。

「全員で？そしたら柳はどうするの？あの人は普通の人間よ。」

そうだった。どうにかしてこの霧を消さないと・・・

ふと、先ほど菊花紋撃を発射した所を見た。霧の色がそこだけ薄くなっていた。

「この霧、爆風で消せるのか？」

爆風で消せるのなら・・・

「相棒、武蔵の46センチなら消せるかも知れないわ。」

「よし。霊夢、神社の周りに結界を張ってくれ。神社が半壊するかもしれない。それと、全員に耳栓を用意してくれ。」

「え？わ、分かったわ。」

それを聞いた後、三十八と障子を開けて外に出た。目指すは武蔵の第一砲塔。

森を抜けると、武蔵の右舷側の階段があった。甲板に上がると、虚空の方向を向いた砲身が見えた。

「相棒、砲塔の裏に入り口があるわ。ついてき。」

「分かった。」

第一砲塔に向かって走った。

砲塔内に入ると、中は何故か電気がついていた。

武蔵の主砲塔内は、装填する場所と測的する場所の二つに分かれている。ここは、測的所らしい。

奥の扉に入ると、3つの巨大な機械があった。これが、主砲の砲身基部だろう。

「たしか、中砲に三式弾が装填してあるわ。」

「三式弾？」

「海軍が開発した最新型対空弾や。そっちの方が広範囲に爆風がいくやろ？」

確かにそうだが、一つ間違えれば地上に着弾して被害が及ぶ。

「大丈夫や。もう、仰角40度に調節してあるわ。三式弾の信管も調節してある。」

「・・・お前、いつから海軍に入ったんだ？」

「武蔵はんに教えてもらったんや。後は、この発火装置を作動させるだけや。」

そう言っつて、尾栓の後ろを指差した。確かに、機械がある。

「それじゃあ、後10秒で発射や。」

三十八が発火装置に手をかけた。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・
3・・・2・・・1・・・」

「発射あ！」

発火装置を作動させると、今まで聞いた事も無い大爆音がした。これが、世界最大の艦砲・・・
数秒後、遠くの方でもう一回爆発音がした。三式弾だろう。

「どうや？霧は晴れたか？」

砲塔の横についてる望遠鏡を覗いた。すると、武蔵の周りの霧は消えていた。

「消えてるみたいだ。他の所は見えないが・・・外に出るか。」

主砲から出ると、青空が見えていた。爆風がそんなに強かったのだろうか？

丁度その時、霊夢たちが甲板上に上がってきた。全員が耳を手で押さえている。

「・・・今の音なんだったの？」

霊夢が聞いてきた。

「こいつの発砲音だ。と、言っても俺もはじめて聞いたが。」

武蔵の周りを見ると、かなりの範囲で霧が消えていた。と、同時に武蔵を中心に多数の木が倒れている。

「まさか、こんな威力があるなんて・・・」

同意見だ。同じ日本の兵器かと思うほどだった。

「・・・生きて、こいつの音を聞くとは思わなかった。」

柳が言った。外の世界では、一度も発射されていなかったから無理は無いが・・・でも、思っていたら寝ている時間にもこの霧がきた筈だ。なのに、この人は死ぬどころかピンピンしている。

「塩野さん、貴方どこもおかしくなっていないか？」

「ん？どういう事じゃ？別にどこも悪くは無いが・・・」

「いや、おかしくないならいい。」

・
どういう事だ？軍人である事以外は別に特殊な事は無いはずだが・・・

まさか、軍人はこの霧に耐えることが可能なのか？

「・・・霊夢、これからどうするんだ？」

「さっそく紅魔館に行きましょう。里の人も困ってるだろうし、太陽の畑に霧が行ったら・・・」

少し顔が青くなった事は聞かないでおう。
柳と萃香、慧音は武蔵に残って、霊夢、泉希、三十八は紅魔館へ向かった。

異変の始まり（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

敵は幾万（前書き）

戦闘シーンは基本的苦手なので、あまり期待しないほうが良いと思います。

それでは本編をどうぞ。

敵は幾万

武蔵から降りて、紅魔館に向かつて移動した。霊夢は低空飛行で移動、三十八は三八式に戻っていた。俺はというと・・・

「なんで俺だけ走らないといけないんだ！」

「しょうがないやろ？ 霊夢はんみたいに空を飛べないんやから。」

「しょうがないって、お前はなんで三八式じゅうはちしきに戻ってるんだ！？」

「こつちの方が楽なんや。」

そう言いあっていると、横の方から気配がした。急停止して、周りの様子を伺う。

「相棒、この森に何かいるわ。距離は・・・50m位か？」

そんなに近いのか。銃を構えて様子を伺っていると、霊夢が降りてきた。と、同時に向こうが行動し始めた。

「相棒、敵さん動いたわ。こつちに来る。」

「分かってる。」

三八式銃を地面に置いて、続いて両手を地面につけた。そして、屹立する岩を思い浮かべた。

すると、イメージどりの岩が現れ、敵とこちらの場所を遮った。これには味方も驚いたらしく、啞然としていた。

「わ、わ、」

壁の向こうから声が聞こえた。その後、ゴンっと言う鈍い音がした。

「・・・？」

「なんや？」

不思議に思っ、壁を元に直すと、文の服に似ている物を着ている人がいた。頭に・・・獣耳？

「あ、栞じゃない。」

もみじ？こいつの名前か？

「痛たたた・・・もう！酷いじゃないですか！」

「すまんすまん。こんな時だから、つい敵かと・・・」

「で、栞は何をしてたの？」

霊夢が栞に聞いた。

「上からの命令で、紅魔館を偵察しに行こうとしてたんですよ。したら、文さんから聞いてた泉希さんを見かけて、近づこうとしたらこうなつたんですよ。」

「それなら、声をかけるなり合図するなり、方法はあっただろ・・・！？」

そう言い終えたときに、周りから急に気配がした。囲まれている。

「相棒、どうするんや？ 囲まれとるで。」

「・・・極力、戦闘は避ける。」

炎符「幻想花火連弾」を装填しつつ言った。

「花火を撃った後、一気に走れ。しんがりは俺がやる。」

銃口を上に向けて引き金を引いた。そして、菊花紋撃を装填して、右側の森に向けた。

「霊夢、行け！」

「分かったわ！」

霊夢と椛が紅魔館の方に走っていった。それをチラッと見た後、引き金を引いた。

いつものとおり、光線が発射されたが、森の手前で光線が拡散した。森の木が次々と倒されていく。

「さっきの何や？ 菊花紋撃見たいやつたけど・・・」

いつの間にか人になっていた三十八が言った。

「俺もわからん。が、まだ敵がいることは確かだ。」

後ろに振り向くと、何十体もの小さい妖精がいた。敵というのはこ

いつらの事か。

「これは・・・多勢に無勢、だな。走るぞ！」

「分かったわ！」

俺達が走り出すと同時に敵も動き出した。上空と地面の2つに別れて追ってくる。

三十八が地面の敵に向かって刀を構えた。そして、一枚のスペルカードを取り出した。

「光符「菊花紋撃」！」

スペルカードを発動して刀の一番後ろを抑えた。すると、こっちの菊花紋撃と同じ様に、菊花紋が現れて光線が発射された。

「・・・三十八、お前もこれ出来たのか？」

走りながら聞いた。

「相棒の模造品やけどな。前の戦闘訓練の時に見た物を真似させて貰ったわ。」

まあ、こっちも雷電一斬を真似させて貰ってるから言い返せないが・

後ろを向いて敵の数を見た。さっきよりは減っているが、森の中から無限に湧いてくるらしく、増えている。

「きりが無いぞ。三十八、銃に戻れ！」

「分かったわ。」

三十八が銃に戻った。

「全速力で行く！」

「分かった。って今までの全力出してなかったんか!？」

それでも、神様の息子だ。頑張れば旧式の戦闘機並みの速度は出る。

「・・・相棒。ちょっと恐ろしくなってきたわ・・・」

三十八が怯えたように言った。

「分かった分かった。それじゃあ、行くぞ。」

一気に増速した。敵との距離が一気に開いた。

「今更、凄いと思うわ。」

だから、神様の息子だからだ。

数分間走って、敵を撒いた頃に霊夢と柊に追いついた。

「おい、霊夢！早くしないと敵に追いつかれるぞ！」

霊夢が振り返った。一瞬驚いていたが、神様という事を知っている為すぐに納得したような顔になった。

柊のほうは呆れたままの顔になっている。

「でも、これで精一杯なのよ!」

確かに、肩で息をしている。

「・・・しょうがない。」

三八式を肩にかけて、霊夢と栂の腰に手を回した。そのまま全速力で走った。

「ちょ、ちよつと! 泉希!」

顔を真つ赤にして霊夢が言ってきた。答える余裕は無いが・・・一方、栂はというと・・・

「うわああああ!」

絶叫していた。ちよつと涙目になってる。

霧の湖に着いた。ここにも紅い霧が立ち込めていた。不気味である。いつもなら妖精が大勢いて賑やかなのだが、今日は一切音が無い。それがいつそう不気味に思う。

霊夢達は近くの木に寄り掛かって休んでいる。

「相棒。この湖の中心になんかある。」

「何?」

人に戻っていた三十八が抜刀して言った。湖のほうを向くと、紅い

霧がかなり濃い所がある。あそこに誰がいるのか？

「・・・この武器の声は・・・」

三十八がそう言った。同じ武器なら声が聞けるのだった。

「あの嬢ちゃん相手が・・・こいつはまずい敵が来そうやな・・・」

その時、紅い霧が集まってる周りに水柱が屹立した。何が起こった！？

「気をつけや！敵は・・・フランはとてつもない能力をもつとるで！」

フラン？誰だ？

その時、紅い霧から何かが出てきた。空を飛んでこちらに来る。よく見ると、背中に枝にひし形の物が付いている。どこかで見覚えがある。

「まさか、図書館にいたあの子か！？」

人見知りのあの子が敵。少し身が引けるが・・・

「光符「菊花紋撃」！」

三八式を構えて装填した。すまないが攻撃させてもらう！

引き金を引いて光線を発射した。直撃位置だった。が、戦闘機のようにひらりとかわされた。

かわされた後、向こうが攻撃して来た。数百発の弾幕が周辺に降り注いだ。

が、精密な攻撃が出来ないらしく立っている位置にはほとんど来なかった。

外れたと分かったフランは、槍のような物を取り出した。近接戦で来るか？

「まずい！相棒、着剣し！」

「分かった！」

炎雷符「炎の舞 雷の演奏」を装填した。それと同時にフランが槍のような物を振り下ろした。その刃の部分は・・・

「何だと！？」

数キロに及んでいた。避けようとしたが、後ろを見ると霊夢と柊が腰を抜かして座っていた。

「く！」

銃剣を構えて、フランの攻撃を受け止めた。

敵は幾万（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

紅魔館崩壊ス（前書き）

フランドールさんは戦闘好きですが、今回の話ではその戦闘好きは全然出ませんのでよろしくお願いします。

紅魔館崩壊ス

フ란の攻撃を受け止めたと同時に左肩に痛みが走った。見ると刀身が左肩に食い込み、血が流れていた。

砂埃で周りが見えないが、悲鳴が上がっていない所を見ると、負傷したのは俺だけみたいだ。

その時、砂埃の中から突っ込んでくる影を発見した。大きさからして、敵だろう。

「く・・・」

銃を構え、攻撃に備えた。それと同時に敵が攻撃を仕掛けてきた。第一撃は、大振りだった。

これを難なくかわして、今度はこちらから攻撃した。三八式の長さを生かした突きだ。

その突きを武器で弾かれた。そして、一気に接近してきた。そうして、何度もお互いの刃を打ち付けあう。

つばづりあい状態になった。彼女の顔を見たとき、驚いた。目から涙を流している。顔全体も、どこことなく苦しそうな顔だった。

こいつは、慧音と同じ・・・という事は

「菊花紋撃を・・・入れるのか」

隊長が役立つと言ったのはこの時の為だったのか？

フ란を押し返して、菊花紋撃と幻想花火連弾を装填した。

「炎光符！「菊花紋撃・散」！」

先ほどの攻撃で気付いたが、この二つを合わせると光線が拡散して
広範囲で攻撃可能らしい。

フランを照準の中心に置いた。が、動きがおかしい。

「が……ぐ……」

何かを言っている。

「は……やく……う……ぐ……」

早く撃つて。そう言っていた。

「……すまない」

そう呟いて、引き金を引いた。いつもの様に光線が発射されて、フ
ランの前で拡散した。そのまま、直進して砂埃が吹き上がった。

「相棒！大丈夫か！？」

三十八が駆け寄ってきた。そして、左肩を見て驚いていた。

「相棒、よくそんな怪我ですんだな。普通だったら死は覚悟せんと
いけんのに。」

「……さっきのか？」

確かに、さっきのは直撃していたら死んでいた。

「泉希！大丈夫……」

霊夢が左肩を見て顔が青くなっていた。

「大丈夫だ。このくらいの怪我、外で味わってる。」

幻想郷に来た時のあれである。米兵の銃弾を受けて死にかけた。

「でも・・・血が・・・」

改めて左肩を見ると、予想以上に血が流れていた。普通だったら、出血多量か？

「大丈夫だ。それより、フランはどうなった？」

後ろを振り返ると、フランが倒れていた。さっきのやつで気絶したらしい。

「気絶しとるわ。で、目立った外傷無しや。」

よかった。それで、これからどうしよう。

「決まっとるやろ！紅魔か「怪我の治療が先でしょ！」・・・忘れとった。」

一通り怪我の治療が終わった。フランのほつも、放置するわけには行かず治療した。まあ、触っているだけで怪我が治るのだからそれほど便利な事は無いが・・・杵も腰が抜けたのが治って、歩けるようになっていた。

「さて、怪我の治療も終わっただし紅魔館へ・・・ん？」

歩き出そうとしたら、服を誰かに引つ張られてる。見ると、さっきまで戦っていた少女が服を持っている。

「・・・お姉様を・・・」

お姉様？誰の事だ？

「レミリアお姉様を・・・助け・・・て・・・」

そう言った後、また気を失った。心配になったが、規則正しい寝息を聞くと、その心配も消えた。

レミリアお姉様・・・か。姿を見てはいないが、彼女もフランと同じ状況になっている事は想像できる。姉が吸血鬼なら妹も吸血鬼だ。同じ吸血鬼なら、あのように暴走する筈だ。

「・・・こいつは急いだほうが良いかもな・・・」

嫌な予感がした。フランを背中に担いで、紅魔館に走った。全員がそれに続くが、誰も追いついてこない。唯一来たのは銃に戻った三十八だけだ。

「・・・相棒、美鈴はんは・・・」

「大丈夫だ！そう信じろ！」

確信は無いが、生きている筈だ・・・

紅魔館が見える場所に来た・・・筈だが、そこから見えるのは瓦礫

の山だった。唯一、残っているのは時計塔だった。

「な……紅魔館が……」

「……美鈴はん!？」

三十八が人間になって走って行った。

「おい!待て!」

三十八を追いかける。向かったのは、もちろん紅魔館があった場所だ。

紅魔館のあった所に着いた。そこには門だけが立っており、そこには……

「!?!」

血だらけの美鈴が壁によっかかって座っていた。

「……美鈴……はん!?!しっかりしや!」

三十八が美鈴に駆け寄る。が、反応は無い。俺も近づいて脈を取ってみる。

「……」

「相棒、どうなんや?」

一応脈はある。が、かなり弱い。意識不明の重体だ。

「・・・相棒、美鈴はんの治療、頼めるか？」

「ああ、わか・・・」

答えようとした時にはもう三十八の姿は無かった。それと同時に紅魔館の敷地内で爆発音がした。

「・・・あの馬鹿・・・」

背中に背負っていたフランを降ろし、三十八を援護しに行こうとしたら、意識不明の筈の美鈴が袖を引っ張った。

「・・・み・・・そや・・・さん・・・は？」

「・・・今、交戦中だ。多分、レミリアとだろう。」

「レミ・・・リア・お嬢・・・様・・・と？」

「そうだ。治療を頼んでおいて、勝手に戦闘し始めた。今治療してやるから、少し待ってろ。」

美鈴の怪我の一つを触ろうとしたら、手を？まれた。

「私の・・・事・・・は、い・・・いの・・・で、三十八・・・さんの援護に・・・行つて・・・」

「・・・それは出来ん。医者として、放置できない。」

「そんな・・・」

「だがな、今の俺は軍人だ。応急処置をしたらすぐに行く。」

「本当・・・ね」

応急処置を終わらせた。応急処置といっても、触っているだけだが・・・これで、俺がどんな能力かばれてしまったが・・・その時、原形を保っていた門が崩れた。

「く・・・このヤロ」

砂埃の中から三十八の声が聞こえた。

「三十八！美鈴とフランを連れて神社に戻れ！」

「・・・相棒、そいっだけは出来んわ。」

いつもよりも低い声で言った。こんな声は初めて聞いた。

「・・・分かった。だが、援護はさせて貰う。」

光符「菊花紋撃」を装填して構えた。

紅魔館崩壊ス（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

一時撤退

銃を構えると、上空から笑い声がした。上空に顔を向けたが、そこには何も無かった。その代わりに左側に黒い影が現れた。

「くくく・・・」

急いでそちらを見ようとしたが、一瞬目の前が暗くなり、気が付いたときには視界が横向きになっていた。そこで、吹き飛ばされた事に気が付いた。

さつき居た所から数百メートル離れた地面に叩きつけられた。起きようと左手を動かそうとしたが、左手が動かない。見てみると、手と肘の間から出血していた。腕の骨も折れてるらしく、酷い痛みがした。

「このくらいの怪我・・・」

怪我を触った。外傷は治ったが、骨は治らないらしく、痛みがしたままだった。

「・・・くそ・・・」

その時、後ろから声がした。いつもの聞きなれた声だ。

「泉希！」

タイミングが悪すぎる・・・
右手だけで銃を構えた。

「霊夢！すぐに逃げる！」

そう言った後、目の前に黒い影が現れた。それと同時に引き金を引いた。

片手で撃ったせいか、強い衝撃が右肩にした。視界が暗くなり、後ろに吹き飛ぶ感覚がした。

「！？泉希？大・・・」

そこまで聞こえたが、その直後に気を失ってしまった。

「
希！泉希！」

名前を呼ばれて目を開けた。すると、見飽きた天井と今にも泣きそうな霊夢の顔が見えた。

「ここは・・・！？」

起き上がろうとしたら、霊夢に抱きつかれた。

「よか・・・った。本当に・・・」

声が泣き声になっていた。

「れ、霊夢。どうしたんだ？」

「どう・・・して・・・って・・・」

そう言った後、本格的に泣き始めてしまった。

「なんや相棒、なかなか熱いやないかい。」

その声がした方向を見たら、布団に寝ている包帯巻きの三十八と、その隣に美鈴が寝ていた。その奥には複数の人が寝ているのが見えた。

「三十八、生きてたのか？」

「どアホ！わいが死ぬわけないやろ！」

そう言えば、本体（三八式銃）が壊れてない限り生きてるんだっとな・・・

「と、言ってもこっちはこっちで重症やけどな。」

「？どういう事だ？」

「ダメージが多すぎて立てへんのんや。」

だめーじ？どういう意味だ？

「簡単に言えば損害や。どっちにしろ、動けんのは確かや。」

人で言えば半身不随みたいなものか？

「いや、時間が経てば治るわ。それより・・・」

「それより・・・どうした？」

「まだ、レミリアは暴走中や。紅魔館跡から動かないのが不幸中の幸いやがな。」

まだ暴走中か・・・人里に被害は無いのいいとして、これからどうするかな・・・紅魔館に居るとしても、そのうち人里に下りるだろう。

「問題はそこや。そこで、助っ人がおるわ。」

「は？助っ人？」

「そう。入ってき。」

三十八がそう言ったら、障子の一つが開いた。

「泉希さん。怪我の方、大・・・」

半霊の妖夢が入ってきた。が、こちらを向いた時、表情が硬直した・・・表情どころか、体自体硬直していた。半霊も地面にカランという音を立てて落ちた。

「あ、あ、」

「あら・・・タイミングが悪かったか？」

三十八が笑いながら言った。何か悪い事でもあったのか？

「し、失礼しました……」

妖夢が元気が無い声で言った。そして、障子をピシヤリと閉めた。

「……妖夢が助っ人か？」

「まあ、そういう事や。今は気にせんといてや。」

気にするなといわれてもだな……

「谷さん！せわーないか（大丈夫か）！？」

今度は、柳が入ってきた。が、入ってきて俺を見た後、呆れたという顔になった。

「なんじゃ、その様子を見るとせわーなさそう（大丈夫そう）じゃないのん？」

少し恥ずかしい。穴があつたら入りたい。

「そんな（そんな）事より、霧を消してくれたのは谷さん達じゃったな。礼を言おう。」

霧が消えた？

「ああ、言ってなかったわ。フランを元に直したおかげで、妖霧が消えたんや。」

ああ、道理で……そう言えば、俺が気絶した後はどうなっていたのだろうか？

「それはわいが説明するわ。」

「・・・なるほど。あの後、紅魔館の住民を助け出してここまで帰ってきたのか・・・」

「そうや。人数が人数やから、苦労したんで。」

すまんと言いかけた所で、外から声がした。

「おい泉希。起きてる？」

「チルノちゃん、駄目だよ勝手に入っちゃ。帰ろつよ。」

「大丈夫だよ大ちゃん！その時はそのときだよ！」

外から声が聞こえた。あの声は・・・

「泉希く入るよ」

チルノと・・・いつもチルノと一緒に居る女の子が入ってきた。

「・・・」

「あ・・・」

部屋に入った瞬間、2人がこちらを向いて顔を真っ赤にした。そして・・・

「うー・・・」

そう唸りながら後ろに倒れてしまった。

「は？」

何かなんだか分からない。

一時撤退（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

束の間の休息

倒れた二人はさておき、この状況をどうするべきか・・・
霊夢が抱きついたまま寝てしまったらしく、寝息を立てている。

「・・・」

「何や相棒、こっち見てもどうにもならへんで。」

霊夢を起こしてはいけないと、言葉を出さずに救援を求めた。が、この状況が面白いのか、三十八が笑いながら言った。この野郎・・・

「・・・」

「分かった分かった。そんな顔で見んといてくれ。けど、本当にどうにもならへんで？動けんし。」

わ、忘れてた・・・と、言う事は・・・

「今日はそのままだ。」

「・・・」

これは・・・苦笑いするしかないか・・・

「・・・ん？」

いつの間にか寝入ってしまったていたらしく、気付いたら既に夕方になっていた。霊夢の方はまだ寝息を立てて寝ていた。

「・・・いい加減、起こさないとな・・・」

夕飯が無くなる。

その時、台所の方から声がした。

「これ、本当に食べられるのか？なんか心配だぜ・・・」

「わしが作ったカレーをそがぁな（そんな）目で見るな！」

どうやら、柳と魔理沙がカレーでも作ってるらしい。魔理沙の言っている所からして、幻想郷にはカレーが無いのか？

「そがぁな事ゆう（言う）なら、二人の様子を見てきてくれ。そろそろ起きるじやろうから。」

「分かったぜ。」

そういう声が聞こえた後、近づいてくる足音がした。

・・・ここは寝ておくのが得策か？

「おーい霊夢、入るぞー。」

障子が開く音がした。目を閉じているから見えないが、足音で大体の位置が分かる。

「・・・あちゃー、入ちゃあいけなかったのか？こんな所、文に見つ

けられたら一大事だぞ。」

呆れたような声がした。確かにそうだ。

「ま、何があつたかは知らないけど、文はのびてるから大丈夫か。」

・・・三十八の攻撃がどれだけ効いてるんだ・・・

「で、さつきから狸寝入りしてる泉希は何やってるんだ？」

ば、ばれてたか・・・

「・・・何故分かった？」

「そりゃあ・・・なあ？」

なあと言われてもだな・・・

「それより、霊夢早く起きろ」

そう言つて、霊夢の頬をぺちつと叩いた。

「うん・・・」

「・・・あら？」

霊夢は起きない。

「しょうがない・・・あれを使うか・・・」

魔理沙がそう言うと、霊夢の耳元で何かを囁いた。

「・・・はい!？」

霊夢が飛び起きた。何を言われたんだ？

「・・・へ？」

霊夢がこちらを見る。そして、徐々に顔を真っ赤に染めていった。

「つきゃあああああああああ」

顔を真っ赤にしたまま、走って出て行ってしまった。

「・・・何だったんだ？」

「・・・さあ・・・私も、あんな霊夢見たこと無いぜ・・・」

確かにあまり見たことは無い・・・

数分後、出て行った霊夢が顔を真っ赤にしたまま戻ってきた。

「・・・」

「・・・」

何故か気まずい。

「「あのさあ・・・」」

「あ．．．さきに．．．」

「．．．なんか、お見合いみたいだぜ．．．」

確かにそうだ．．．

「．．．」

「．．．」

再び沈黙。もう、どうしたら良いか分からない。

「あ、私は柳の所に行って来るぜ。そろそろ、かれーって食べ物が出来てるくらいだからな。」

そう言うのと、魔理沙は急ぎ足で出て行ってしまった。この気まずい空気では逃げたくなるか．．．

「あ、あのさ．．．さっきはごめん．．．」

霊夢が謝ってきた。何を謝ってるのかは分からなかったが．．．

「別に気にしてない。」

「そ。そう？なら良いけど．．．」

また沈黙。誰かこの状況を打破できる人は居ないのか？

「谷さん、カレーが出来たけえ、こっちに来てくれ。」

台所のほうで柳の声が聞こえた。

「わ、分かった。今行く。」

返事をして、立ち上がろうと左手を地面につけた。すると、左手から激痛がした。

「う!」

完璧に忘れていた・・・左手が骨折していた事を・・・

「!?! 泉希、大丈夫!?!」

「大丈夫だ。ちょっと痛んだだけだ。」

「・・・本当に?」

心配そうに見てきた。実際は重症だが・・・

「大丈夫。たいした怪我じゃない。さ、早く飯を食べに行こう。」

そう嘘をついてしまった。先ほど、散々心配させてしまったのだから、もう心配させたくなかった。

「・・・そう。なら良いけど・・・」

どこか納得していない顔で言った。

「そんな事より、早く飯を食べるぞ。」

今度は右手を地面につけて立ち上がった。

台所に移動すると、カレーのいいにおいが漂っていた。

「あ。なんや、起きたんか相棒。面白くない・・・」

そう言ったのは、三十八だった。畳の上に、ちゃんとあぐらをかい
て座っている。動けないのではなかったのだろうか？

「まあ、元が妖怪みたいなもんやし、半日したら治ったわ。」

・・・治ったって・・・

「ま、美鈴はんやパチュリーはん達も怪我が治つとるし、ぱ・・・
もとい咲夜はんもピンピンしとるから、不思議じゃないわ。」

・・・神様の息子が腕が折れたままなのか？

「人と体のつくりが違うんやろ。」

「・・・私は一応人間なんですけど・・・」

三十八の背中の後ろを見た。すると、咲夜が立っていた。

「・・・」

「?どうしました?」

前に紅魔館に行った時に問答無用で短剣を投げられたから、少しトラウマになっている・・・

「ああ、いや、何でもない・・・」

「？」

不思議そうに見られてもだな・・・

「そんな事より、飯や飯！」

「・・・飯って、ここの食材を使ったのかしら？」

振り返ると、さっきまで赤い顔をしていた霊夢が一変して、凄く怖い笑顔になっていた。

「そ、そうみたいやけど・・・なあ柳はん。」

「そ、そうじゃが・・・何か悪い事でもあったんか？」

「・・・後で、私の部屋に来てくれる？」

「「は、はい・・・」」

ああ、金あれの事か・・・

「まあまあ、まず、飯を食ってからにしよう。腹が減っては戦はできぬだ。」

「・・・そうね。泉希が言うなら・・・」

三十八と柳が助かったという顔になった。

束の間の休息（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

お知らせ。
(前書き)

お知らせ。

東方Project 帝国陸軍上等兵の幻想入り を読んでいただき、ありがとうございます。

学校で、10月1日から試験期間に入っている為、10月13日まで休載とさせて頂きます。

報告が遅れたのは、昨日学校で文化祭が忙しかったため、パソコンを開く暇が無かったせいです。

それと、試験も近いので小説の投稿スピードが遅れるかもしれませんが。そろそろ真剣に勉強しないと、活動報告で報告したD高校には入れませんから。

ご迷惑をかけますが、今後ともよろしく願います。

これからの事（前書き）

さて、連載再開です。ペースとしては、多分遅れますので、一週間に一回の割合にします。ご迷惑をおかけします。

本編をどうぞ。

これからの事

夕食には、博霊神社の居候と、紅魔館の住人に妖夢、魔理沙、何故か倒れたチルノと・・・確か大ちゃんと言われていた少女が加わった。ここに居る人たちはチルノと大ちゃん以外、カレーを全く知らないらしく、首をかしげたりしている。

「・・・三十八さん、これ、本当に食べられるんですか？」

「当たり前や。日本海軍のカレーと言えば、絶品揃いや。」

三十八とまだ傷が残っている美鈴が話していた。

「そうなんですか？食べた事無いからわかんないけど・・・」

「一口食べたなら、絶対気に入るわ。なあ、相棒。」

「・・・まあ、そうだな。」

まだ、ほんの数回しか食べてない記憶しか無いが・・・

「相棒もそう言つとんや。食べてみ？」

「・・・分かった。」

美鈴がカレーを一口食べた。いつの間にか他の人が美鈴に視線を移している。

「・・・」

「どうや？うまいやろ。」

「・・・確かにおいしい。」

その声を聴いた後、他の人たちもカレーを食べ始めた。

全員がカレーを食べ終えた後、これからの事が話題になった。

「お嬢様・・・泉希さん、早くお嬢様を・・・」

咲夜が心配そうに言う。彼女は確か、紅魔館に住み始める前の記憶は無い。外・・・俺達の生まれた世界の住人だったらしいが、多分自分の故郷も忘れているだろう。今はレミリアに忠誠を誓う召使い（メイド）だ。当然、ご主人のレミリアのことは心配だろう。

「気持ちは分かるが・・・最低、明日だな。」

「そう・・・出来るだけ早くしてもらいたいわ。」

そう言つて黙り込んでしまった。他の紅魔館の住人も、どこことなく暗い。特に、フランの落ち込み方は尋常じゃなかった。

「・・・」

今にも死んでしまいそうな顔だ。昔、この顔を見たことがある。

「・・・フラン、ちょっと昔話をしても良いか？」

「・・・いいよ。」

か細い声が聞こえた。

「もう4年前の話だ。俺は、中国という国で戦っていた。その時に、部隊内で仲の良い兄弟を見かけたんだ。この兄弟、次の戦闘で兄の方が倒れて、後方の病院に運ばれる事になったんだ。この時、弟の方が元気が無くなったんだ。兄が病院で運ばれた三日後、弟が自殺した。兄を死なせかけたのは自分だ、っていう遺言を残してな。その後、兄の方が戻って来たんだが、死にそうな顔だった。・・・今のフランみたいな顔だ。」

「・・・」

「レミリアがああなったのは自分のせいじゃない。原因不明だからどうとも言えないが・・・それだけは言える。」

「・・・」

フランは黙ったままだった。が、先ほどよりも幾らかは生気が戻っていた。

「さて、相棒。これからどうするんや？」

フランに話をした後、三十八が話しかけてきた。

「そうだな・・・明日の早朝、ここを出よう。太陽さえ出ていれば

こちらの方が有利だ。」

「・・・左手が折れてるのにか？」

三十八が声を小さくして言った。こいつに隠し事は出来ないか・・・

「・・・俺の性格を知ってるだろう？」

困っている人は見逃せない。

「・・・分かってるわ。でもな・・・無茶はせえへんでや。死んでもうたら元も子もないわ。」

「・・・承知してる。」

その時、後ろから声が聞こえた。

「泉希さん、ちょっと良いですか？」

後ろに振り向くと、チルノに大ちゃんと呼ばれていた女の子が立っていた。

「ああ、良いぞ。えっと・・・」

「あ、私は大妖精と言います。名前は無いので、そのまま呼んでください。」

大妖精か。だからさつきは大ちゃんと・・・

「そんな事より、今日来たのは・・・」

「決闘の中止？」

決闘をするとチルノが言ってたな……すっかり忘れていたが、

「何故決闘を中止に？」

「異変の邪魔をしたらいけないって言ってましたけど、多分霊夢さんのせいですね。」

「霊夢が？」

「前の時の異変で霊夢さんに完敗しちゃったんです。トラウマなんでしょう。」

なるほど……その前に、俺を倒すより、霊夢を倒した方が強いという物ではないのだろうか？

「そう言えば、本人は？」

「先に帰っちゃいました。自由奔放というか、身勝手というか……」

「……困ったやつだな。」

「もう慣れましたから。それじゃあ、私も失礼します。」

大妖精は、一礼すると玄関に歩いて行った。

しばらくして縁側に出てみると、かなり損傷していた。菊花紋撃と武蔵の46サンチ砲の爆風のせいだろうか？

比較的損傷の少ない所に座り、庭を見回した。所々にススキが生えていた。鈴虫の声も聞こえる。空には綺麗な夕日が輝いていた。

「・・・秋、か。」

この幻想郷にも長い時間いるな・・・親父、元気にしてるのか？・・・まあ、神様だから元気にしてるか。

「あれ？泉希、なにしてるの？」

振り返ると、霊夢が立っていた。

「少し、親父の事をな。」

「？」

「そういえば、俺の三八式は？」

少し気になっていた。あれが無いと戦えない。

「泉希の部屋に置いてあるわ。隣、座って良い？」

「ああ。」

霊夢が隣に座った。

「泉希、日本に帰りたい？」

突然聞いてきた。日本に帰りたく無いわけではない。が・・・

「未練は無い事は無いが・・・」

「・・・帰れたらどうするの？」

「日本に帰っても住むところは無い。親父には家を追い出されてるし、陸軍も解体されている。幻想郷で暮らすさ。」

親父に追い出されたのは、陸軍に入ったせいだ。家には戻れない。

「そ、そう・・・」

少し安心したような声を出した。何かあったのだろうか？

「それと、もし誰かが泉希の事を・・・好きになったらどうするの？」

「は？そうだな・・・」

なぜそんな質問をしてきたかは分からないが・・・

「相手もよるが・・・受けても良いだらな。」

「!？」

さっきよりも驚いた顔になった。どうしたのだろうか？

「・・・そうね、普通そうよね・・・変な事聞いてごめん。」

そう言うと、神社の中に逃げていくように入っていった。数分間何故そんな事を聞かれたのか考えた挙句、答えが出なかった。取り合えず、明日にでも聞いておけば良いか。

これから（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

紅魔館への進撃

「おい相棒、起きや。」

朝、珍しく三十八に起こされた。朝といってもまだ日は昇っていない。

「・・・」

「何をボケツとしとるんや？はよう紅魔館に行くで！」

紅魔館に行くのは分かってるが・・・

「・・・幾らなんでも早くないか」

懐中時計を取り出して見てみると、日の出までに2時間ほどある。

「時間なんて関係ないんや！準備できたら庭に出てきてな。」

そう言うと、部屋から出て行った。

着替えを済まし、三八式銃を手にとって庭に出た。既に、三十八と霊夢が待っていた。霊夢は、こちらの姿を確認すると、目を逸らしてしまった。

「・・・？」

「どうした相棒？何か・・・ああ。」

三十八が納得したような声を出した。そして、近づいてきて小声で言った。

「相棒、そろそろやで。」

「は？何が・・・」

「とぼけんといてや。もう気付いてる筈やで。」

「・・・気付いてる？」

「そうや。考えてみ。」

気付いてるといってもだな・・・

「あ、ちょっと待ってください！」

神社の方から声がした。振り向くと、妖夢が立っていた。

「なんや、妖夢はん。どうしたんや？」

「私も連れて行ってください！必ず役に立ちます！」

「・・・どうする相棒？」

三十八がこちらに聞いてきた。戦力が増えるのにこした事は無いが・
・

「どうする霊・・・夢？」

霊夢のほうを向くと、明らかに敵意を持った目で妖夢を見ていた。

「霊夢？どうした？」

「へ？あ、いや、なに？」

名前を呼ばれていつものとうりになった。

「妖夢を連れて行くか行かないか、どうする？」

「・・・そうね・・・連れて行っても良いんじゃない？」

「だ、そうだ。」

「あ、ありがとうございます！」

うれしそうに一礼した。今から危険なところに行くのだが・・・

「・・・人数もそろった事やし、そろそろ行くか。」

紅魔館へ移動中は何も無かった。むしろ、異変の前と同じ様に鳥が鳴き、妖精達の声が聞こえた。

もう異変になれた、そんなことを言って来た妖精もいた。

が、紅魔館に近づくほどにそれも消えていき、湖のほとりに来たときには声という声が消えた。まるで、時が止まったようだった。

「・・・静かやな・・・」

銃に戻っていた三十八が話しかけてきた。

「まったく・・・動物が一匹も居ない。」

辺りを見回しても、動物どころか蟻一匹も居ない。空は、先ほどと一転、曇り空だ。

紅魔館が見えてきた。やはり、時計台だけは残っている。針は、6時を指しているが・・・

「太陽が出てないな・・・」

これで、優位性は無くなる。非常にまずい。

「どうするんや？かなり苦戦しそうやけど・・・」

「霊夢はどうするんだ？」

「早めに異変を解決する。それが一番よ。」

酷く簡単に返された。まあ、ベテラン熟練者が言うのだから間違い無いだろう。

「よし。それじゃあ、行こうや。」

人型に戻った三十八が歩き出した。それに続いて俺達も歩き出す。

が、すぐに立ち止まった。

「相棒、なんか聞こえんか？」

「ん？」

耳を澄ましてみると、幻想郷に来てから聞かなくなった音が聞こえた。

「・・・航空機か？」

音の方向を見てみると、変わった形の航空機が飛んでいた。

「・・・二式水上戦闘機やな。」

「二式水上戦闘機？」

「海軍さんの戦闘機、零式艦上戦闘機の改造戦闘機や。あの高度やと・・・着水する気やな。」

確かに、こちらに高度を下げながら近づいてくる。が、その前に一つの影が現れた。

「!！」

「まずい、二式水戦を撃墜する気や!」

その影から何か・・・フランが使っていた槍のような物が伸びていった。姉妹が同じ様なものを使うなら・・・

「三十八！二式水戦を援護する！「菊花紋撃」装填開始！」

三八式に「菊花紋撃」を装填した。三十八も続いて「菊花紋撃」を発動する。それと同時に銃が上に動き出した。

「・・・撃^てええ！」

左手に負担をかけないように、左手は添えたままにしてほとんど右手で持っているように構えて引き金を引いた。それと同時に銃が振り下ろされた。

発射された「菊花紋撃」二本は影に直撃した。が、銃は振り下ろされて、二式水戦の左の主翼に直撃した。そして、操縦が効かなくなった機体は火を吹きながら落ちていった。運良く、操縦者のほうは落下傘で降りていていた。

「操縦者を保護する！他の全員は後から来い！」

「ちよつと、泉希！」

霊夢が呼び止めたが、今は構ってられない。遠くから見ているかなんとも言えないが、どこかを負傷している。それに、降りている途中にレミリアに襲われるかもしれない。

数秒後、湖のほとりに出た。湖の中心で燃え上がっている機体が見える。その近くに丁度今、落下傘で操縦者が着水した。

「・・・」

すぐに操縦者を助けてやりたいところだが、待ち伏せられている可能性もある。下手に動くと狙われるな・・・

「・・・うつ！」

首筋に痛みを感じた。後ろを向くと、何かに噛み付かれている。

「まさか・・・だな・・・」

三八式の銃底（銃の後ろ）を思いっきり噛み付いている物にぶつけ、後ろに振り返って銃を構えた。案の定、目標の敵だった。顔面に傷がある。さっきの攻撃で付いた物だろう。

「グルウウウ！」

獣のような唸り声を出した。慧音の時と同じ状況だ。

「・・・」

「ウウウウ！」

こうしている間に、操縦者の体力は減っているはずだ。

「・・・！！！」

レミリアが空を飛び、二式水戦の方に向かった。操縦者を狙ったみたいだ。

「くー！」

レミリアに狙いをつけて通常弾幕を発射したが、片手でまともに狙いがつく筈も無く、弾幕はあらゆる方向に飛んでいった。

「まずい！」

「私に任せてください！」

後ろから声が聞こえた。振り返ると、高速の物体が通り過ぎていった。通った後には、黒い羽が舞っていた。

「・・・文か？」

神社で伸びていた筈だが・・・ともかく、彼女がレミリアをひきつけてくれるらしい。

「気をつける！相手は何をするか分からない！」

そう言った直後、二式水戦の上空で弾幕の打ち合いが始まった。

紅魔館への進撃（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

海軍軍人

文がレミリアを引き付けている間に、操縦者の救助に向かった。流石に水の上を走ることは出来ず、泳いで行くしかなかった。そのせいで、数分ほどかった。

落下傘の近くに飛行服を着たまま浮いている若い男・・・少年がいた。

「海軍さん！生きてるか！？」

「・・・」

返事が無い。生きてるかどうかわからず、脈を取ってみると一応生きている。岸に上げないと・・・

「きゃあああ！」

上空で悲鳴が上がった。上を向いたと同時に右方向約10mの位置に水柱が上がった。

「文！」

まずい・・・三八式は濡らしたらいけないと岸に置いてきてしまった。あるのは・・・

「スペルカードのみか・・・」

「炎の舞 雷の演奏」はあるが、刀のような物がないと発動できない。「菊花紋撃」も不可能だ。花火は論外だ。

「・・・絶体絶命って奴か・・・」

ふと、操縦者に目が行った。よく見てみると、腰に拳銃らしき物がある。急いで、取り出してみると、久し振りに見た拳銃が出てきた。

「南部式自動拳銃か・・・」

南部式大型乙号だろう、銃床が金属になっている。どちらにしろ、水にぬれている為、使用は不可能だろう。「菊花紋撃」を使おうと思ったが、果たして使えるだろうか？

「・・・光符「菊花紋撃」」

弾倉を抜いて、そこに菊花紋激を装填した。すると、三八式と同じ様に、菊花紋が現れた。それを、敵の居るはずの上空に向けた。

「・・・」

居た。ほぼ上空に、一つの影がある。向こうもこちらに気付いたのであろう、高速で近づいてきた。

狙いをつけて引き金を引いた。三八式の時と同じ様に光線が出た。が、発射した後の南部拳銃は銃身が完璧にひん曲がっていた。これでもう弾は撃てない。

光線の方はレミリアのほうに直進し、直撃した。が、何事も無かったように空に浮いている。

「く・・・やつは不死身か？」

「菊花紋撃」を受けた人はほとんど一撃で倒れていたが、レミリアは何発受けた！？同じ吸血鬼のフランでも一撃で倒れたぞ？

「泉希さん、大丈夫ですか？」

後ろを振り向くと、泳いで近づいてくる文がいた。

「ん？文、そっちこそ大丈夫か？」

「なんの、清く正しい射命丸、このぐらいじゃあ倒れたりしません。」

三十八に鞘で殴られて倒れた本人とは思えないな・・・

「そんな事より、私が援護しますのでその人の治療を早めに終わらせてください。色々と聞きたいことがありますので。」

「分かってる。護衛頼む。」

操縦者の襟を掴んで、岸まで泳いだ。その後ろを、文が泳いでついて来る。

レミリアが動かないまま、岸に到着した。動かない事ありがたいが、逆に不気味だ。

「相棒！どこや？」

操縦者を岸に上げて寝かした直後、森の中から三十八の声が聞こえ

た。

「三十八！こつちだ！」

声がした方向に大声で呼んだ。すると、数秒後に三十八と霊夢、妖夢が姿を現した。

「あれ？文じゃない。神社で倒れてたんじゃないの？」

「そんな事ありませんよ、霊夢さん。新聞記者が、異変解決の瞬間を逃す筈はありません！」

「・・・うー！」

文と霊夢の会話の途中で、操縦者が呻き声を上げた。

「海軍さん、気がついたんか？」

「・・・ここは・・・何処でありますか？」

「幻想郷・・・と言っても分からないか・・・」

「幻想郷・・・で、ありますか？」

困惑するのは分かるが・・・

「・・・あ、自分の名前はおおさわかずき大沢一貴少年兵であります。神風特別攻撃しんぷうとくべつこうげきのために出撃していたのであります。」

神風特別攻撃・・・飛行機もろとも敵艦に突っ込み、撃沈させる外

道の戦法か・・・

「俺は、陸軍の谷泉希上等兵だ。・・・陸軍といっても、退役したも同然だが・・・取り合えず、色々と説明しておく。」

「・・・ここは、日本では無いのでありますか？」

「そういう事になる。」

「妖怪や幽霊が実在するのでありますか？」

「・・・さつきも同じ事を言っただけだが・・・」

幻想郷の事を一気に教えてもこうなるか・・・

「谷上等兵さん、日本へは・・・帰れるでありますか？」

「・・・正直、俺も聞いたことが無い。帰れるかどうか不明だ。」

「そうでありますか・・・」

「それとだ、今は逃げたほうが良いぞ。お前の乗機を撃墜したやつと戦闘中だ。」

「!!!相棒!動き出したわ!」

レミリアを警戒していた三十八が叫んだ。時機が悪すぎる・・・

「大沢！出来るだけ遠くへ退避しろ！文、大沢の避難を助けてやってくれ。」

「りよ、了解であります！」

返事を聞いて、振り向いた。全員が準備を済ましていた。

「さて、最終決戦といこうや。」

三十八がそう言った直後、上空の敵がこちらに向かってきた。

海軍軍人（後書き）

キャラ紹介

おおさわ

かずき

大沢 一貴 16歳

大日本帝国海軍所属 少年兵。 二式水戦パイロット。

特攻任務で出撃中、幻想入り。 二式水戦は幻想入り直後、撃墜。

生真面目で、年上には常に敬語。 同年代でも敬語。 年下にも敬語。

能力 飛行機を飛ばせる程度の能力

拳銃が扱える程度の能力

スペカ なし

ご意見、ご感想をお願いします。

決戦

最初の攻撃は、こちらからだった。

「霊符「夢想妙珠」！」

霊夢がスペルカードを取り出して発動した。十数個の陰陽玉が散開して行った。そして、レミリアの周囲に移動した後、爆発した。三式弾のようなものか？

そう思っていると、煙の中からレミリアが出てきた。

「三十八、妖夢！注意しろ！」

炎雷剣「炎の舞 雷の演奏」を装填した。それと同時に、目の前に敵が現れた。手には、やはり槍の様な物を持っている。それを、こちらに突き出してきた。それを三八式で払いつつ、後退する。やはり、実質片手で戦うのはきつい。

「相棒！伏せや！」

後ろからの声に反応して、しゃがんだ。すると、丁度真上を2本の刀が通って相手の槍にあたり、火花を散らした。妖夢と三十八の刀だ。

「一人で戦おうとすな！味方がおるんや、ちよつとでも負担をなくせや！」

左手が折れとんやから、無茶するな。そう言ってるらしい。頼りになる相棒だ。

「すまん。妖夢も頼むぞ。」

「任せてください!」

元気の良い声を聞いて、数十メートル後方にいる霊夢の所まで退いた。

「泉希、どうかしたの?」

いつでも攻撃できるように、数枚のスペルカードを持ったままの霊夢が聞いてきた。

「ちょっと、な。」

少し、左腕が痛み始めた。悪化したのだろう。

「・・・あの2人、大丈夫かしら・・・」

今、戦っている2人の事だろう。

「大丈夫だ。大丈夫だと思っていなかったら、俺が退くわけ無いだろう?」

戦っている2人のほうを見ると、息のあった攻撃をしている。三八が攻撃し、それが外れると妖夢が攻撃する。交互にやっていき、隙があると2人で同時に攻撃する。今日が始めての共闘であるにもかかわらず、凄い息の合い様だ。

「そう言えば、文と大沢はどうした?」

「神社に戻ったわ。」

少し安心した。妖精達も、文がついている限りは攻撃してこないだろう。

数分間攻撃が続いているが、こちら側に優勢だ。二人が近接攻撃を行っている為、遠距離攻撃しか出来ない俺達は蚊帳の外だ。あの二人だけで異変解決が出来る。そう思った。

「ぐっ!!」

その時、三十八の腹に槍が突き刺さった。その後、森の方向へ吹き飛ばされた。

「!?!三十八さん!?!」

妖夢が驚いて隙を作ってしまった。その直後、妖夢も湖方向に吹き飛ばされ、40mほど先に水柱を立てた。

「妖夢!三十八!」

まさか、あの二人が簡単に倒されるとは・・・三八式を敵に向かって構えた。今、自分が何を思っているのか自分でも分からない。ただ、一言で言うとな怒り、だ。

「泉希!?!」

自分も分からない内に、敵に突撃していた。唯、相棒と友人を傷つけられた事に怒りを感じていた。

「っらああああ！」

一気に飛び上がり、左手が折れている事さえ忘れて、力をいれたまま銃を振り下ろした。敵が槍で防いだ瞬間、左手が動かなくなった。完璧に折れた。全治4ヶ月というところか？

左手が折れた事により、冷静な考えが出来るようになった。少し遅かったが・・・

攻撃を弾かれ、数十mほど飛ばされた。地面に落ちて止まった後、敵を見てみると肩で呼吸をしている。さっきの攻撃が効いたか・・・こつちもだいぶ損傷したが、後「菊花紋撃」を一発入れれば終わりぐらいだろう。

立ち上がるうと、右手を地面につけた。が、すぐに倒れる。幻想郷に来る前の時のような状態になっていた。「菊花紋撃」の連発をしたせいだろう。

「軍人がこのぐらいで倒れてどうする・・・!!」

三八式を杖にして、何とか立ち上がる。そして、遊底があった所に「菊花紋撃」を装填し、

「光符・・・「菊花紋撃」・・・」

発動させた。その後、ものすごい疲労感に見舞われ、倒れそうになった。が、ここで倒れてはいけない。

「・・・死んでも・・・」

彼女だけは・・・

「・・・傷つけてたまるかああ！」

最後の気力を振り絞り、銃を構える。片手だけだったが、何とか照準を合わせられた。また倒れそうになったが、今度は、暖かな温もりを感じた。後ろを振り返ると、見慣れた赤い服が見えた。

「・・・すまない、霊夢。」

もう一度、三八式を構え直す。

「・・・光符「菊花紋撃」イー！」

力いっぱい引き金を引いた。その感覚がした後、目の前が真っ暗になった。

後の世に、第二次紅魔郷事件と言われる異変は終わった。
これ以後、紅い満月になっても同様の異変は起きなかった。

決戦（後書き）

次回から、秋編を執筆します。基本的、戦闘は無いとさせていただきます。

ご意見、ご感想をお願いします。

三日後

「・・・う・・・」

気が付くと、部屋の中にいた。少し損傷している所から見ると、おそらく自分の部屋だろう。外は、既に暗い。左手を見ると、添え木をされて包帯巻きにされている。誰がやってくれたのだろうか？

「・・・」

俺がここに居るという事は、誰かが運んできたという事だ。誰が運んできたんだ？
その時、障子の開く音がした。その方向を見ると、初めて見る人が入ってきた。

「・・・貴方は？」

「あら？起きてたの？私の名前は八意やごころ 永琳えいりん。貴方と同じ医者よ。」

医者とは思えない服装だが・・・

「左手の怪我、無理しすぎて複雑骨折よ。1、2ヶ月はそのままね。その後は数ヶ月リハビリ。・・・あ、リハビリって言うのは、簡単に言えば元に戻す為の過程、て所ね。・・・医者だから分かるわね？」

・・・確かに彼女は医者だ。

「承知している。．．．そう言えば、霊夢達は？」

「隣の部屋で寝てるわ。起こしても良いけど．．．」

「そこまでしなくても良い。それよりだ．．．」

落ち着いてきたから気付いた事だが．．．

「．．．飯は無いか？」

「へ？」

台所で軽く飯を食い終わり、永琳にいくつか話を聞いた。

「取り合えず、あの日から何日経った？」

「三日よ。あの日、霊夢ちゃんが泣きそうな顔で永遠亭に来てね、助けて欲しい人がいるって言って貰方と霊界の妖夢、銃か何かの付喪神、紅魔館のレミリア・スカーレットを連れてきたのよ。正直、霊夢ちゃんのおんな姿を見るのは初めてだったわ。」

そつか．．．霊夢には悪い事をした。

「そう言えば、紅魔館の人たちは何処に？少なくとも、この神社には居なかったが．．．」

先ほど、飯を食う前に各部屋を見て回った。三十八を除くいつもの全員（霊夢、柳、翠香）と妖夢は確認した。が、紅魔館の人は、一人も居なかった。

「それなら、永遠亭の方にいるわ。レミリアの方が重症でね。吸血鬼があんな状態にされたのは初めて見たわ。いったい誰がやったのやら……」

その本人が目の前にいるんだが……

「三十八はどうした？」

「みそや？ ああ、あの銃の付喪神ね。それなら、縁側にいるけど？ たしか、紅魔館の門番さんと一緒だったはず。呼ぶ？」

あの二人が一緒か……なら、邪魔は出来んな。

「止めておこう。」

「……まあ、確かにあそこには行きにくいけどね。」

雰囲気で分かるか。

「あ、谷上等兵！ 起きたのでありますか？」

振り返ると、二式水戦の元操縦士の少年兵と、新聞記者がいた。

「お、大沢。それと文。無事だったのか？」

「この清く正しい射命丸、その位じゃ倒れません。」

三日前にもそんな事言っていた気がするが・・・

「谷上等兵、もう大丈夫なのでありますか？」

「大丈夫だが・・・その谷上等兵は止めてくれないか？」

陸軍は実質退職したも同然だから、階級はもう関係ない。

「いえ、これだけは義務とと思っていますので。」

「そうか？なら、無理はしないで良いが・・・」

やはり、この1ヶ月で聞かなくなっただから違和感はある。

「あ、泉希さん、写真を一枚撮っても良いですか？」

は？写真？

「今度の新聞の記事です。その名も、「外の世界の人間、異変を解決する！」とうのですか？」

「・・・悪いって言う訳じゃないが・・・まだ解決とは言えないぞ。何故暴走をしたか。これが分かるまでは異変は解決していない。」

「そ、そうでした。すみません・・・じゃあ、「外の世界の軍人が異変解決に挑む！」というのでは？」

「外の世界の“元”軍人だ。それと、俺だけじゃこの異変は解決できません。」

「じゃあ……」

その会話が数時間繰り返された。その頃には、空が薄っすら明るくなり始めていた。

「……という訳で、題は「外の世界の元軍人、谷泉希と博麗の巫女が異変の解決に挑む！！」で良いですか。」

「それなら良い。それと、記事の内容には、レミリアやフラン、慧音は被害者だと書いておいてくれ。里の人が差別をしたらいけない。」

「分かってますって。さて、大沢さん。帰って新聞を……あれ？」

何かと思い、大沢のほうを向くと完璧に寝入っていた。永琳の方もいつの間にか寝ている。

「あやや……ホント、しょうがない人ですね。」

「……無理はしてないと思うぞ。今の話が何時間かかったと思っているんだ？」

「半刻（一時間）……ですか？」

「約2刻（4時間）だ。それに、今は明け6つ時（午前5時〜午前7時）だ。丁度日の出も見られるだろうさ。」

「あややや・・・そうですか。今朝は文々。新聞は休刊ですね・・・さて、大沢さん起きて下さい。帰りますよ。」

「・・・」

大沢は眠ったままだ。その前に、大沢は文の家で寝泊りしてるのか？

「あややや・・・」

「文、俺に任せろ。」

大沢の前まで移動して、息を大量に吸った。

「大沢少年兵！！起床時間はとくに過ぎているぞ！！早く起きないか！！」

「へ！？も、申し訳ありません、教官！！」

わざと教官みたいな言い方にしたのが効いたのか、大沢は飛び起きた。

「あ、あれ？谷上等兵、今は何時でありますか？」

「午前6時だ。軍人ならとくに起きている時間帯だが・・・」

「も、申し訳ありません！以後、気を付けるであります！」

「さて、文。起こしたぞ。」

「ありがとうございます。さあ、大沢さん。早く新聞作りますよ。」

明日の朝刊までに2万部作らないと・・・」

「え！？文さん！？俺も動員されないといけないのでありますか！？」

「もちろんです。あ、椋にも手伝ってもらわないと・・・」

この三日間で何があったのか知らないが、新聞を作るのを大変嫌がっている。そんなにもきついのだろうか？

三日後（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

いつもの日常に

文が、大沢を強制的に連れて行った後、外に出てみた。空が少しずつ明るくなってきた。

「・・・丁度日の出か・・・」

そう呟いた後、正面の山脈の間に太陽が出てきた。ほぼ毎日拝んでいるが、今日の太陽は違うように見えた。さて、今日からいつもの日常に戻るか。

「ん？」

今日は珍しく、朝っぱらから参拝客が来た。どこかで見覚えがあるが・・・確か、夏祭りの前日、屋台作りの手伝いをお願いしてきた人だ。（三話「夏祭り準備」を参照。）

「あ、旦那。久し振りですねえ。・・・左手はどうしたんで？」

「ちょっとありましてね・・・それより、どうしたんですか？」

「ああ、そうでした。まずはこれを・・・」

そう言って袋から取り出したのは、一枚の紙だった。

「収穫祭？」

「そうです。毎年、人の里で秋姉妹の主催です。屋台も出ますので、旦那もどうかと。」

「それは楽しみです。・・・秋姉妹というのは？」

姉妹というところから、女の人だと分かるが・・・

「へい、姉の秋あき 静葉様しずはは紅葉の八百万神、妹の秋あき 穰子様みのりこは豊穰の八百万神です。両名とも、里の収穫高を良くしてくださっています。今年は大豊作でして、去年の2倍程の収穫があると予想されます。」

・・・それは、多分俺のせいだろう。スクナビコナ・・・親父は、医療の神であると同時に、豊穰をもたらす農耕の神。他にもいろいろな顔を持つ。その息子に、その能力が無いはず無い。

「どうかしました？」

「いや・・・その収穫祭はいつごろにあるんですか？」

「今日から約2週間後です。」

2週間後か・・・

「それでは、私はこれにて失礼します。収穫量が多すぎて、私ら農家にはきつい物ですよ。」

「手伝いたいですけど、手がこれなので・・・すみません。」

「いいんですよ。旦那も気をつけて・・・」

その人は、一礼してそのまま階段を下りていった。

「・・・収穫祭、か。」

今度、霊夢と行ってみよう。

そう思ったとき、神社内が騒がしくなった。

「ん？」

不思議に思い、神社の中に戻った。

「おいおい、どうし「泉希!」なん!？」

神社の玄関に入った瞬間、何かに飛びつかれて後ろに倒れた。

「痛ててて・・・」

「もう!何処に行ったかと心配したじゃない!」

何かと思い見てみると、泣きそうな顔をした霊夢が抱きついていった。

「うぐっ!」

左手が凄く痛い。まあ、銃弾を受けたよりはましたが・・・

「ちょっと霊夢・・・左手が・・・」

「へ?あ!」

急いで離れる霊夢。申し訳なさと、少し残念そうな顔をしていた。
その後、俺も立ち上がった。

「あ、そう言えばだ。再来週に人里で収穫祭があるらしいぞ。どうだ？一緒に行かないか？」

「へ？えつと・・・」

霊夢はしばらく考えた後、顔を真っ赤にさせた。

「？霊夢、どうした？」

「あ、なんでもない・・・」

その後、ぶつぶつと何か言っていたが、聞き取れなかった。

「それで、行くのか？」

「あ・・・行く。」

少し恥ずかしそうに言った。何を恥ずかしがっているのかは分からんが・・・

「よし、決まりだ。」

霊夢の頭をポンと叩いて、神社の中に入った。

「お、谷さん 起きたんか？」

神社に入って廊下を歩いていると、柳に出会った。

「ああ。怪我以外はなんとも無い。」

「さすが軍人じゃのお。」

自分も軍人なのでは？と心の中で言った。

「ああ、そうじゃった。飯が出来てるから後で台所に来ての。」

「分かった。」

2時間前に茶碗2杯ほど食っていたが、足りなかった。すぐに台所に向かった。

「・・・」

台所に来たものの、そこにある食べ物に硬直した。そこにあったのは、カレー。

・・・三日前も食べたのだが・・・カレーはうまい。確かにうまいが・・・これも連続すると・・・

「なんや、相棒。カレーを飽きたらいけんで。」

「そうですよ。塩野さんに失礼ですよ。」

「こんなに美味しいのに、飽きるなんて贅沢だぞ。」

後ろから3人の批判の声が聞こえた。

「・・・。」

後ろを振り返ると、三十八、美鈴、萃香がカレーを食べていた。

「・・・？」

三十八と美鈴は分かるが、何故萃香が？・・・まあ、いいか。

「分かった分かった。・・・」

カレーでここまで批判を浴びるとは思わなかった・・・
カレーを盛り付けながらそう思った。

いつもの日常に（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

河童と船幽霊の武蔵見学（上）

朝食を食べ終わった後、玄関の方から声がした。

「泉希！柳！ちよつと来て！」

・・・？

取り合えず行ってみる事にした。

玄関に来てみると、三八式を返しに来た女の子が霊夢に何かを頼んでいる。

「おいおい、どうした？」

「あ、泉希。にとりがね・・・。」

にとり？この子が三八式を改造したにとりだったのか？

「あ！泉希さん！どうか、あの船の中を見せてください！」

そう言つて、武蔵を指差した。

「・・・そう言われてもだな・・・。」

武蔵に入った時点で即、迷いそうだ。こういうのは、武蔵の乗員に言わないと・・・

「なんじゃ、霊夢さん。なにかあつたんか？」

丁度その時、柳が来た。

「柳、この子の言う事って出来る？」

「なんじゃ？言ってみんさい。」

「あの船の内部の見学がしたいんです！あの船は・・・」

話をまとめると、こんな感じになる。

- 1、戦艦武蔵の艦内を見学したい。
- 2、戦艦武蔵の機械を研究したい。
- 3、良ければ、機械を持って帰りたい。

「なんじゃ、そがあな（そんな）事か。良いじゃろう。案内する。」

「ありがとうございます！」

・・・まあ、幻想郷の技術者ならよだれが出るほどの技術が使っているが・・・果たして軍艦が役立つだろうか？
少し気になった。

「柳、俺も案内してくれないか？」

「あ、泉希が行くなら私も、」

「そうそう、皆で行った方が楽しいよ。」

霊夢と・・・？誰だ？

霊夢の隣に水兵服（セーラー服）を着た少女がいた。当然のように居たから気付かなかった。

「えっと・・・」

「あ、私は村紗 水蜜と言います。聖輦船の船長をしています。種族は船幽霊です。」

「・・・元大日本帝国陸軍上等兵 谷泉希だ。今は・・・神社に住んでる。」

「元大日本帝国海軍上等水兵 塩野柳じゃ。戦艦武蔵で主計科・・・コックをしょおったんじゃ。」

「へえ。じゃ、自己紹介が終わった所で早速見学に行きましょう。」

そう言つて村紗は武蔵の方へ行つてしまった。

「ほいじゃあ、行こつかの。」

「はい。」

にとりが元気よく返事をした。まるで、遠足に行く子供のようだった。

「俺達も行くか。」

「うん。」

武蔵の右舷側の階段を上がって行くと、先に着いていた村紗とに
りが騒いでいた。

「おお！凄く大きいねえ！遠くから見たときとは大違いだよ！」

「やった！これで外の世界の技術が手に入る！」

神様ありがとおおー！！と二人が絶叫しているのを遠くの方で呆れ
てみている柳がいた。

「・・・谷さん、霊夢さん、あの二人はどうしたんかな・・・」

「・・・まあ、喜んでるから良いんじゃないか？」

「やっぱり、あの二人はよく分からないわ・・・」

「・・・村紗さん、にとりさん、こっちに来てくれんか。」

はい、と返事をして二人が来た。

「まずじゃ。武蔵艦内で注意する事をゆう（言う）ぞ。まず自分の
後ろを着いてくる事。もしも離れてしまおたら一生武蔵からあ出れ
んぞ。」

「はい！」

「次に、勝手に機材に触らんこと。電源が入って、無駄な電気を使
わんで欲しいんじゃ。」

にとりが手を上げた。

「あ、それなら大丈夫ですよ。私が電源を用意してますから。」

「そりゃあ何だ？」

「太陽光発電という装置を艦尾の広いところに複数置いてます。晴れの日なら全部の電気をつけても足りません！」

いつの間に置いていたのだろうか？・・・装置のほうは何かは分からないが、電力の心配は無いという事は分かった。

「・・・まあ、えかろう。ほいじゃあ、見学を始めようか。」

「「はい！」」

・・・お前らは、子供か？

心の中で少し呆れつつ、艦内へ入っていった。

通路を通り、一つの部屋に入った。

「さて、ここが烹炊室じゃ。自分の仕事場じゃった場所だ。」

見てみると、複数の釜が置いてある。近づいて中を見てみると一人が入れるほどの大きさだ。

「そりゃあ6斗炊き飯釜じゃ。それ一つで600人分の米が炊ける。」

他にも副食用の6斗炊き菜釜、2斗炊き粥釜、揚げ物や焼き物の調理をする万能烹炊器があるんじゃない。」

「万能烹炊器？」

にとりが柳に聞いた。

「そうじゃ。簡単にゆやあ、これ1基でえっと（多数）の料理が調理可能になる。」

「へえ。1基持つて帰っていいですか？」

「丁度2基あるからええぞ。」

やったあ！と言う声が聞こえた。

「にとりさん、何か気になる物があつたら言ってくれ。説明しちゃうから。」

「わかりました！」

早速あつたのか、すぐににとりが声を上げた。それに反応して柳がそちらの方に向かう。

その話を背中では聞きながら、少し広くなっている部屋に入った。そこには、二隻の小型艇があつた。海軍の友人から聞いた、内火艇うちびたいというやつだろう。

内火艇に近づいてみた。内火艇の船体には傷一つ無く、綺麗だった。多分、機関も故障はしていないだろう。

・・・レミリアは大丈夫だったのだろうか？あの数の菊花紋撃を当てたのだ。相当な怪我をしているだろう。それに、紅魔館の方はほ

ば全壊している。何処で暮らすのだろうか？

死ぬ思いで戦った相手だが、相手も自らやっていた訳ではない。考えてみると、無限に罪悪感が出てくる。

「・・・」

「あれ？泉希、どうしたの？」

振り返ってみると、霊夢がいた。

「霊夢か・・・少し相談したい事があるんだが・・・」

「なに？」

思い切って相談してみた。

河童と船幽霊の武威見学（上）（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

河童と船幽霊の武蔵見学（中）

「・・・なるほど、今回の異変に罪悪感を感じてるのね。」

「・・・」

「確かに、相手が自分の意思でやっていないから、罪悪感を感じないほうがいいと思うわ。」

全くそのとうりだ。今回の異変は、思い出したくも無い過去・・・中国での殺戮を思い出してしまう。本人の力の差はあるものの、罪の無い人物を傷つけたことは同じだ。

その時、天井の赤い電球が点いた。その赤が、血に見えてしまった為、思わず目をそむけた。

「・・・？」

その行動を不思議に思ったのか、霊夢が首をかしげた。

「・・・すまん。昔のことを思い出していた。」

「あ・・・ごめんなさい。思い出したくない過去の事を思い出させてしまって・・・」

「別に謝らなくても良いさ。それより、霊夢は怪我してないのか？」

「へ？」

「文から聞いていたんだが、異変が終わった後、大なり小なり怪我

をすると聞いたんだ。少し心配になってな。」

その時、烹炊室の方から声がした。

「谷さん、霊夢さん、他の場所に移るけえ集合してしてつかあさい。」

「ああ、分かった。霊夢、行こうか？」

「……」

「霊夢？」

何とか聞き取れるくらいの声の大きさを何か言っている。

「……どれだけ自分の心配をしてないのよ……自分が神様だからって、絶対死なないって言う事は無いのに……もう少し自分の心配をしたっていいのになあ……」

本人は聞こえてないと思っているらしく、次から次へとどんどん言葉が出てくる。大体は俺のことを心配するような言葉だった。

「……心配してくれてありがた、霊夢。」

「……」

そう呟いた後、霊夢が聞こえていると気付き、顔を真っ赤にさせた。

「さて、行くぞ。」

「う、うん。」

少し動揺した声で答えた。

柳たちと合流したとき、にとりの背中の鞆が背負っている本人の身長の2倍ほどに膨れ上がっていた。柳が少し驚いた顔をしている。

「まさか、あの量の機械がこの中に入るたあ・・・」

・・・あの鞆の中はどうなっているのだろうか？
それを聞いたらいけないと思い、聞かなかった。

艦内を移動し、着いた場所は巨大な機械が中心に居座っている部屋だ。

「ここが武蔵の心臓部、機関室じゃ。この、口号艦本式専燃缶くつかんほんしきポイラーは、1基で約1万馬力が出せるんじゃ。」

「・・・一万ばりき？」

村紗とにとりが声をあわせて聞いた。霊夢も分かっているらしく、首をかしげている。幻想郷にはそういう単位は無いのだろうか？

「そう、馬一万頭の力がこれ1基で出せるんじゃ。これが合計12基あるんじゃ。」

「馬一万頭・・・と言う事は、下級妖怪ぐらいの力が出る・・・そ

れが後12基・・・かなりの力ですね！」

・・・今、にとりが言った事を聞き間違えたか？一万馬力は、下級妖怪と同じ力だと？

もしそうだとしたら、神様^{おれ}はどのくらいの力が出るのだろうか？

いろいろと疑問が出ていたが、今は柳が説明中であるため、控えておいた。

「さて、こがあなあ（こいつ）にも弱点があるんじゃないや。何じゃゆうて（何だと）思う？」

答えは、燃料が無いと動かない事だと分かった。が、俺が答えたんじゃない面白くないだろう。にとりが手を上げた。

「動けない事？」

「そりゃあ、これ単体じゃったらの話じゃ。こがあなあのおかげで、武蔵も動いとつたし。」

「それじゃあ、強度の問題ですか？全力を出したら壊れるとか・・・」

「それはずれじゃ。こがあなあは、全力を出してもびくともせん。」

「うーん・・・整備の問題じゃ無さそうだし・・・大きさもこの船に入ってるし・・・」

にとりが悩んでいる。幻想郷にはこういう機械は無いのだろう。そ

れか、本人がいじった事が無いだけか。

「あ、わかった!」

村紗が叫んだ。

「飯の問題ですね!」

「・・・は?」

飯?

「へ? 違うんですか? あの中に妖怪が居て、動かしてるんじゃないか?」

幻想郷ならでわの答えが出てきた。

「・・・村紗、日本に妖怪は居ないぞ・・・」

「ええ!? 居ないんですか!?!」

まあ、幻想郷では当たり前前の事だから判らなくても無理は無いだろう。だが、惜しい。

機械を動物と考えるなら、燃料は食べ物だ。

「うーん・・・ちいと惜しいかの。」

柳も同じ意見らしい。

「ほいじゃあ、答えをゆうぞ。こがあなあの弱点。そりゃあ、燃料

じゃ。」

「ねんりょう？」

予想はしていたが、やはり燃料は無いらしい。焚き火に使う木は燃料とは言っていないらしい。

「ここがなあは、燃料・・・油を燃やして水を蒸気に変える。その蒸気の圧力でタービンを回すんじや。詳しい事は知らんが、上甲板の機関科事務所に詳しい事が書いてある本がある筈じゃけん、後でそっちに行ってみよう。ほいじゃあ、次の場所へ行こう。」

「はい！」

河童と船幽霊の武威見学（中）（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

河童と船幽霊の武蔵見学（下）

武蔵艦内のいろいろな所を回ってきたが、いよいよ最後になった。部屋に入ると、翼を折りたたまれた状態の水上機が2機あった。

「ここが搭載機格納庫じゃ。」

「搭載機ってなんですか？」

「正確にやあ（言えば）飛行機うちゅうんじゃが。目の前にある物じゃ。名前は零式水上観測機。こがあなあさえありやあ、羽根が無くても空を飛べる。」

村紗が不思議そうな顔をしている。確かに、幻想郷の常識ではこんな鉄の塊が飛ぶはずが無い。にとりが質問する。

「へえ。どのくらいの速度で飛ぶんですか？」

「時速370キロで、最大750キロ飛べる。」

「ええ！？文さんと同じ速度じゃないですか！？」

・・・流石は幻想郷一の速さを誇るカラス天狗だな・・・でも、妖怪でもそこまでが限界だろうな。

「こがあな速度で驚いちゃあいけん。独逸の空軍にやあ、時速900キロが出る飛行機が開発されたと聞いたことがあるんじゃ。」

「ええ！？そんな速度が出るものが外にあるんですか！？」

それには俺も驚いた。まあ、無理は無いだろう。俺は、大体1940年位から日本本土に帰っていない。本土とは、ほぼ音信不通だった。そういう情報は全然聞いた事が無い。

それに比べ、海軍である柳は連合艦隊旗艦の武蔵に乗っていた。山本五十六長官殿も乗っていたはずだ。多少、そういう情報も漏れるだろう。

「構造まで知らんが、ジェットエンジンっちゅうもんが使われとるらしいんじゃ。流石、技術大国独逸じゃ。・・・おっと、すまん。こがぁの説明じゃが・・・」

柳が飛行機についての説明を始めた。主計科であるのに、よく覚えてるな・・・

そう思ったが、流石にエンジン内部や操縦方法までは知らないらしく、曖昧に返している。

カチッ

胸ポケットから音がした。時計の音だ。今何時だろう？
時計を取り出してみると、短い針が5の数字を指していた。

「・・・おい、柳。すでに5時になってるぞ。そろそろ終了したほうが良いんじゃないか？」

「もうそがぁな時間か？・・・しょうがない、にとりさん、村紗さん、今日の見学はこれで終わりじゃ。また明日来てね。」

「「えー」」

息がぴったりだ・・・この二人、姉妹なんじゃないか？

「お詫びゆうちゃあ（言ったら）何じゃが、今日は飯を食うてつてくれ。武蔵の料理を味わって帰ってくれ。」

「「良いんですか！？ありがとうございます！！」」

2人同時に頭を下げた。・・・やはり断定しよう。この二人、姉妹だ。

隣にいた霊夢も何故か料理だけには興味を持ったらしい。

神社に戻ると、柳は早速台所に行った。霊夢とにとりと村紗がそれについて行く。

さて、俺はどうするかな・・・怪我をしたから運動も出来ない・・・暇だ。

その時、縁側から声がした。気になって、縁側の方に行ってみた。すると、永琳と妖夢がお茶を飲んでいた。

「お、泉希君。どう、お茶飲む？」

永琳からは泉希君と呼ばれた。・・・その呼び方は止めて欲しいが・・・

「・・・頂こう。」

永琳が、何処から出したのか分からないが、俺がいつも使っている湯飲みを取り出した。

何故分かった？・・・霊夢が教えたのだろうか？

永琳がお茶を入れている間に妖夢が話しかけてきた。妖夢は足が折れているらしく、右足に添え木をして包帯を巻いていた。

「泉希さん、左手大丈夫ですか？」

「大丈夫だが・・・妖夢も大丈夫か？右足が折れたら歩けないだろう。」

「大丈夫です。ほら。」

妖夢がそう言うと、半霊に乗っかって移動した。なるほど、そういう使い方もあるのか。

だが、半霊の方はかなり頑張っている様に見える。大丈夫なのだろうか？

「泉希君、お茶が入ったよ。」

「ああ、ありがとう。」

永琳からお茶を受け取った。飲んでみると、結構うまい。

「泉希君、ちよつと良いかな？」

「なんだ？」

永琳が声を小さくした。

「君の体を少し調べさせてもらっただけど・・・君は人間では無いでしょ？」

・・・また、もう一人俺の正体を知る人が増えた。

「・・・確証は？」

「まず、君から漏れている神力ね。普通の人なら皆無なのに、君の体からは大量の神力が漏れてるわ。」

「神力？」

「神様の力・・・とでも言っておこうかしら？」

それが俺の体から漏れている、と？

「単刀直入に聞くけど、君は神の一人なんでしょう？」

「・・・まあ、そうだ。正確には神様の息子だが・・・」

「誰の？」

「俺の親父はスクナビコナだ。今も外の世界で元気に暮らしているはずだ。」

永琳の顔が驚いた顔になった。

「スクナビコナって・・・医療の神様の？」

「そうだが・・・息子ということは、君も血を引いているということ事よね！」え、ええ。」

急に嬉々とした顔になった永琳に少し驚いた。さっきまでは物静かな女性という印象があつたが・・・

「ちよつと、薬草を教えてください。」

「良いが・・・どうしたんだ？」

「良いじゃない！早く教えて！」

急に子供のような目になった。

何種類か、親父に教えて貰つた薬草を教えてみると、その全てが薬草として使われて無い種類らしい。

多分、調合方法かなにかで薬となるんだろう、と言つたら、今度は調合方法を教えてと言つてきた。

2種類ほど教えた。やはり、知らない調合方法だったらしい。

「よし！早速帰つて薬の調合をして・・・」

「夕飯を・・・」

食つて行け、と言おうとしたが、すでに永琳の姿は無かつた。
・・・早いな・・・

「あ、泉希君。」

「うお!?!」

後ろに振り返った後、目の前に永琳が現れた。

「いつか、永遠亭に来てくれない？実際に調査してくれないと分からないところがあるの。」

「あ、ああ、分かった。」

「それじゃ！」

目の前にいた永琳が姿を消した。

・・・日本にいたときに小説を読んでいたら瞬間移動なんて物が書いてあったが、幻想郷ではそういうものもあるのか？

「・・・あんな永琳さん、初めて見ました・・・」

妖夢が驚いた顔で言った。

河童と船幽霊の武威見学（下）（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

温泉と新聞記者二人

永淋が帰った後、縁側でお茶を飲んでいた。妖夢は相変わらず剣術の修行中だ。右足は折れたままだが、半霊を使って右足の代わりをさせている。・・・半霊の使い方が間違っていると思うのは何故だろうか？

「おい、泉希ー。どこだ？」

後ろから声がした。

「あ、いたいた。」

後ろを振り向くと、萃香がこっちに来ていた。手には、瓢箪を持っている。

「どうかしたのか？」

「暇なんだ。霊夢は柳の料理の作り方を習ってるしさ、三十八と美鈴は近づきにくいし、勇儀は旧都にいるし、文や大沢は山で新聞作ってるし・・・」

「・・・で、唯一いる俺のところに来たと？」

「ま、そついう事。」

萃香が瓢箪の中身を飲みながら隣に座った。相変わらず、凄い飲みっぷりだ。

「そう言えばさあ、温泉はどうするんだ？妖夢と泉希が作るんじゃないかったっけ？」

「・・・そう言えばそうだな・・・」

すっかり忘れていた。妖夢も、一回手を止めてこちらを向いた。

「しばらくは温泉は出来ないと思いますよ。どちらも重症ですし、完治してもそれから数ヶ月はかかると思います。」

「えー。折角、温泉入りながら雪とか、紅葉見て一杯やろうと思ったのに。」

・・・そうだ。

「そんなに言うんなら、今作ってやろうか？」

「え！？出来るのか！？」

「泉希さん、無理は駄目ですよ。それに、片手が折れた状態でどうやってやるんですか？」

「まあ、見てれば分かる。」

湯飲みを置いて立ち上がり、間欠泉を塞いでいる岩のところに歩いて行った。そして、地面に右手をつけた。二つの箱状の特大風呂、それを取り囲む塀と脱衣所を想像して、能力を発動した。

「な、何ですか！？」

妖夢の驚いている声が聞こえた。初めて能力を発動させた時と、その次に椀を敵と思い、使った時には妖夢はいなかった。萃香の声は聞こえないが、見たことがあったのだろうか？

そうこうしているうちに、建物が出来た。建築に関してはほとんど知識は無かったが、よほどの事が無い限り崩れないだろう。

「よし、萃香できたぞ。」

「おお！さすが泉希！」

「・・・どうなってるんですか？」

嬉々とした表情で喜ぶ萃香と、啞然とした妖夢。それをひとまず置いておいて、一回中に入ってみた。

脱衣所には、まだ何も設置されていない。また、電気が無いから中は薄暗い。また、扉や窓も無い。

温泉の方は、大きな（3 m x 5 m、深0・6 m）のくぼみが出来ていた。ここは想像とは違う。右手だけだったからか？

結果がどうであれ、一応風呂は出来ている。お湯は、採取用の穴から筒を通して入れるようにしてある。丁度今、筒からお湯が出てきている。風呂にお湯が入ったら、筒には蓋をする。

上を向くと、赤く染まった空と、先のほうが少し赤く染まった木の葉が見えた。多分、桜だろう。

風呂に入りながら花見、か。それはそれでも良いな。
そんなことを思った。

さて、明日里に下りて色々と買わないとな・・・脱衣所の棚に、籠

に・・・

「へえ、一日で建物を建ててしまうなんて、流石ですね。」

「・・・。」

毎度毎度、気付かないうちに後ろに来るのは止めて欲しいものだ。

「あんな、文。後ろにいるならいるって言・・・え？」

振り向くとカメラを連写している文と、それを見て苦笑いしている大沢と、少し小さい文がいた。

・・・文が、二人？

「あ、泉希さん、すみません。紹介するのを忘れてました。これは、私の妹の射命丸 宙そらです。」

文が写真を撮るのを止めて、小さい文の紹介をした。

「射命丸 宙です。いつも姉がお世話になってます。」

「いや、こちらこそ世話になってる。」

「私、新聞出してますから、良かったら読んでください。」

そう言っ、一冊の本を取り出した。新聞というよりも、雑誌に近い。

「・・・銀河新聞？」

「はい。趣味で天体観測をやってますから、その新聞に調べた事を書いてます。」

なるほど・・・

数頁めくっていくと、黒点がどうか、プロミネンス紅炎がどうか、月の満ち欠けとか。軽く、図鑑になっている。

最後の頁は、ページ今月は何があったのか、という題名で記事が書かれている。その中に、俺の名前があったのには少し笑った。

「なかなか面白いな。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

その発言に、文は複雑な表情になった。

「別に文の新聞が面白くないという訳じゃないんだが・・・」

「へ？い、いや、別にそんな事じゃあ・・・ライバルが増えると、新聞屋としては嫌なんです。身内としてはうれしいんです・・・少し複雑でしてね。」

「へえ、姉さんもそんな事思っんだ。」

「こら！新聞記者なる者、常に敬語は心がけておく事！何回も言っただしょ！」

「そういう姉さんこそ、敬語じゃなくなってるじゃない？」

「あ、あややや・・・」

・・・文が口論で負けた・・・俺や霊夢に対して、交渉では絶対負けない筈だが、妹に対しては弱いらしい。

「ともかく！今日は取材です！それ「泉希、ご飯できたよ！」あややや・・・」

文も、妹の前では形無しか・・・

温泉と新聞記者二人（後書き）

キャラ紹介

射命丸 宙そら

文の妹。性格は、文に比べておとなしい。パパラッチではない。自前の新聞を持っており、文や姫海棠はたてとはライバル。身長は、文より10センチほど低い。

ご意見、ご感想をお願いします。

宴会

文たちと博麗温泉（仮）から出て、神社の台所に移動した。が、誰もいなかった。いつもはここで飯を食っているんだが・・・

「あ、ごめん！外に出てきて！」

霊夢の声が、外からした。・・・外、という事は・・・

案の定、考えた通りだった。外に出て、声がした方に行くと、桜の大木の根元に誰かは分らないが、人だかりが出来ている。・・・宴会だな・・・

「やった！宴会だ宴会だ！」

萃香が走って酒宴の中に入っていった。萃香はいつも酒宴をしているが。

「あややや・・・どうしましょう。勤務中ですから、お酒は飲めないんですが・・・」

「良いじゃありませんか、文さん。谷上等兵、どうです。一杯やりませんか？」

「おいおい、お前は16じゃなかったのか？」

流石に、中等学校（中学校）から出たばかりで酒を飲むのは年齢的

にも身体的にも危ないだろう。特に、幻想郷産の焼酎は、度数が高い。

「大丈夫であります。妖怪の山って言う所で、文さんが自分の事を天狗に紹介したら、ほぼ毎日宴会になりましたので、もう慣れました。」

妖怪の山の天狗は、人をあまりよく思っていないのではなかったのだろうか？少なくとも、霊夢からはそう聞いているが・・・実は、人間と仲良くなりたいのだろうか？

「さ、行きましょう。皆さんも待っているみたいですし。」

宴会をしているほうを向くと、既に文が酒宴の輪の中に入っている。宙も、酒宴の輪に入っている。そう言えば、妖夢が居ないが・・・やはり、あの時飲んだ酒（武蔵の移動・参照）が原因か？

「何をしとるんや相棒！もう一人の主役が酒宴の中に入らんでどうするんや！」

三十八が大声で怒鳴ってきた。俺が主役？退院祝いか何かか？よく見ると、紅魔館の住人達もいる。という事は・・・

「あら、私を倒したって言う泉希じゃない。どうしたの？」

後ろから声がした。聞き覚えがある。というより、唸り声のほうで聞いた事がある。多少、トラウマになっているが。

「・・・レミリアか？」

後ろを振り向くと、怪我なんてしていなかったの様に立っていた。隣には、フランも居る。

「初めて会った人に呼び捨てされたのは初めてだけど、今日の所は無礼講でいいわ。」

「・・・。」

実際の身長は俺の七割前後なのに、このとき、何故か俺と同程度の身長に見えた。堂々としているせいかな？

「それにしても、人間なのによく私を倒せたわね。博麗の巫女と白黒の魔法使い以外に倒されたのは初めてよ。」

白黒の魔法使い？ああ、魔理沙の事か・・・

「さ、早く行きましょう。私の退院祝いでもあるし、貴方が目覚めた祝いでもあるのよ。」

「あ、ああ。分かった。」

酒宴の席には、紅魔館の住人（レミリア、フラン、咲夜、パチュリィ、美鈴、小悪魔）と博霊神社の住人（霊夢、俺、三十八、萃香、柳）と新聞記者（文、宙、大沢）と客（にとり、村紗）がいた。柳が作ったであろう、料理も大量にあった。

萃香と文は、昔からの飲み仲間らしく、飲み比べをしていた。当然、酒が足りなくなったので、急遽作ってやって飲ませると、同時に倒

れてしまった。・・・どれだけ俺の作った酒の度数は強いんだ？
それを見て、宙と大沢がそれを見て呆れていた。

一方、レミリアとフランの方は、酒は飲まないらしく、何かを飲んで
いた。ティーカップの中身は何なのかはわからなかったが、紅茶
だと仮定しておいた。

咲夜は、レミリアとフランに付きっ切りで、酒なんて飲んでいる暇
は無さそうだった。

三十八と美鈴は2人でこそと話していた。時々、美鈴が顔を赤
くしたり、三十八がケラケラと笑ったりしていた。相変わらず仲が
良い。

「……………」

遠くから見ていたが、何故か近寄りにくかった。ここに居る人は一
部を除いて、俺が神様である事を知らない。殺人をしたことも……

一升瓶を一本とコップを持って、気付かれない様に離れた。

宴会中の庭の反対側に来た。縁側があるところだ。縁側に座り、空
を見上げる。欠けた月が白く輝いていた。

「……………」

月というのは、何か物悲しい。暗い夜空に一つだけあるせいだろう。
陸軍にいた時はそういう事は感じなかった。人を大量に殺して、悲
しいという感情が麻痺していたのか……自分で押さえ込んでいた
のか。

今は、人殺しだった昔とは違う。心を支えてくれる人もいる。

酒を一杯飲みながらそう思った。すると、近づいてくる足音が聞こえた。

「何一人で飲んでの。」

「・・・霊夢か。」

霊夢が隣に座った。

「他のみんなが祝ってくれてるのに、一人寂しく飲まなくてもいいんじゃない？」

「あそこには近寄りにくくてな・・・」

「なぜ・・・あ」

気付いてくれたか・・・

「・・・過去のことは気にしなくても良いんじゃない？」

「・・・気にしているから、ここで飲んでるんだ。」

「ふーん・・・じゃあ、私も付き合って良い？」

「・・・良いぞ。」

2人、静かに飲むのも良い。

宴会（後書き）

ちよつと無理な方向転換だったかな、と思っています。
数日後とかにしとけばよかったな・・・

ご意見、ご感想をお願いします。

2人だけの酒宴（前書き）

泉希と霊夢の関係をかなり前進させました。
急すぎたかな、と思いますが・・・

2人だけの酒宴

隣に霊夢が座った。そして、持参したのである。コップに酒を注いだ。

「飲む？」

「頂こう。」

酒を注いでくれているのだが、少しふらふらしている。多少酔っているみたいだ。

「・・・大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫！さ、飲みましょ！」

何かを誤魔化すように、一気に酒を飲み干した。そして、顔をいつそう赤くした。

「・・・。」

その行動に、疑問を持った。何を誤魔化そうとしているのだろうか？コップに注がれた酒を少しずつ飲みながら思った。

「・・・。」

「・・・。」

しばらくの間、無言で飲み続けた。

「・・・そう言えば、一つ聞きたかったんだが・・・」

「ん？何？」

「日本・・・外の世界に帰る事は出来るのか？」

「!?!」

霊夢が驚いたらしく、目を見開いた。何を驚いているのだろうか？

「大沢の奴がな、日本に帰れるか聞いてきたんだが・・・実際はどうなんだ？」

先ほどの驚いた顔から一変、安心した顔になった。

「一応、帰る方法があるわ。結構疲れるからあまりしないんだけど・・・」

方法までは言ってくれないか・・・

「・・・あ。」

霊夢が空を見上げて声を上げた。

「どうした？」

「流れ星。」

空を見上げると、一筋の光が消えていくのが見えた。

「知ってる？流星が消える前にお問い合わせを三回言ったら、その願い事が叶うんだって。」

「そうなのか？」

幻想郷では当たり前なのだろうか。少なくとも、日本では知られていない筈だ。

「お。」

また一筋、過ぎていく。今日は、流星が多く落ちる日らしい。
・・・一回試してみるか。

「・・・幻想郷の人が誰も傷つく事無く、平和で元気に暮らし・・・」

あ、一回も言えずに消えてしまった。

「・・・フフ。長すぎるわよ。」

「そう言われてもだな・・・。」

「もつと簡単に言えば良いじゃない。例えば、幻想郷が平和でありますように、とかね。」

「なるほど・・・。」

短く・・・か。

「・・・霊夢が幸せになりますように、霊夢が幸せになりますように、霊夢が幸せになりますように。」

「・・・え？」

なぜかは分からないが、自然と口から出た。

「あ、えつと・・・」

「どうかしたのか？」

顔が真っ赤になっている。

「・・・あ、あのさ！その願い事・・・もう叶ってるよ。」

「は？それはどうい・・・」

どういう事だ？と言おうとしたが、口が塞がれた。霊夢の顔が目の前にある。

「！？」

今の状況が分かった。

霊夢の顔が離れていく。

「でも・・・まだ満足してないからね。」

・・・三十八が言っていた、気付いてやれとはこの事だったのか・・・

「それは、告白と解釈して良いのか？」

「え・・・そ、そういう事になる・・・のかな？」

親しい人が愛する女性ひとに変わったと分かった。ならば、答えは決まっている。

「大日本帝国陸軍上等兵 谷 泉希。この身が朽ちようとも、貴方を守って見せます。」

だから

「一生、そばに居てください。」

「・・・」

霊夢が下を見て黙り込んだ。肩が震えてる。

「・・・フフ。」

ん？

「あのさ、泉希。自分が神様だっけ忘れてる？」

少し、笑いながら言ってきた。忘れていないが・・・神・・・という事は。

「まさか・・・不老不死？」

「ご名答。私が死んでも、泉希はそのまま生きてられるの。」

そうなのか・・・

「でも、大丈夫。」

「・・・は？」

なれる？

「永琳先生に、蓬萊の薬を貰えるかどうか聞いたんだけど、あっさり売ってくれたの。絶対に売ってくれないと思ってたのにね。」

蓬萊の薬・・・確か、御伽草子「竹取物語」に出てくる不老不死の薬、だったか？

「蓬萊の薬・・・本当に実在したんだな・・・」

「あ、それと、蓬萊の薬が出てくる物語の主人公、この幻想郷に居るわ。」

・・・まったく、幻想郷は色々と驚かせてくれる。

この次の日、俺と霊夢は「不老不死」で「恋人」という関係になった。神様と巫女。妙な組み合わせである。

2人だけの酒宴（後書き）

蓬萊の薬を飲ませたのは、自分自身、バッドエンドは好きじゃないからです。霊夢が死んだのに、泉希は永遠に生きていくというのは悲しいと思ったからです。

ご意見、ご感想をお願いします。

人里（１）（前書き）

補足説明

前回、「蓬萊の薬」が出てきましたが、つきで生産されて、永琳や妹紅が飲んだ「不老不死の薬」ではなく、幻想郷で作られた劣性型の「不老の薬」です。

正確に言うと、「捨虫の魔法」状態になれる薬です。

骨皮さんのご指摘により、補足説明を入れました。

人里（１）

異変が終わり、一週間が経った。俺と霊夢は、「恋人」という関係にはなったが、特にいつものもの日常と変わらない生活を送っている。が、周りは変わっている。

第一に、もう一人居候が増えた。誰かというと、紅魔館門番 美鈴だ。レミリアが、気を利かせたのか知らないが、紅魔館を再建するまで一時的に「退職」扱いにしてあるらしい。

第二に、温泉が出来た事で里の人や妖怪等の種族との交流も増えた。わざわざ旧都という所から来た鬼達もいる。博麗神社は、神社でもあり妖怪と人間の交流の場にもなった。「博麗温泉に行く人間を襲わない」という約束が出来た。

一見、良い事ばかりのようだが、そういうわけでは無い。

それは、神社の損傷だった。

前の異変のとき、俺の菊花紋撃と武蔵の四十六糎^{センチ}主砲による艦砲射撃による爆風で損傷していた。それを放置していたせいで、さらに損傷が酷くなっていた。幸い、この一週間で雨は降らなかった。もし雨が降っていたら、いたる所で雨漏りしていたであろう。だが、このまま放置してはいけない。

今、神社から人里に向かう山道を霊夢と２人で歩いている。

「・・・」

「・・・」

お互い、話はしていないが、悪い空気ではない。むしろ、いい空気

だ。

頭上には、赤く色付いた紅葉がひらひらと舞っていた。この山道の両側には、数m間隔で紅葉が植えてある。紅葉狩りをするならこの道が最適かもしれない。

「・・・きれいなね。」

「・・・ああ。」

それ以後、里に着くまで紅葉狩りを楽しんだ。

里の第一印象だが、まるで江戸時代に時間旅行した様だった。タイムスリップ

幻想郷自体、明治初期に結界で外界と遮断されたのは知っているが、やはり聞くのと実際に見るのとは大きな差だ。

「さて、大工は何処にいるんだ？」

「確か・・・向こうね。」

暫く歩き、一軒の家の前に着いた。表札には、「伊吹」と書かれていた。

「すみません。」

霊夢が引き戸を叩く。中からは「いい」という声が聞こえた。

「・・・まさかと思うが、この家って・・・」

「萃香の実家よ。」

・・・という事は、大工って・・・

その時、引き戸がガラガラという音を鳴らして開いた。

「おお、霊夢さん。いつも娘が世話になってます。」

出てきたのは、30代から40代の男性だ。頭から生えた2本の角が無ければ、何処の家庭にでもいる父親だ。

「いえいえ、こちらこそ、いつもお世話になってます。萃将^{すいしょう}さん。」

伊吹 萃将さん、か。

「おや？そちらの人は？」

「谷 泉希と言います。」

「ああ、前の異変を霊夢さんと解決した。」

やはり、有名になっているらしい。

「娘から話は聞いてます。どうぞ中へ。」

萃香が事前に「博麗神社がぼろぼろになっているから、近々修理を頼みに良くと思うよ。」とでも言ってくれていたのであろう。

「ほう、その、武蔵という船の大砲はそれほどの威力なんですか。」

博霊神社の損傷について話をしていると、萃将さんが聞いてきた。

「正確には、爆風のせいですが・・・」

「ワシが修理した神社が人の作った物でねえ。」

鬼の常識では、人間が作ったもので鬼が建てた物は壊せない、というものがあるのだらう。

神社の修理の話が終わった頃、時計を見ると丁度昼になっていた。

「丁度いい、昼は食っていきます?」

「あー・・・どうする泉希?」

「それでは、お言葉に甘えて。」

「母さん!」

奥のほうから、はいという女性の声がした。

「はいはい、何ですかお父さん。」

30代前後の女性が出てきた。おでこから一本の角が伸びている。

「泉希さん、妻の霊香^{れいか}です。」

「はじめまして。伊吹 靈香と言います。いつも娘がお世話になってます。」

「谷 泉希と言います。」

「ああ、靈夢さんの彼氏さん。」

なん!?

その発言に俺も靈夢も驚いてしまった。まさか、文が・・・

「・・・へ?冗談でしたのに・・・まさか?」

・・・よかった。

「い、いえ!違います!別にそんな関係じゃあ・・・」

・・・顔を真っ赤にしたまま反論しても、説得力が無いぞ。靈夢。

「ふふ。靈夢さんって、可愛いわよね。」

「もう!靈香さん!」

「ふふ。さて、昼御飯ですね。今から用意しますので暫く待っていてください。」

30分ほど待って食事が出てきた。ご飯に味噌汁に川魚らしき魚の塩焼きと、典型的な日本食だ。

・・・萃香が持っている瓢箪が無ければ。

「ささ、泉希さん一杯飲んでください。」

「いや、この後少し用事があるのですが・・・」

「そう遠慮せずに。」

そう言えば萃香から聞いたのだが、鬼という種族は相手と酒を飲むことで、その相手と友人になるらしい。どんな種族でどんな状況だろうが、「酒を飲みあった友人」として協力したり相談に乗ったり・・・おとぎ話では極悪人の象徴になっているが、実際はとても良い種族だ。

鬼のもう一つの特徴は、はじめて会った人には酒を飲ませないと気がすまない、というものだ。多分、断り続けても死ぬまで飲まそうとするだろう。観念するしかない。

「・・・分かりました。一杯だけですよ。」

「・・・は!？」

ん?なんだ?

「・・・。」

見てみると、霊香さんが萃将さんに無言の圧力をかけていた。何、お客さんにお酒を飲ませようとしているの? 目がそう言っている。

「い、いや。無理言ってすまんな泉希さん。」

「え・・・あ、はい。」

「ここで酒を飲むと萃将さんが危ない、という思考が働き、飲まないことにした。」

人里（1）（後書き）

キャラ紹介

伊吹 萃将 すいしょう

萃香の父親。外見の年齢は30代から40代の男性。里に住居を構えている。大工を営んでいる。角は、萃香と同じ位置。萃香同様、呑んべえなのが玉に瑕。萃香の「萃」はこの名前から取った。

伊吹 霊香 れいか

萃香の母。外見年齢は20代から30代の女性。里に住居を構えている。鬼だが、近所付き合いは良い。角は、勇儀と同じ位置に一本ある。呑んべえではない。ちなみに、勇儀とは友人だったりする。萃香の「香」はこの名前から取った。

もし、この二人の子供が男だった場合、「伊吹 霊将 れいしょう」という名前になっていた。

ご意見、ご感想をお願いします。

人里（2）（前書き）

少し変更点があります。

- 1、慧音先生の口癖を少し変更
- 2、寺子屋が原作と大幅に変更されている。

以上です。ご了承ください。

人里（2）

昼食を食べ終わった。時計を見ると、短針が1の数字の少し右に出ている。

「さて、そろそろ行くか？」

「うん。」

「あら、もう行っちゃうの？」

霊香さんが少し残念そうな声を出す。

「はい。今日は、霊夢に里を案内してもらいますので。」

発案者は三十八である。

～前日の夜～

「なあ、相棒。明日どうせ里に行くなら、霊夢はんに案内してもらったらどうや？」

「案内？」

「そう、2人っきりで観光してき。」

「ええ！？。」

「なんや、霊夢はん？相棒と二人っきりになれてうれしいと思って

るんやろ?」

その後、三十八に「夢想封印」が放たれたのは言うまでもない。

そして、今日。神社を出るとき、三十八が美鈴と並んで見送ってくれた。・・・ニヤついた顔で。

・・・何か嫌な予感がするのは気のせいであろうか?

「希、泉希。」

「ん?」

「どうかした?」

霊夢が不思議そうな顔でこちらの顔を覗き込んでいる。

「すまん。少し考え事していた。」

「?」

霊夢が首をかしげた。・・・最近、こういう行動が可愛いと感じてきたが、元帝国陸軍上等兵がそんなもので良いのだろうか?

玄関に移動し、出かける準備をしていると、萃将さんが近づいてきた。そして、霊夢には聞こえないようにヒソヒソ声で話を始めた。

「泉希さん、頑張ってくださいよ。」

「何の事です?」

「とぼけても無駄ですよ。霊夢さんと付き合っているんですよ？」

「……。」

「……言い返せない……」

「その無言は肯定と考えてもいいですね。」

「……はあ。……そうですね。」

「やはりですか？母さんが絶対付き合ってるってうるさい物でして……」

「誰にも言わないでくださいよ。特に……」

「あの烏天狗には、でしょう？分かってますって。」

「よろしくお願いします。」

そう答えると、何回も頷き、俺から離れた。

「……何を話してたの？」

「い、いや、なんでも無い。」

霊夢にこの事を言ったら、確実に「夢想封印」が飛んでくる……幸い、この後は何も言ってこなかった。助かったのは助かったが、少し悪い気がした。

萃香の実家を後にした後、里を霊夢に案内してもらった。まずは、里の中心部の大通りだ。

「ここが大通り。里の中心部で、南北に通ってる。ここに来れば、大抵のものは揃うと思うわ。」

確かに、八百屋や魚屋、服屋、さらには刀や鎧を売っている店まである。

「ん？・・・確か、あれは・・・」

「どうかしたの？」

本屋の前で見知った顔を見つけた。

「慧音さん。」

「ん？ああ、谷君か。」

「・・・谷君って・・・まあ良いか。」

「何してるんですか？」

「寺子屋で教える教材が無いか探してるんだけど、なかなか見つからなくてね。そちらこそ、二人で何をして・・・ん？二人？」

最初のほうは、疑問を持った表情をしていたが、後半は納得したような顔になった。

そして少し微笑んだ。

「なるほど、そういうことか。」

そう呟いているのが聞こえた。

「谷君、霊夢、散歩しているなら、寺子屋に来てみないか？」

「寺子屋ですか？自分は良いですが・・・霊夢、どうする？」

「そうね・・・後々回るつもりだったし、良いわ。」

「決まりだね。じゃあ、ついて来きてくれ。」

慧音が振り返って歩き出した。俺と霊夢がその後をついて行く。

暫くして、里で一番大きい屋敷が見えてきた。多分、この里の地主が何かの屋敷だろう。

屋敷の門の前に立ち止まって、そう思っていたら、慧音と霊夢がその屋敷に入っていた。

・・・ここが寺子屋？

「何しているんだ？早く入って。」

「・・・あ、はい・・・」

面喰らった。まさか、寺子屋がここまででかいとは・・・

「・・・霊夢、慧音さんは何者だ？」

「慧音さんは、寺子屋の先生で里の守り獣なの。白沢って知らない

？」

白沢・・・知らないな・・・

「簡単に言えば、外の世界の中国にいる聖獣よ。普段は普通の人なただけだね。」

「聖獣・・・」

あの時の姿か？（「異変の始まり」を参照）

この寺子屋は、慧音を含め15人でこの里の子供や妖怪の子供に勉強を教えているらしい。

教師の方も、河童のように突出した技術（メカニック）を持っている妖怪やソロバンができる人間がついている。

ちなみに、生徒の人数は、約200人。内、90人が妖怪である。年齢によって位が違い、一番年下はイ組、一番年長が又組となっている。（イ組は小学校1年、又組は中学校3年。）

その一番下のイ組の教室をのぞいてみると、見知った顔がいた。

「あ、泉希さん。お久し振りです。」

大妖精とチルノである。

「泉希！異変も終わった事だし、決闘！」

「・・・左手を骨折した相手に言う言葉か？」

「そっだよ、チルノちゃん。」

「でも」

そう言われてもだな・・・

「泉希、ちよつと良い？」

霊夢が肩を叩いた。

「ん？なんだ？」

「あの二人、特にチルノと話していると長くなるから、今のうちに逃げましょ。」

チルノたちの方を向くと、大妖精と議論している。確かに、逃げ出すなら今のうちか。

「・・・。」

足音を出さないように、ゆっくりと歩いてイ組の教室から出た。

人里（2）（後書き）

今年の投稿はこれが最後です。次の投稿は、来年一月八日金曜とします。それでは皆さん、来年また会いましょう。良いお年を。

一時人里を離れ・・・

イ組の教室を出た後、寺子屋全体を見て回った。教室は、歴史の教科書で見た寺子屋の風景だった。

また、紅魔館ほどではないが、図書館があつた。そこにある本の大半が「幻想郷縁起」という幻想郷の歴史についての文献だった。「紅霧異変」「春雪異変」等の異変についての事について書かれていたり、その時代にいた人の事について書かれていたりしていた。その中に霊夢もいたのには驚いたが・・・

寺子屋の見学を終えた頃には、時計の短針が2時を指していた。

「どうだった、この寺子屋は。」

寺子屋を出ようとしていたときに、慧音が聞いてきた。

「ええ、ちゃんとした教育設備が出来ているのに安心しました。」

「そうか。お前達が子供を作ったら、ちゃんと勉強させてやるから、安心してくれ。」

「は！？ちよつと、慧音さん！？」

霊夢が顔を真っ赤にして言った。

「ん？どうかしたのか？」

「いや、どうしたのかじゃなくて・・・」

霊夢と目が合った。お互いの顔を赤くした。

「ははは。まあ、お互い頑張りなさい、恋人さん。」

慧音が笑いながら寺子屋に戻っていった。残ったのは、気まずい空気の恋人二人だった。

「・・・。」

「・・・。」

誰か、この気まずい空気をどうにかしてくれ・・・

「おーい、霊夢、泉希。何やってるんだ？」

この声は・・・

「魔理沙じゃない。人里にいるなんて珍しいわね。」

「少しあつてね・・・。」

少し寂しげな顔になった。

「それより、2人とも何やってるんだ？」

「霊夢に里を案内してもらってるんだ。」

「へえ。それなら、香霖堂に行ったのか？」

香霖堂？ああ、森近さんがやってる雑貨屋か。そう言えば、夏祭り

の時から森近さんに全然会っていない。

「いや、まだだ。その前に、香霖堂に行く予定はあったのか？」

霊夢に聞いた。

「無いけど・・・行きたいなら行っても良いわよ。」

よし。決定だ。

「香霖堂に行こう。」

雑貨屋なら何か売っているだろうし、幻想郷の雑貨屋は何を売っているのか気になる。

「丁度、香霖の所に行くところだったし、案内するぜ。」

「ああ、よろしく頼む。」

里を一度離れ、魔法の森の近くに来た。そこには、古い店が一軒立っていた。

「これが、香霖堂か？」

どう見ても、倉庫にしか見えないほど、散らかっている。

「ああ、そうだぜ。おい、香霖！」

魔理沙が、店の奥に言った。返事は無い。

「あり？留守かな・・・おい、香霖。居るか？」

すると、店の後ろから返事が返ってきた。

「魔理沙かい？良い所に来た。ちょっと手伝ってくれないか？」

「えー、面倒くさーい。あ、泉希が手伝ってくれるって。」

は？ちよつと待て。

「どうやって手伝「魔理沙！泉希は怪我をしているのよ！」・・・」

く怒れ霊夢く

霊夢は激怒した。必ず、かの自由奔放な魔理沙を説教しなければならぬと決意した。

・・・あの有名な小説の冒頭が出てきたのは置いといて・・・

「魔理沙、泉希君がいるのかい？泉希君、少し待ってくれるかな？お茶を淹れてくるから。」

「良いですよ。それより、手伝って欲しい事って何ですか？」

「取り合えず、こっちに来てくれないか？」

「分かりました。霊夢・・・」

店の裏に行こう、と言おうとしたが、魔理沙を説教している為、聞く耳を持って居なさそうだ。

しょうがなく、自分一人で行くことにした。

店の裏に行くと、橙色の物体が見えた。誰がどう見ても、日の丸の付いた飛行機
軍用機だ。

「九三式中間練習機。大日本帝国海軍が採用していた練習機さ。」

機体の近くにいた霖之助が言った。何故こんなものがここに？

「多分、外の世界で忘れ去られたんだろう。」

・・・森近さんも読心術が使えるのか？

「そういうわけじゃないさ。ただ、君の顔に書いてあったから分かったんだ。」

「・・・はあ。」

それはともかく、この航空機はどうするのだろうか？売るにしてもこの幻想郷で乗れる人は限られている。まあ、大沢はいるが・・・

「九三式中間練習機かあ。久し振りに乗るな。」

「!?!」

流石に驚いた。まさか、大沢がいるとは思わなかった。

「あややや・・・大沢さん、いくら飛行気乗りだったからって、乗らないでくださいよ。泉希さんにはれて・・・」

近くに文までいた。

「・・・おい、文。何時からついて来ていた？」

「あ、あややや・・・」

「ともかく、大沢、文、降りて来い。」

2人が大人しく降りてきた。

大沢の方は文に無理やり連れてこられたのだろうが、問題は文、特にそのカメラの中身だ。

「文、何時からつけてた？」

「・・・」

黙秘か・・・

「大沢少年兵。お前の上司は何時から付ついて来ていた？」

「は！谷上等兵が寺子屋から出てきた所からであります！」

見事な拳手敬礼をして報告してくれた。軍隊の階級が役立つたのは少し皮肉だが・・・

「よし、ご苦労。下がってよし。」

「は--」

大沢が、もう一度拳手敬礼をして九三式中間練習機の方に向かった。

「お、大沢さん！ちょっと待ってください！」

文も九三式中間練習機の方に行こうとした。すれ違いざまに、カメラを取られた事も知らずに。

・・・軽く、犯罪を犯したが、気にしないおこう。

カメラの中からフィルムを取って、文に近づいて気付かれないようにカメラを返した。

・・・俺には、スリの才能でもあったのか？

「あややや？泉希さん、どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもない・・・」

ここまでうまくいくと、逆に怖くなってくる。

「・・・とすると、君はこの飛行機を飛ばせるのかい？」

「はい。あ、それと、自分のことは大沢と呼んでください。」

「分かったよ。大沢君。」

大沢と霖之助がこの飛行機の事で話していたらしい。

「・・・よし、この飛行機を君にあげよう。」

「え！？良いんですか！？」

「僕が持っていてても腐らすだけだろうし、九三式中間練習機も埃を

被るよりも大空を飛びたいだろうしね。」

「ありがとうございます！」

「・・・俺と文は完璧に蚊帳の外だが、向こうでは凄い事が決定したらしい。」

「・・・おっと、忘れるところだった。泉希君。」

「何でしょうか？」

「この飛行機を店の前に持っていくのを手伝ってくれないか？一人で持っていくのはキツイからね。」

「わかりました。」

そうは言ったものの、二人で押しても動かない。文と大沢が加わってやっと動いた。大沢の話だと、この飛行機は1500kgあるらしい。普通の戦闘機だと、軽くて3000kgあると言っていたから、まだましか・・・

一時人里を離れ・・・（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

刀と銃声

九三式中間練習機（以後、九三式中練）を運ぶのに約30分かかってしまった。妖怪が2人（1、5人？）居てくれたから30分で済んだのだろう。

ついでに言っておくと、店の前に運んだ後も霊夢の説教は続いていた。

「ありがとう、泉希君、大沢君、文さん。お礼に、店の物を一つだけ持っけてもいいよ。」

「本当ですか！？じゃあ、早速カメラを……。」

文が店の中に入っていった。

「自分は九三式中練を貰いましたので、遠慮させて貰います。谷上等兵はどうするんです？」

たいした事もしてないし、俺も遠慮させてもらうか？

「泉希君は2つでも良いよ。怪我しているのに手伝ってくれたんだから。」

「い、いや……。」

「ん？3つの方が良かったかな？」

……これは、素直に貰ったほうが良いな。

店に入っていく大沢に続いて店の中に入った。説教が終わっていたのか、霊夢たちもついてきた。

店の中は、色々な物があつた。日本刀、槍、甲冑等の武具もあれば、鍋や包丁などの調理道具、日本語や英語で書かれた小説（未来の日本のもの）自分には使用用途が不明の物まである。

今、欲しい物は一応ある。片手で使える武器だ。もし、異変が起きても自己防衛ぐらいは出来ないといけない。左手が骨折している以上、三八式は使えない。

出来れば拳銃にしたい所だが、南部式拳銃で「菊花紋撃」を撃ったときに破損してしまった為、拳銃では強度が足りない。かと言って、拳銃以外の片手銃は見たことも聞いた事も無い。

そうになると、銃以外の物を使うしかない。やはり・・・刀剣か？

「ん？」

ほこりを被った1m程の刀が目にとまった。・・・どこかで見たことがある。

その刀を持ち上げ、親指で鍔を押した。はばき（刀身の根元の部分）に「御賜」の二文字が彫られている。

御賜軍刀

陸軍士官学校、陸軍航空士官学校などの兵学校で、優等生のみが天皇陛下から授かる軍刀。

一回写真で見た事はあった。兵学校時代、何としてもこの軍刀を手に入れたいと思ったものだ。それが、今手の中にある。

「霊夢、ちよつと手伝ってくれ。」

「わかったわ。」

霊夢に手伝わてもらい、刀を抜いてみた。刃には多少刃こぼれがあるものの、砥いで貰えば使用は出来る。問題は刀身のほうだ。複数の弾痕と、1つの11ミリほどの風穴が開いている。多分、欧米の軍の銃弾が被弾したのだろう。それ以外にたいした損害は無い。少し気になるのは、弾痕と、少し黒ずんだ柄だ。どう見ても、血痕にしか見えない。

持ち主が撃たれた。そう考えるしかないか・・・
刀を鞘に納めつつ、そう思った。
丁度そのときである。

パアーン

銃声

長く戦場から離れていても、頭の中にこびりついて離れない音・・・
急いで店の外に出た。すると、もう一回銃声がした。魔法の森からだ。

何処の誰だかわからない。だが、誰かが何かと戦っている。

「泉希君、さっきの音は？」

「森近さん！この店にある拳銃を一丁ください！！」

「あ、ああ。わかったよ。」

霖之助が一回店の中に戻り、数十秒で戻ってきた。その間に、御賜刀を腰に差した。

「これ良いかい？コルトM1873と言う拳銃だが・・・」

霖之助の手に握られていたのは、アメリカ亜米利加のリボルバー回転式拳銃であった。しかも、かなり昔のものである。無いよりはましか……

「ありがとうございます！」

受け取った後、森に入ろうとした。

「ちょっと待った！！」

背後から声をかけられた。何かと思い振り返ると霊夢と魔理沙が各々の武器を持って立っていた。

「何一人で危ない橋渡ろうとしてるんだぜ？」

「そうよ。泉希にはちゃんとした仲間が居るじゃない。怪我してるんだから無理しないで香霖堂にいて。」

そう言っている霊夢は、少し怒っているようだ。

「すまないが、俺も同行させてもらうぞ。」

「……無理はしないでね。」

「了解。」

その時、もう一回銃声がした。さっきよりも近い。それに、銃声が日本の物ではない。もしかしたら……

「何してるんだ？早く行こつぜ。」

「あ、ああ。」

「・・・いや、例えそうであろうと助けるのが道理だ。例え・・・3ヶ月前に戦っていた相手だったとしても・・・」

刀と銃声（後書き）

お知らせ

今日から約1ヶ月ほど、投稿を中止します。

高校入試の選一や選二の為です。

あと、小説のストックも無いので・・・

ご了承ください。

それと、もしかしたら短編小説を書くかもしれません。

ご意見、ご感想をお願いします。

一戦交えて迷子

暫く森の中を進んだ。その間何回か銃声がしたが、先ほどの銃声でびたりと止まってしまった。

弾切れか、あるいは

そんな考えが頭の中に浮かび、それを急いで振り払った。

「・・・無事でいてくれよ・・・」

そう呟いたとき、20m前に人影らしきものが走って近づいてくるのが見えた。

please help!! (その人、助けてくれ!)

・・・やはり亜米利加人か英吉利人か・・・
イギリス

「Run straight!! (そのまま走って来い!!)」

今の日本では英語を話すのは厳禁だが、戦前に英語を習っていたおかげで、日常会話ぐらいは話せる。まさか、このようなときに使うとは想定してなかったが・・・

「Yes, sir! (了解!)」

向こうから返事が返ってくる。

「魔理沙! 霊夢! 走ってくる人には攻撃するな! その後ろに居る奴らに攻撃しろ!」

「分かった（ぜ！）」

助ける態勢は出来た。
が、ここで問題が起こった。

「Jap!？（日本人!?!）」

走ってくる欧米人が俺と霊夢を見て警戒したのだろう。急停止し、銃をこちらに構えてきた。

「Don't move!!（動くな!!）」

「Wait! Hear a story of this place!!（待て! こちらの話を聞け!!）」

「Be quiet!!（黙れ!!）」

く・・・聞く耳を持たないか・・・
どうするべきか思案していると、欧米人の後ろに巨大な影が現れた。
ざっと見て2mほどあるだろうか？

「It notes it behind.！（後ろに注意しろ!）」

欧米人が後ろを向く。そして、その顔を恐怖で染めていった。
そこに居たのは、熊のような動物・・・いや、妖怪と言ったほうが
良いだろう。

たしか、下等妖怪だったはずだ。それが、数十匹居る。一匹でも人を殺すのは簡単である。それが群れで襲ってくる恐怖は、それを受けた人しか分からないだろう。

「！？」

欧米人が言葉にならない悲鳴を上げた。

「霊夢！魔理沙！あいつを保護しろ！こっちは妖怪をひきつけておく！」

リボルバー
回転式拳銃を妖怪に向けて引き金を引いた。

バーン

乾いた音が響いた。その直後、妖怪の一匹がうめき声を上げた。

「今のうちに保護しろ！後は香霖堂に戻れ！！」

「え！？ちょっと、泉希！！」

返事を聞く前に霊夢たちとは逆の方向に走る。

妖怪は仲間のうちの一匹を傷つけられたことを怒っているのか、ほとんどがこちらに向かってきた。1、2匹はその場に残っているが、霊夢と魔理沙がいるから大丈夫だろう。

こちらに向かつてくる妖怪は、約15匹。こいつらの力を合計すると戦艦武蔵の総出力に相当する。

流石に一人で相手をするのはきつい、いざとなれば撒く事が出来る。

いくら妖怪だとしても、無益な殺傷はしたくない。それに、拳銃に残っている弾は残り5発。しかも、スペルカードは一切持ってきていない。まさかこのようなことになるとは予想もしてなかった。

「……。」

走りながら、一番近くの妖怪に照準をあわして引き金を引く。また乾いた音がし、妖怪に直撃する。が、妖怪は何も無かったように走ってくる。この拳銃自体旧式で威力が低く、さらに距離もあつたせいであろう。

少し距離をつめ、もう一度引き金を引く。今度は妖怪の左肩に直撃した。しかし、怪我の度合いはかなり軽い。

「……まずいな……。」

このままではすぐ弾切れになる。……撒くか。

近くにあつた比較的細い木に照準をあわせ、連射する。木は支えを失って、妖怪の目の前に倒れた。妖怪がそちらに気を取られているうちに、全速力で妖怪から離れる。

暫く走っていて気付いた事がある。

「……ここは何処だ？」

完全に迷った。霊夢のように空を飛べば簡単に香霖堂へ戻れるだろうが、あいにくそのような能力は持っていない。跳ねれば何とかなるだろうか？

そう思つて跳ねてはみた。が、木の葉の高さを越えても香霖堂らしき建物が見つからない。

霧の湖が見えたが、それだけでは人里の方向はわからない。

「ん？」

森の真ん中に、三階建ての煉瓦造りの家を見つけた。
森の真ん中に・・・家？誰か住んでいるだろうか？
地面に着地し、家のあった方向を見る。かすかにだが、家の影が見える。

「・・・行ってみるか・・・」

妖怪がいたとしても、家に住んでいるのだから妖怪であつても知識を持った妖怪だろう。

一戦交えて迷子（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

本日、選抜一の結果が分かり、区切りとして一話を投稿します。

今日から約1カ月後までは執筆ができませんので、それまで休載です。

ご了承お願いします。

ご意見、感想をお願いします。

魔法の森の館

森の真ん中にある家・・・いや、館と言ったほうが妥当かも知れない。その館の近くまで来た。館の前は広場になっており、落ち葉一つ落ちていない。館のほうも、ちゃんと清掃されている。少なくとも、人は住んでいるみたいだ。

「すみません。」

玄関の扉を叩いた。トントンという木の音がしたが、反応が無い。もう一度叩いてみるが、先程と同様に反応が無い。留守・・・か？

「・・・参ったな・・・」

今日、何回この言葉を言っただろうか？・・・そう思ってもしょうがない。自力で戻るか・・・。

そう思い、この場を離れようとした。

トントン

「・・・？」

誰かが肩を叩いた。後ろから人の気配はしない。気のせいだろうか？

トントン

もう一度叩かれた。気のせいではない。なんだ？
そう思い、後ろを振り返った。すると、そこには一体の人形が飛んでいた。

「・・・？」

妖怪の類・・・いや、そのような感じはしない。では何だ？

「シャンハイ。」

シャンハイ？

「・・・君の名前はシャンハイと言っのか？」

その人形が頷いた。

「なら、この館の主は君なのか？」

今度は、首を横に振る。違うのならば、この館の主は誰なのだろうか？

「・・・この館の主は今は何を？」

シャンハイが森の方向を指差した。森の中に居るのか・・・暫く待つか。

「暫くここで待たせてもらっ方がいいか？」

シャンハイが首を縦に振った。

十分ほど待ったが、一向に人が帰ってくる気配がしない。霊夢とあ

のような別れ方をしたから、霊夢は怒っているだろう。

無理はするなと言われていたのに、あのような行動をしたのに少し後悔しつつ懐中時計を見た。2時50分。

「ん？」

かすかに甘い香りがした。何かと思い、振り返るとシャンハイがコップを持ってきていた。香りからした。紅茶だろう。

「・・・俺にか？」

シャンハイが首を縦に振った。

「ありがとう。」

シャンハイから紅茶を受け取る。実は、紅茶を飲むのはこれが初めてだ。

取り合えず一口飲んでみる。

まず第一印象は「甘い」。砂糖でも入れてあるのだろうか？
やはり、日本茶の方が俺にはあっている。

「あら？」

森のほうから声が聞こえた。やっと来たか・・・

「えっと・・・貴方は？」

そこに居たのは、一冊の本を持った金髪の少女であった。どう見ても外国人である。

「谷泉希、という者だ。少し頼みたい事があるのだが・・・そちらは？」

「アリス・マーガトロイド。アリスと呼んでちょうだい。」

アリス・・・やはり、外国人の名前は分かりにくいものが多い。

「それで、頼みたい事って何？」

「・・・実はだな、香霖堂に戻りたいんだが・・・迷ってしまったんだ。」

「へ？」

これまでの経緯を話した。

「ふーん。それで迷ってしまったの？」

「・・・そういうことだ。」

「ここまで来るのに何分かったの？」

そんな事を聞いてどうするのだろうか？

「分からないって顔してるけど、貴方人間よね？普通の人間なら、この瘴気に絶えられないはずだけど・・・」

瘴気・・・紅霧のようなものか？どちらにしろ、俺には大丈夫だろ

う。

「それなら問題ない。俺は特殊だ。」

神様の息子だからな。と、心の中で付け足しておく。

「そう？なら良いけど。」

「それで、案内してくれるか？」

「色々と準備しないといけないから・・・少し家の中で待っていてくれる？」

できれば急いでもらいたいものだが、案内してくれるのだから文句は言えない。

「・・・分かった。」

そう言われて家の中に入った。が、玄関に入っただけだった。何故なら、床という床にシャンハイのような人形が置いてあり、とても入れるような状態ではなかったからだ。結局、立ったまま待つはめになってしまった。

数分後、アリスが家の中から出てきた。

「お待たせ。ごめんなさい、立たせたまま待たせちゃって。」

少し申し訳無さそうな顔で詫びてきた。

「いや、こういう事は慣れている。別に構わない。そんな事より早く案内してくれ。」

こちらも彼女の事が心配であるし、彼女もこちらのことを心配しているだろう。

「分かったわ。・・・そんなに急がなくても、大切な人は絶対待ってるわよ。」

「・・・？何か言ったか？」

最後の方で何か行っていたみたいだが、聞き取れなかった。

「なんでもないわ。さ、行きましょ。」

「・・・？」

先ほど知り合った女性に、何を言ったのか問いただすのは無礼だと思ひ、そのままにしておいた。

魔法の森の館（後書き）

自分は広島県に住んでいる為、何も被害は無かったんですが、皆様は大丈夫でしょうか？

こちらからは東北地方に住んでいらっしゃる方々には応援しかできません。不甲斐ないです・・・

ご意見、ご感想をお願いします。

帰還

アリスの家を出てから、十分ほどで無事香霖堂に着いた。アリスは俺が礼をした後、そのまままた森の中に入ってしまった。さて、問題はこれからだ・・・。

「みーずーきー!!」

香霖堂にはやはり鬼教官がいた・・・。

「あれほど無理はするなって言ったのに!! あんたは何をやってるのよ! それに、仲間を頼れって言ったのにそれも無視するし! 怪我だつてしてるんだから!! もう少し自分のこと考えなさいよ! (中略) 他のみんなだつて心配してたのよ! も、もちろん私だつて心配してたんだから! (中略) もう、私を不安にさせないでよね・・・泉希に何かあったらうって思うと、私・・・」

だんだん説教では無くなっていき、最終的には泣き出してしまった。これには少々戸惑った。

「不安にさせてすまなかった。許してくれ。」

そう言ったものの、やはり泣き止まない。どうやったら泣き止むのだろうか?

「・・・参った。」

もしかしたら、先ほどの妖怪を全員倒す事よりも困難かもしれない・・・。

「・・・して。」

「？」

霊夢がポツリと呟いた。

「約束して、絶対不安にさせないって・・・」

「約束する。守れなかったらどんな命令でも聞いてやる。」

流石に無茶な命令には従わんが・・・例えば空を飛べとか。

「・・・。」

霊夢が無言のまま抱きついてきた。

「・・・破ったら許さないからね・・・」

「破るつもりなど無いさ。」

カシャ

？何の音・・・しまった！

「あややや、今日はネタが豊富ですね。」

すっかり忘れていた。この場に文がいる事を・・・

香霖堂のほうを向くと、ニヤツと笑っている文と、呆れているその他4人がいた。

だが、心配ないはず。カメラのフィルムは取り外している。

「今日は運が良いです。新しいカメラも貰えたし、ネタも豊富だし。」

新しいカメラ……という事は……あのカメラにはフィルムが入っている……

「さて、今日は帰って新聞の編集をしましょう。大沢さん、帰りますよ。」

そういうと、文は飛び去ってしまった。止めようと思ったが、既に文は点になっていた。

はあ。何故、いとも簡単に秘密がばれるのだろうか……今日は厄日だ……

「え！？文さん、ちょっと待ってくださいよ！……森近さん、また今度来ます。ありがとうございました。」

大沢はそう言つて、九三式中練のほうに走って行った。九三式中練で帰るのだろうか？

数分後、九三式中練が飛び立った。少し危なげな離陸ではあったが……

その頃には霊夢も泣き止んでいた。それはそれでよかったのだが……明日の文々。新聞は見ないほうが良いかもしれない……

九三式中練が飛び去った後、暫くボーとしていたのだが、霖之助が思い出したように話し始めた。

「そう言えば、彼のことなんだが・・・」

彼？ああ、例の外国人兵のことか。

「あれから気絶したまま、奥で寝ているんだけど、どうするつもりだい？」

「どうするつもり、とはどういう意味ですか？」

「簡単に言えば、どこで滞在させるか、だね。」

何処に滞在させる・・・博麗神社は・・・だめだ。三十八と塩野がいる。敵兵だと分かったら何をしでかさ分らない。だが、他に宛が無い・・・どうする？

「それなら、私のところで良いぜ。」

名乗り出たのは魔理沙だった。

「はい！？ちよつと魔理沙、あんたの家の状態を思い出してみなさいよ！..」

霊夢が急に叫んだ。家の状態を思い出せ・・・どういう意味だ？

「大丈夫大丈夫、片付ければどうにかなるって。」

・・・なるほど、大体予想できた。

「それに、霊夢や泉希みたいな黒髪の奴に妙に警戒してたのに、私みたいな金髪は警戒しなかった。この中で一番の適任だと思うぜ。」

確かにそうだ。あいつは欧米人。母国には金髪の人が多い。

「・・・頼めるか？」

「もちろんだぜ！」

助かった。・・・しかし、魔理沙が好き好んでこのような事をする
だろうか？・・・なにか、裏がありそうだ・・・

帰還（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。一度執筆したんですが、そちらのストーリーはあまり納得できなかったので、もう一度書き直していたら一週間が過ぎていました。本当にすみません。

ご意見ご感想をお願いします。

事件は終わって

「君達、これからどうするんだい？」

異変（事件？）が終わり、香霖堂でくつろいでいると霖之助が言った。魔理沙は既に例の人を連れて帰っており、ここにいるのは霊夢と俺と霖之助の3人だけだ。

そうだな・・・日ももう傾いていて空が赤くなってきた。今日はもう帰るか。

その旨を霊夢に伝えた。霊夢も同意し、今日は帰ることになった。そう言えば、帰る前に一つやることのあるのを忘れていた。先に霊夢を店の前に出しておき、自分は霖之助の方に行った。

「森近さん、この拳銃は返します。」

「え？要らないのかい？」

霖之助は驚いたように言った。要らないのではないが、あくまで自衛用の武器があれば良いのである。

「はい。」

霖之助に拳銃を渡した。

「そうか・・・また欲しくなったらいつでも来てくれ。歓迎するよ。」

「ありがとうございます。それでは。」

そう言つて香霖堂から出た。

秋の夕暮れは早いものであり、香霖堂が出た辺りではまだ明るかったのだが、博麗神社へと続く道を登りはじめた頃に急に辺りが見えなくなっていた。

「少し急いだほうが良いんじゃないか？」

「大丈夫よ。この道を通るのは慣れで!!」

言っているそばから何かにぶつかっている。少し笑いがこみ上げてきた。

「痛く……ちょっと、なに笑つてるのよ。」

「すまんすまん。」

しかし、あまり離れてないはずなのに、霊夢の姿が全く見えない。それどころか、自分の姿も目視できない。まるで人為的に作られた闇の中にいるようだ。

そう思っていたら、また何か何かにぶつかる音がして、急に周りが見るくなった。明るくなった、といっても人の姿を確認できる程度の明るさだ。

「ん？」

道のそばにある木の近くに、黒い服を着た少女がいるのに気が付いた。頭をぶつけたらしく、手でさすっていた。さっきのぶつかる音は彼女のものか。

「あいたたた・・・」

「・・・霊夢、あの子は？」

「え？あー・・・なるほど。」

何かなるほどなのだろうか？

「あの子、ルーミアっていう妖怪なんだけど、あの子の能力が闇を操る程度の能力なのよ。道理で急に暗くなったと思ったわ。」

なるほど。

「あと、食人する妖怪だから気をつけたほうが良いわよ。」

「・・・は？食人？」

「ん？あれ、霊夢と・・・お兄さん誰？？」

ルーミア（という名前らしい）がこちらに気付いたらしく、声をかけてきた。

「俺の名前は谷泉希だ。博霊神社に住んでいる。」

「私はルーミア。ねえお兄さん、貴方は食べても良い人間？」

霊夢の言った通り、食人妖怪らしい。

「人間は食べてはいけないものだと思うんだが？」

「へえ、そーなのかー」

・・・妙に間延びした返答だな。しかし、食べても良い人間とはどういった人間だろうか？

「逆に聞いてみるが、食べても良い人間ってどういう人だ？」

「わは!？」

こちらからの質問が来るとは思っていなかったらしく、大いに驚いていた。

「えっと・・・お年寄りじゃあ可哀そうだしかと言って子供も可哀そうだし・・・」

そのまま悩んだまま、何処かへふらつと行ってしまった。・・・なんだったのだろうか？

その後、博麗神社に戻り、いつもの通りの時間に寝た

長かった今日は終わったのだが、この次の日が大変だった。その日の文々。新聞の一面を飾ったのは、予想どおり俺と霊夢の事であった。もう既に幻想郷中にこの情報が広まっているだろう。

幻想郷縁起から抜粋

「この日は大変驚いた。なんと博麗の巫女に恋人ができていたの
ある。友人の教師の話だと、恋人のほうは外来人だという。多分、
里の者は異変がおこった事よりも驚いたのではないだろうか？二人
には未永くお付き合いして欲しいものだ。」

事件は終わって（後書き）

すみません、大変長らくお待たせしました・・・
気が付けば、人里を案内する話からだいぶ離れてしまいました。ど
うしてこうなったのか、自分でも分かりません。

ご意見、ご感想をお願いします。

収穫祭（１）（前書き）

やっと書けた・・・お待たせしてすみませんでした。

高校に入って、合宿に行ったり、部活に入ったりと色々と忙しかったです。

さて、本文をどうぞ。

収穫祭（１）

あの日から一週間と三日が過ぎた。この一週間の間に、俺と霊夢の関係が幻想郷中に広まっている。広めた犯人である文には、（霊夢による一方的な）弾幕勝負があつたのは言うまでも無い。流石にもう懲りただろう。

そうした清々したこともあつたが、一方で少し困ったことが起こつた。妖夢の事である。

三十八から聞いたのだが、向こうも俺の事を密かに想っていたらしい。今回の事で寝込んでしまっていた。謝ってやりたかったが、俺が行くのは悪影響だと思い、柳に白玉楼まで行ってもらった。

晩になって柳が帰ってきたのだが、いたる所に打撲を負っていた。なんでも妖夢の気が済むまで稽古に付き合ったらしい。武蔵で剣道をしていたらしいが、人間対半霊では勝負にならない筈だ。だが、ほぼ互角の戦いだったらしい。

さて、そんなことがあり、今日に至る。今日は、里で収穫祭がある日だ。

6時ほどに起きて、着替えを済まし早速人里に、と思ったのだが・

「三十八さん！こっちとこっちの服、どっちが良いと思います？」

「あー・・・こっちの服がええんやが・・・別にいつもの服でもええんちゃうか？」

「そうですか？でも、お祭りに参加するんですから、きちんとしていかないと駄目だと思うんですが・・・」

そんな会話を耳で聞きつつ、こちらはこちらで自分の作業に集中する。

「出来たー？」

「・・・もう少し待ってくれ。・・・女性の髪をいじるのは慣れないからな・・・」

今、俺は霊夢の寝癖を直している。こういつ日に限って、いつもより寝癖が酷くなっていた。

「泉希、こっちの髪留めとこっちのどっちが良いと思う？」

「ん？ああ、そうだな・・・」

霊夢の前には多数の髪留めが置いてある。どれかを選ぶ、というのは難しい話だ。・・・少し悪戯してみるか。

「どれをつけても十分霊夢は可愛いさ。」

「！？」

「まあ、強いて言うなら　いつもの通りが一番良いな。」

これは、嘘ではなく本心だ。飾りつけをするよりも、そのままの方が綺麗だ。

「そ、そう？なら、いつものにしようかしら。」

「別に強制させる訳じゃない。ゆつくりとどれが良いか考えれば良いさ。」

そう言ってしまったのは間違いだった。結局、この日神社を出た時間は午前11時となってしまった。

そして、霊夢の選んだ服はいつもの通りの服だった。

人里に着いてみると、人妖が関係なく祭りを楽しんでいた。流石は幻想郷、と思いたくなる。

さて、この祭りの会場の場所を説明しておく、人里の北方にある500m四方の広場で行われている。

そこで、約10店舗ほどの屋台が開かれていた。

「・・・で、なんで柳が屋台をやってるんだ？」

今、俺達が居るのはこの収穫祭で開かれてる屋台のうちの一つ・・・柳の店だ。朝からいないと思っていたが、まさか屋台をやっているとは思いつかなかった。

「この幻想郷で、海軍料理・・・少なくともカレーは知られていなかったけえ、外の料理として知らせてやろうと思ったんだじゃがのう・・・。」

「どうかしたのか？」

「みんな、興味をもってくれるんじやが、こうて（買って）食べてはくれんのじや。げに（やっぱり）、得体の知れない物じゃけえかのお。」

「・・・まあ、不気味がるのはしょうがないと思うけどね・・・」

霊夢が、良く分かる、という表情をしながら言った。

確かに幻想郷の人から見たら、海軍料理は食べ物なのは分かるが、美味しい料理かは分からない。

実際、俺が南方に出兵する前に南のとある島に行った時、その島にいた人々から宴会に誘われたのだが、その時に出了た料理は、美味しいのか不味いのか、判断しかねる料理で、正直な所食べたくは無かった。・・・まあ、食わねば国の恥であり男の恥だと思い、食べてみたのだが、なかなか美味だった。

「ここの料理が売れる何か良い案がないかのお・・・。」

柳は苦笑しながら言った。

収穫祭（１）（後書き）

ご意見、ご感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3228n/>

東方Project 帝国陸軍上等兵の幻想入り

2011年9月1日16時31分発行